

彼と彼女はそうして対
等になる

かえるくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八幡と陽乃のお話です。友達になった二人が色々なことを考え、思いながら進んでいきます。

八幡のキャラが少し違ってきます。

更新は週2、3程度だと思えます。はじめて書くので至らないところも多いですが頑張ります。

目次

102

意を決して八幡は陽乃と対談する

1

意を決して八幡は陽乃と対談する2

16

その帰り道、八幡は少しだけ素直になる

29

八幡は新しい理由を得る

40

八幡はやはり陽乃にはかなわない

54

二人は買い物をする

71

旅の前に厄介事はやってくる

84

八幡は旅の始まりを楽しんでいる

ようやく旅の一日目が終わる

117

八幡は彼女の話を書く

134

八幡は動くことを決意する

150

彼はとことんついていない

165

さつそく厄介事

183

陽乃はよくわかっている

198

彼女は思いの外図太い

217

事態は丸く収まるものである

232

季節は冬になった

245

夢の国へ

259

そしてそれぞれが動き出す

274

彼は踏み出せない

294

親の心子知らず、逆もまた然り |

そして彼と彼女は…… |

意を決して八幡は陽乃と対談する

今日は土曜日。にもかかわらず俺は今、大きめのショッピングモールまで来ている。誇り高き出不精比企谷八幡の名が泣くね。明日は槍でも降るのだろうか。と、内心自虐ばかりしているが、実際読む本がなくなったのでその補充及び新刊のチェックのために本屋に来ただけである。

秋も中頃まで来ており、なかなか涼しくなってきた。今日も外出するには絶好の日和だろう。家を出るときは少し億劫で重かった足も今ではずいぶんと軽い。

先日ごたごたがありまくった文化祭がようやく終わった。もう凄い大変だった。高校に入ってから一番頑張ったまでである。うちの部長は一人で全部しようとするし周りは見えてないし、委員長は使えないし。最後の事件のせいで俺の悪評は学校中に広まるし。俺にだけ冬が早めに訪れたみたいだね。

しかし、我ながら迅速で効率的でうまい方法だったと思うのだが周りにはそうではないらしい。確かに今の環境に全く不快感を抱かないと言えば嘘になるが、傷ついているかといわれれば否だ。今更嫌われたところでダメージはないに等しいし、事情を知っているやつらは察して俺に深くではないがそこそこ関わってくれる。迷惑をかけているの

で申し訳なく思っているが同時に感謝もしている。よって今の環境に不満はない。むしろ今まで通り接してくれる存在がいることに少なからず喜びを覚えている。主に戸塚。やはり戸塚は天使だ。あと材木座とか川…、サキサキとか。

平塚先生は「誰かを助けることは、君自身が傷付いていい理由にはならない」「君が傷つきのを見て、痛ましく思う人間もいる」といったが、実はそこに関してはこちらよつと癪だったりする。大体、今回こんな行動をとらないといけなくなつた原因の一端は先生にある。まず委員長の補佐の依頼を奉仕部に持つてきたこと。普通は生徒会がすることじゃないかなと思うんだが。次に委員長長の暴走を止めなかつたことか。ぶつちやげ文実があの人数になるのは異常であり、通常先生が何かしらアクションを起こすべきだろう。あの時点で委員長に指導の一つや二つしておけばこんなことにはならなかつた。

更には、どう考えても連れ戻すのは難しいのに俺に行かせたことだろう。まず俺が正攻法をとって上手くいくと思つていたのだろうか。それは今までの俺を見ていればあり得ないことは明白だ。恐らく頭のどこかで俺があんな方法をとることは分かつていたはずだ。それでもつて最後にあの言葉である。イラツと来たが少なからず恩はあるし先生なので顔には出さなかつたが。

雪ノ下に関しては考えるまでもない。彼女がまだ幼かつたという点に尽きるだろう。あと人付き合いの不得手さが災いしたくらいか。

そして一番の原因はあれだ、陽乃さんだ。委員長はいい様に乗せられ、雪ノ下は強く出れない。というか誰も止められない。あの人が作った厄介事を全部俺が処理したと言っても過言ではないだろう。なんか最後のやり方に關してはなんか満足そうな顔したけど。いつか絶対仕返ししてやろう。いや、やっぱそのあとが怖いしやめとくかな。どうしようかな。

まあ要するに、手札の少ない俺に頼るならそちらもそれ相応の覚悟をして欲しいと言うことだ。第一、痛い目を見る俺自身が気にしていないならそれで良い、とはならないのか。向こうが勝手に俺が傷付いていると思つて勝手に傷付いているだけで、俺そんなに悪くなくね。え、配慮が足りないって？ なら頼るなよつて話。

つらつらとそんなことを考えているうちにいつの間にか本屋についていた。こうやって本をひたすら眺めながら本屋を巡回するのは心底楽しい。時間が過ぎるのがあつという間である。

それなりの量の本を購入して本屋を出る。さて、帰ろう。早く読みたいからさつさと帰ろう。目的は果たしたから帰ろう。帰る、いい言葉だ。こう、なんとというか、安らぎを与えてくれるというか。こればかりは外に出ないと味わえないのでたまには外出するのもいいな。

頭の上に音符マークが出ていそうなテンションで駅に向けて歩いていると、

「あれー、比企谷くんじゃん。なんかすごい楽しそうだけど。よし、そのテンションの勢いでお姉さんとお茶しよう！」

後ろから突然聞き覚えのある声が聞こえてきた。つい最近迷惑かけられまくったどっかの誰かさんの声にそっくりだ。でもまあ気のせいでしょう。知らない知らない。八幡なにも聞こえない。歩みは止めてはならない。さあ進め！

「ぐええ」

襟首捕まりました。逃げられなかったか。

「ちよつと無視しないでよ。せつかく綺麗なお姉さんが誘ってるのに。」

「どうも陽乃さん、奇遇ですね。お元氣そうでなによりです。では、この本たちが読まれるのを首を長くして待っているの、それに応えるために早く家に帰らないと。またの機会に」

手に持っている紙袋を掲げて見せながら再び帰るモーションにはいる。

「相変わらず往生際が悪いなー。おとなしくついてきてくれないと泣いちゃうよ？」

いや、どこのジブリの大きな赤ちゃんだよ。

「それ、一番恥ずかしい思いするのあなたですけど」

「いやいや、綺麗な女と目の腐った男がいて女の方が泣いてたら周りはどう見るかな？」
なにそれ理不尽。俺可哀想。そんな俺にいいことないかなー。来ないか。たった今

目の前に災いがあつたわ。

「で、何ですか？ 茶くらいだったらくさんいるお友達（笑）でも呼び出せばいいじゃないですか。俺は遠慮しときたいんですけど。」

「ちつちつちつ、こういうのは偶然出会ったからいいのだよ。というかさっきのセリフの一部に明確な悪意を感じただけど」

「き、気のせいじゃないですかね」

やばい、さっきまでしてた考え事のせいですついでしてしまつた。

「それにさっき名前読んでくれたよね。どうしたの？ どういう心境の変化かな？」

さらにやばい、脳内だと雪ノ下と雪ノ下さんじゃめんどくさいしごちゃごちゃするか
らいつも名前で読んでたのがつい出ちゃつた。てへぺろ。うへ、きもい。

「それもきつと空耳ですよ、雪ノ下さん。それでお茶ですが、あまり気乗りしないので丁重にお断……、いや少しくらいなら付き合いますよるか」

俺の意外な返答に陽乃さんはちよつとしたアホ面をかましている。うわ、なんか可愛く見える。危ない、騙されてはダメだ。

「え、なんかいつになく潔いというか、素直というか。すごい不気味なんだけど、なんか悪いものでも食べたの？」

「失礼な」

ただチャンスだと思ったただけだ。何かしらか仕返しするにも情報がある。この人の情報を持っていて損はないだろう。少しでもつかめればいい。本当はかなり迷ったけど、覚悟を決めよう。

「ま、気が変わらないうちに行こうか。実は聞きたいことあつたし、すんなりついてくるならそれに越したことはないかな」

いつもの魔王じみた笑みでそんなことを言う。待つて、ここで会つたのつて本当に偶然？　なんか不安になつてきたんだけど。

そうして二人して近場の喫茶店に入り角の席に通される。どうせなら一人でコーヒーでも飲みながら本読みたかつたな。

「なに頼むか決めた？」

「ええ、まあ」

そう応えると陽乃さんは店員を呼びオーダーを済ませる。俺はコーヒーと、少し小腹がすいていたのでモンブラン、陽乃さんはコーヒー、チョコケーキをそれぞれ頼んだ。やつぱ、ついてきたはいいが気まずい。恐らく俺が一方的にだが。まあ女性と一対一でこんなところ来るなんてないから仕方ないよね。震えてないよね？　こんなんでも目的果たせるのかね。

「そういえば比企谷くん、最近学校どう？」

唐突にそんなことを聞いてくる。

「まあ、普通つすかね。可もなく不可もなくって感じですか」

そう応えるとちよつと悪い笑みを浮かべてさらに聞いてくる。

「それ本当？ あんなことしたのに特になにもないの？」

「確かにちらほら影口されたりとか噂広まつたりはありますけど、俺の学校生活にはなんの支障もないですよ。なんだかんだで話しかけてくれるヤツもいますし」

「それってガハマちゃん？ 浮気はよくないな」

「確かに含まれてはいますが、他のやつらの方が俺的に嬉しいかな。あいつはいちいち俺の影口に反応して微妙な顔するので、心配してくれているのはわかるんですが逆に俺が毎度悪いことした気分になるからぶつちやけ少し鬱陶しいです。俺は気にしてないのに、気にさせてきますから」

「なんかずいぶんと辛辣なこというのね。まあその様子ならガハマちゃんの方にいく心配はないのかな？ 雪乃ちゃんと仲睦まじくやりなよ」

意外、と言いたげな表情からニヨニヨ顔になって言ってくる。

「いやいや、それも有り得ませんね。雪ノ下と仲睦まじくなんて、第一メリットがない」
「え、私の弟になれるよ！」

おい、一番最初にそれを出すのはいかがなものかと思うぞ。雪ノ下関係ないじゃん。

「いらぬですよ。先の件で明確になりましたけど、自分の力量も量れずに過信してける人と付き添うなんてしたくないですからね」

「またまた酷いこと言うね。まあ否定はできないけど。今回のことで思い知ったんじゃない?」

「さあ? それがわかるのはまた違う案件が来たときでしょう。というかそれが文化祭であれこれやった理由ですか」

「まあね、でも半分かな。あと半分は君が面白いことしないかなーと思って」

なんてことをいつてきた。全くこの人は、おかげで凄い大変だったんだから。

「そうですか、で、ご期待には添えました?」

「そこそこかな?」

おい、そこそこかよ。あんなに頑張ったのにそこそこって、この人の心底面白いことって何? 地球が減ぶとか言わないよね?

「そこそこって、どんだけ苦労したと思ってるんですか。てか、そこまでして妹に気づかせようってだいぶシスコン拗らせてますね」

「君だけはそれ言われたくないな」

そう言つて陽乃さんは苦笑いを浮かべる。そんな彼女に俺は言葉を吹っ掛ける。

「それ本気でいつてます?」

「ん、どう言うことかな？」

本当に意味がわからないといったように聞き返してくる。

「俺が本当に純な気持ちでシスコンやっていると思っているんですか、という意味ですよ」

「え、違うの？」

「逆にそうだと思います？」

今度はがつつりアホ面をかましている。う、やつぱり可愛いな、いつものギャップのせいかな。そうだ、これを写真にとつてしまえば弱味に……なるか？　なんか逆に人氣倍増しそうだな。やめとこう。

「なんか意外すぎて言葉がでないや」

そうしてしばらく沈黙が続く。そのうちに店員がやってきてケーキとコーヒーを置いていった。早速ケーキをつついてコーヒーを飲む。美味しい。さすがにケーキ相手にコーヒーは甘くてできないからブラックだ。つついては飲むを繰り返していると陽乃さんが口を開いた。

「さっきのこと詳しく聞いていいかな」

妙に真剣な顔をしている。これはいい感じに弱味を知れそうか。俺とて最初からなんの見返りもなしに知れるとは思っていない。それにこの人に話すことも吝かではな

い。

「ええ、構いませんよ。むしろこんなこと話せる相手は俺の知り合いにあなたくらいでしょう」

陽乃さんは、俺のそんな言葉に少し驚いていたが俺が話し出すとまた真面目な顔になった。

「ご存じの通り俺は今まで多くのいじめを経験してきました。その原因は様々です。単に目が腐っているからとのけ者にされたこともあれば、特にこれといった理由もなくやられたこともある。中学の時のなんかは主に俺のせいですかね。さくつと勘違いしちゃったり自己顕示欲が暴走したり」

「まあそんないじめを誰に頼ることもできず乗りきった。先生や親は役に立たなかったし、クラスメイトは触らぬ神に祟りなし状態。まあ、人間関係築けなかったのはこちらの落ち度ですが」

一旦しゃべるのをやめてコーヒーを飲む。

「そんな中、俺を唯一気にしていたのが妹の小町でしたよ。その行為自体は感謝しています。しかし、素直に受け取れるかは話が違う。俺は小学生に上がった頃から親に甘えられなくなった。親が小町ばかり溺愛するようになったからです。それでも最初の頃は俺も一緒に出掛けたりしました。初めは俺も楽しんでいたと思います。」

「しかし、いじめを経験して人を見ることに長けていくにつれ、俺と小町との扱いの間に明らかな差があることに気づいた。むしろ俺は邪魔のようだった。そう分かってからは俺はついていくのをやめました。案の定親もすんなり受け入れましたよ。次からは誘われることもなくなりました。それでも自分は親の脛かじって生活してる上、一応育てはくれているのでそれなりの感謝はしています。ちよつと話がそれましたね」

「で、そんな親の寵愛を一身に受けて育った小町に大丈夫か、なんて心配しているような哀れんでいるような顔をされて、それを素直に受け取れると思います？」

さらに続ける。

「昔、小町家出したことあるんですよ。その理由が、家に誰もいないのが寂しいから、だそうですよ。もうね、笑いしか出ませんよ。そんなんで家出、おまけに俺が一人でゆつくりできた帰りの時間も奪われ、家に早く帰らないといけなくなりました。そんなヤツに心配されても嫌みかってなりますよね」

「でも小町に罪はない、あいつが悪い訳じゃない。あいつ自身が何が出来るか考えた結果、今みたいに俺のことを理解しようとしてくれる、出来る限りそばにいてくれる。そんな存在が愛しくない訳がない。でも、それと同じくらいに妬ましく羨ましい。」

「じゃあどうするか、そこで俺が選んだのが、嫉妬なんかの負の感情を押し潰すくらい過剰に小町を愛でることです。そうすることでしか制御できなかつた。どうです？ 全

然純じゃないでしょ？　こんなの、誰にも言えませんよね」

そう締め括ってコーヒーをすすする。俺の長い独白を静かに聞いていた陽乃さんが聞いてくる。

「なんでこんな話を私に？」

少し不安が滲んだ顔だ。いつもの仮面はどうした、漏れ出てますよ。

「いや、あなたも似たようなものかと思ひましてね」

陽乃さんは黙ったまま表情を変えない。俺はさらに続ける。

「昔から親の都合に付き合わされて、ろくに自由を与えられなかった。いや、そんなことを思わせないような環境で育てられた。それに対して妹は、姉の自分が大体のことを請け負っていたおかげでそれなりの選択肢があった。そのくせに妹は自分の後ばかり追ってくる。そんな妹に、こんな親に作られたような仮面の自分を追ってきてくれる嬉しさと、同時に自分の欲しかったものを棒に振っている妬まし……」

「やめて！……もうやめて……わかってるから……」

突然俺の言葉を遮るように声を上げた陽乃さんが弱々しく続けた。急な大声に少しばかり店内がざわめくがすぐに落ち着いた。

「ごめん、急に大声出して」

「いえ、こちらも無神経でした、すいません」

落ち着きを取り戻した陽乃さんが謝ってきたのでこちらも謝り返す。ちよつとやり過ぎたか。ここまで取り乱すとは思わなかった。

「凶星を突かれて取り乱すなんて私もまだまだだね。まさか比企谷くんここまでやられるなんて思いもしなかったな。仮面を一発で見抜いたときはなかなかやるかなと思っただけど、ここまでとは」

「いや、そこまでじゃないですよ。なんとなくあなたの立ち位置や妹への態度が俺と重なるところがあつたからそう思っただけです」

「それでもだよ。こんなこと生まれて始めてよ。それで君はこれに関してどう思う?」「どう思うとは?」

よくわからなかったので聞き返す。

「君はそんな気持ちで妹ちゃんというわけじゃない? 自分が嫌になつたり、やつてられるかつてなつたりしないの?」

なんかものすごく意外なことを聞いてきた。陽乃さんでもそう思うことがあるんだろうか。なんか陽乃さんの魔王像が崩れていくな。

「なるほど、確かにこんな気持ちでいることに申し訳なくは思ってます。が、別に俺はできた人間ではないですから、綺麗な折り合いの付け方なんてわからない。それに矛盾してるのに折り合いがつかうわけがないですからね。それなら両方とも飲み込んでプラス

でマイナスを押し潰そうってなつたんです。今では時間がたつたつてのもあつて普通に出て来るようになりまししたし。といつてもたまに再発しますけど」

「そうなんだ、君は大人なんだね」

「そういつて、私はどうしたらいいのかな、とボソツと呟いた。

「別に今のままでいいんじゃないですか？」

「そういうと少しムツとしする。」

「今困つてるからいつてるのに」

「困る要素ありますか。妹の成長のためにあれこれやつてるみたいですけど、それと同時に羨んでも妬んでもいいと思いますけど」

「んー、でもなんか嫌なんだよね。自分が負の感情を抱いちやうのが嫌なのかな」

「つまりは純な気持ちで妹を思いたいと？」

「まー、そういうことなのかな？」

「大体、人間が純で人と関わられるわけじゃないじゃないですか。どんなに良好な関係を保っている相手でも何かしらの負の感情は抱くものですから」

「確かにそうだけど、んー、納得いかないな」

「なんでそこまで純に拘るんですか？」

「ふむ、なんでだろう。ちよつと当ててみてよ。あーそれだ、つてなるかも」

そういつてクスクスと笑う。またこの人は唐突に無茶なことを言うんだから。

「え、あまり期待しないでくださいよ。それと鵜のみもしないって約束するなら。俺のせいで勘違いしてどうのこうのとかやですから」

「それでいいよ。さすが自己保身には抜かりないね」

「俺の特技のひとつですから」

「その割にはこの前の文化祭は捨て身が多かった気がするけど」

そんなことを小馬鹿にしたように言ってくる。

「誰のせいですか誰の。だいたい文化祭中止とか前代未聞でしょ。それに仕事でしたから、全体を中心に考えたままでです」

「まあそれは置いといて、どうしてだと思おう？」

「そうですね……」

意を決して八幡は陽乃と対談する2

あれからしばらく考えている。なぜ陽乃さんが純に拘るか、確かに純に人を思うことは素晴らしいことだろう。しかしそれはかなり難しい。というか不可能に近い。それでもなお拘るとなると、

「なぜ純に拘るのか、で考えてもなにも思い付きませんね」

「そっか、今の君ならこう勢いではばつといけるかなと思っただけだな」

陽乃さんが少し残念そうな顔をしてそういった。てか、だいぶ踏み込んだ話してるけどこの人はいいのだろうか。

「今更ですけど、俺とここまで深い話してもいいんですか？」

「うーん、まあね、私もこんなことになるなんて微塵も予想してなかったけど、始めてだったんだよ。私のことに関してそこまで分かって、それでいて話してくれた人が。それに君も話してくれたからね。あれ聞いたらいいかないかなー、って。それにチャンスだと思っただ。今までずっと私の中でモヤモヤしてたものを晴らせるかもしれない」

そんな事を真面目なトーンで陽乃さんは語った。それはつまりこの現在、今という状況において……

「それは、現時点で俺を信用してくれてると解釈していいんですか？」

「ここで俺がうじうじ考えても仕方ないので思い切つて聞いてみることにした。」

「まあ、そうだね。君を信じてみてもいいと思つたかな。こんなこと静ちゃん以来だな。むしろ境遇を加味すればそれ以上だよ」

陽乃さんは微笑んでいた。そこにはいつもの仮面はない。なら、ここで俺がいうことはひとつだろう。

「わかりました。俺もあなたを信じましょう。雪ノ下陽乃が偽りなくそういうなら充分にそうする意味がある。というか、俺がそうしたいと思つた、でいいですかね」

俺も笑みを浮かべながら応える。あまり慣れてないけどちゃんとできてるよね。心配だな。

「そう言つてくれてありがとう。これで君は君の、私は私の意思で互いを信じることになつたから、何があつても自己責任だね。あと、その気持ち悪い顔やめた方がいいよ」
やっぱり？ 無理だつたみたい。

「これでも頑張つたんですけど酷いこと言いますね。まあ、それで問題ないですよ。では、さつきの話の続きですけど……」

さつきの話の続きをしようとしたところで陽乃さんに突然言葉を切られた。

「ちよつと待つて！ その、たつた今君と私は……、何て言う関係になつたの？」

「む、確かに言われてみれば奇妙な関係ですね。これはなんて呼ぶんでしょう」

「んー、そうだねー、と、友達とかでいいんじゃない？ どう思う？」

しどろもどろに陽乃さんが答える。

「友達、ですか。俺、今までに友達なんてろくにできたことないからよくわかんないんですけど、こんな契約みたいなことをするもんなんすかね」

率直な疑問を述べてみた。すると陽乃さんは苦笑いを浮かべて言う。

「いや、普通じゃないよね。でもまあ、変わり者の私たちだしそれでいいんじゃない？ それに私も友達（笑）はたくさんいるけどこんな関係になった人は今までにいなかったし」

最後の方は悪い笑みを浮かべている。うわ、絶対最初のやつ根に持つてるよこの人。

「そう考えるとあれですね。雪ノ下さんって新型のポツチだったんですかね。精神的ポツチというか」

「なにそれ、なんかすごく不名誉な肩書きなんだけど。なのになんかうまく否定もできないなんて。て、そうじゃなくて、話そらさないですよ。せつかくこういう関係になったんだしさ、名前で呼び会わない？ 八幡？」

そういつて急に名前を読んでもくる。うわ、やばい。なんかドキドキする。女の人に名前呼ばれるのって初めてじゃね。あんま隙見せるとこの人調子に乗りそうだからここは気を引き締めて……

「ん、なんか顔赤くない？　もしかして綺麗なお姉さんに名前呼ばれてドキドキしちゃった？　全く八幡はうぶだなー。これからこの陽乃ちゃんの手取り足取り教えてあげるから慣れていこうねー。ほら、試しに呼んでみ？　ほら、ほらー！」

な、言わんこつちやない。大体なめてもらつては困る。こつちは脳内では常に名前呼びなのだ。今更声に出すくらいなんの問題もないぜ。

「は、陽乃さん……」

あれ？　おかしいな。今ちよつとつかえなかつた？　これが脳内とリアルでの差か。でもこれくらいならなんとか、慣れるのも早そうだな。

「え、いやいや。違うよ。呼び捨てに決まつてんじゃん。呼び捨て。さんはいらないよー。さあ、もう一回いつてみよう！」

はい、俺の甘い考えは一瞬で霧散しましたー。近所の塀がベルリンの壁になつちやつたよ。マジかよ。無理じゃね？

「こら、なに黙つてんの。そんな泣きそうな顔してもダメだから。さつきまでの余裕はどうしちやつたの？　ほら、言つてみ、陽乃、repeat after me　陽乃

はいー！」

いや、この人調子乗りすぎでしょ。てかなに、途中の英語めつちや発音いいんだけど。なんかイラツと来るな。

「はあ、なんかあなた相手に恥じているのも馬鹿らしくなってきましたよ。陽乃、ちよつと調子乗りすぎです。落ち着いてください」

「あー、吹っ切れちゃった。ちー、つまんないの。弄りがいあったのになー。どうせなら敬語もやめてくれればいいのに」

「なんか不味い人と信頼関係築いちゃったかな……。敬語に関してはそのうち取れるままで気長に待つてください」

「まあ、今はそこで妥協してあげようじゃないの。名前呼びだけだけ」

「ありがとうございます。俺も結構精一杯なんですよ。それに今から陽乃と話をしなくちやいけないし、俺今日ちゃんと帰れるかな？」

「なんか心配になつてきた。既に凄い疲れてるんだけど。大丈夫かな？」

「そうなつたら私がちゃんと八幡の家まで送つてあげるから安心していいよ」

「いやそれ全然安心できないですよ」

「大丈夫大丈夫。ちよつとしか変なことしないから。膝枕とかどう？ 魅力的じゃない？」

む、確かに。しかしなんかとんでもない見返り要求してきそうで怖いな。

「遠慮しときます、見返り怖いんで。なんか休みとか全部持つてかれそうじゃないですか」

休み失うとかマジ恐怖。なくなったら八幡もう学校いけないよ。

「えー、ちよつと先に言わないでよ。折角毎週遊んでもらおうと思つてたのに……。じゃあ半分だけ、土日の片方だけでいいからさ、お願い！」

マジだったよこの人。

「いやいや、俺から休み奪うなんて千葉県民からMAXコーヒー取り上げるようなもんですよ。一大事です」

「いや、それさ。別に大したことなくない？ ならオツケーてことかな。やった！ なら早速来週のこと……」

「待て待て待て！ いやMAXコーヒーなくなるのは大問題でしょ。それに見返り要求されるようなことまだされてないし、それにこれから陽乃に助言？ 的なのしようとしてるんだから普通俺が要求する立場ですよね」

つい大きな声が出てしまったが俺は悪くないぞ。ごり押そうとした陽乃が悪い。

「八幡は友達の私に見返りを要求するのね。そんな小さい男だとは知らなかったわ。きつと酷いことされちゃうんだ」

陽乃はおよよと口で言いながら涙をぬぐっている。いや、あなたに言われたくないんですけど。それにあなたそんなキャラでしたっけ。もうなんだよこの茶番。

「はあ、いい加減話を戻しましょう。脱線しすぎです」

「確かにそうだね。ちよつと覚悟が足りなくて誤魔化しちゃったかな」

陽乃は申し訳なきように弱々しく笑った。それに対し俺は真面目に切り出す。

「これから俺も思うこと真剣に話すんで、陽乃もそれ相応の覚悟をしてください。別に俺の言うことが全てではないので違うと思ったら遠慮なく否定してくださいね」

「わかった。それじゃあ、再開しよう。覚悟はできたわ」

少しの沈黙のあと俺は語りだす。

「先程もいったようになぜ純に拘るか、で考えても見えてこない。ならその逆を考えてみればいい。陽乃は純でありたい、つまり不純になりたくないと考えることができませぬ。じゃあなぜ不純になりたくないのか、俺が一番可能性があると思うのはあなたが、不純で人と関わることを極端に嫌悪しているから、だと思いました」

「陽乃は幼い頃から親につれられて数多くのパーティーなんかに行つたそうですね。恐らくそこで腐るほどに人間の嫌なところを見てきた。権力欲しさに近づく者、胡麻をする大人達、陰で文句を垂れる人、挙げればきりが無い。そして幼いながらに人間の汚さを理解してしまった」

「ただ、そこで終われば問題はここまで大きくならなかった。不幸だったのは、あなたが親に理想通りの振る舞いを強いられたこと、そしてそれを上手くこなせてしまったことだ。長年続けているうちに陽乃にとってそれは当たり前になり、人との関わり方も気付

けばそんな大人たちと似たようなものになっていた」

「当たり前だと思えますよ。人は通常多くの失敗や成功を重ねて人付き合いを学ぶ。そんな年頃に上手くいく悪手を知っていて使いこなせればそれに染まってしまうのは当然です。で、気付けば自分もあんなに嫌悪していた大人たちの仲間入り。とりあえずここまでで何かありますか？」

陽乃は途中から目を閉じ、若干顔を伏せながら聞いていた。その体勢のまま小さく、続けて、と呟く。それを聞いて俺はさらに続けた。

「知らないうちに自分の嫌いなものの同類になってしまった貴方は絶望しシヨックを受けたでしょう。そんな時に気づいたんじゃないですか？ 雪ノ下雪乃の存在に。姉として、妹を大切に思い、愛せるんじゃないかと。いつも自分を追いかけてきた可愛い妹相手なら、なんの打算もなしに相手に出来るんじゃないかって」

「そうすることでまだ自分が完全に仲間入りした訳じゃないと証明したかった。陽乃が陽乃自身を大嫌いにならないための最後の砦が、雪ノ下雪乃なんじやありませんか？ しかし薄々感じ始めていた、自分の望む環境にいる妹への羨望、嫉妬に。でもそれを認めるわけにはいかない。認めてしまえば雪ノ下への気持ち綺麗なものでなくなるから。自分が自分を取り返ししのつかないくらい嫌いになるから」

「だから妹の雪ノ下に、姉だから妹の心配をして、という理由で色々やって来た。姉だか

ら妹に家のしがらみが向かわないように一身に背負ってきた。そうすることで負の感情をかき消そうとしたんじゃないですか？　そして最近になつて誤魔化しきれなくなつてきた。理由は雪ノ下が奉仕部という居場所、由比ヶ浜という理解者を得たから……」

「またしても妹は自分の欲しいものを手にいれた。それなのに、そんな環境を作るのに身を削つた自分に対しては邪険で、毛嫌いする。もう押さえられるわけありませんよ。押さえても押さえても溢れ、こぼれ出てくる負の感情を認めないわけにはいかない。しかしどうしても認めるわけにもいかない。どちらにも進めない板挟み状態です。現状がこれなんじゃないですか？」

俺の長い語りを静かに聞いていた陽乃が顔をあげる。目には涙が滲んでいて、今にも崩れてしまいそうだ。そんな表情のまま口を開いた。

「うん、君の言つてゐることは間違いないよ。むしろかなりの射てると思う。でもさ、もうわかんないんだよね。自分がどうありたいかとか、好きか嫌いかとか、どんな人間かとかさ。もう全然わかんなくなつたんだ。本当に雪乃ちゃんを大切に思つてゐるのかすらも」

「どこを見ても闇ばかり。何処へ進めばいいかわからない。そんな中、親の敷いたレールの上は都合がよかつたんだ。言われることをやればいい、ただそれだけ。でも全然楽

しくなかった。こんなべらべらな自分じゃ、なんにもない自分じゃ面白いことを作り出せなかった。だから外に求めたんだ。自分を楽しませてくれる人いないかなーって。雪乃ちゃん面白いことやつてないかなーって」

「そうこうしてるうちに雪乃ちゃんの周りに八幡やガハマちゃんが現れてさ、ほしいものを手にいれて、終いにはもうほとんど私の背中を見てないと来た。きつかったな。もう誰の中にも私という存在がない気がして、本当に真つ暗だった。そんなときに、今日、君と会ったんだ」

「もしかしたら八幡ならこんな私を見透かしてくれるんじゃないか。それで嘲笑されても、失望されてもいい、君が私という存在についてちゃんと知ってくれるという事実がほしかったの。それだけで十分だったのに、君は、自分から理解しようとしてくれた、こんな、面白くもない私のことを、信じるってしてくれた」

陽乃の目から涙がこぼれ出す。

「本当にありがとう。救われたよ、君に。これで少しは前に進めるのかな。雪乃ちゃんに拘らなくてもよくなるかな。もう十分だよ。ありがとう」

そういつて陽乃は優しく微笑んだ。想像以上だった。普段は飄々としている彼女は、こんなにも大きなものを抱えていた、こんなにも弱々しい普通の女の子だった。それを今の今まで押し隠していたのだ。そうか、これが雪ノ下陽乃の強さなのか。陽乃は俺の

ことを理性の化け物と呼ぶが、陽乃は自分を殺す天才だ。多くの自分を殺して殺してこれまでやって来たのだ。俺は自分が傷付かないように周りを無いものにして、俺だけのテリトリーを作り自分を通し身を守る。陽乃は自分が傷付かないように自分で自分を殺し、周りの求めるものになる。スタートラインは一緒なのに方法が正反対なのが俺たちなのだ。そんな二人だからこそ……。

「俺と貴方は似た者同士です。なのにやり方は全くの逆方向。だからこそ、寄り添うのではなく、対等である。互いをよく知ることが出来る。何かあれば話せる、話を聞ける。時には手を取り、時には真つ正面からぶつかれる。そうは思いませんか、陽乃？」

　　そういい俺は手を差し出す。涙で濡れた目を手でぬぐい、陽乃はいつもの、しかし裏のない不敵な笑みを浮かべ俺の手をとる。

「そうね。私と君だからこそ。うん、その関係気に入ったわ。よろしくね、八幡」

　　そうして俺と彼女は対等になった。

「じゃあ今日はこの辺で解散でいいかな？　八幡のおかげで少しスッキリしたし」

そういつて帰り支度をしようとする陽乃にふと思ったことを聞く。

「あの、俺って結局陽乃の境遇を推理しただけでなんにも助言らしきものできてないですけれど」

「いやいや、今日はもう十分だよ。八幡から嬉しい言葉もらったし、続きはまた来週でもいいじゃない？　お互い考える時間を設けるといふ事で。」

確かに色々あつて整理したいことも多いがそれって……

「だからメアドとか交換しよう？　来週の土日どっちか決まったら連絡するから。どうせ八幡は暇でしょ？」

陽乃は笑いながら言ってくる。つまり、来週の休みも今日みたく持っていかれるとまじか。さらば、俺の休み。

「否定できないですね。まあ、了解です。念のため早めにお願ひしますよ」

こんな風に次の約束をするのもなかなかいいもんだな。会計を済ませて店を出る。結構長いこと話をしていたみたいで、外はだいぶ日が陰っている。

「じゃ、八幡。また連絡するから、来週もよろしく」

「ええ、また来週です、陽乃」

軽い挨拶を交わして互いに背を向け、各々の帰る方向へ向き、それぞれ来週の休みに
思いを馳せながら帰路を進むのであった。

その帰り道、八幡は少しだけ素直になる

陽乃と友達？ になった日の帰り道。俺はベッドに飛び込んでバタバタしたい衝動を押さえ込むのに必死だった。思い返すともものすっごい恥ずかしいこと言いまくってたね。あんなの柄じゃない。それに今間違ひなくテンションが高くなっている。いや、浮わついていると言った方がいいか。うん、おそらく、う、嬉しいんだと思う。初めてだったから余計。ほんと、こんななるのは柄じゃないぞ。今の自分が本当に自分なのか少し自信がない。少し落ち着こう。こういう時はちゃんと落ち着かないと危ないからな。うっかり黒歴史を量産してしまう。

太陽はほとんど沈んでしまい辺りはだいぶ暗くなつていて、ちよつとした肌寒さも感じる。

「ちよつと急ぐか」

そう呟いて歩みのペースを少し速める。すると、たつた今すれ違つた人が、ひつ、て声あげてそそくさ逃げていった。ん、なんだ？ さっきの人は間違ひなく俺の方を見て声をあげていた。失礼な。目が腐つてるからか？ それとも他に何か不味いところでもあつたか？ かしかなにも心当たりがないな。

少し心配になったので歩くのをやめて自分の格好を確かめてみる。注意深く見てみるが何もおかしいところはない。第一さつきまでこれで人とあっていたんだ。おかしいところがあるはずがない。あつたら指摘してくれてははず。してくれるよね？ いや、あの人があつたらしばらく放置して楽しみそうじゃね？でも今はそういうわけでもなさそうだし。なんなんだろうか。

そんな事を思いながら頬に手を当てる。するとちよつとした違和感を手に感じた。え、もしかして俺……

にやけてる？

触った感じ口の端が少し上がってるようだ。マジかよ。これ完全に黒だ。つまり、なに、落ち着いてるつもりが全然落ち着けてなくて頬緩んでたと。そら逃げるわ。薄暗い道を目の腐った男が少しニヤツとして歩いてるんだ。めっちゃ怪しいわ。あの人がアクション正常でした。全然失礼じゃない、悪いの俺だった。通報されなかったのは不幸中の幸いだな。いや、今からお巡りさん来るなんてことはないよね？

しかしこれはかなりまずい。こんなん家で帰ったら小町に何言われるかわかったもんじゃないし、次こそ通報されちゃうかもしれない。

「少しクールダウンするか」

もう少し進んだ所に公園があつたはずだ。今の時間だと人もいないだろうし好都合

じゃないかな。途中の自販機でマツカンを買って公園に入り、一番近くにあつたベンチに紙袋をおいてその横に腰を下ろした。案の定人はおらず公園は閑散としている。手に持っていたマツカンを開けてあおる。半分くらいいたところをやめ、背もたれに体重をかけ少し先の地面に目を向ける。落ち着くには思考するのが一番いい。という事で、つらつらと考え事をすることにした。

何で俺はこんなに浮かれてんだ？ いやそれはもうわかっている。ずっと欲しかった者に出会えたからだ。俺のバカなやり方を見ても笑いながらバカだといい、それでも否定はしないでくれるような人。近すぎず遠すぎない、肩を並べて歩ける関係。いつの頃からかそんなものをずっと望んでいた。

きつとどこかで陽乃ならそれになりうるかもしれないと思っていたんだ。彼女と関わり知っていくうちにこの人なら、と期待していたんだ。だから今日、実際どうでもいいような理由をこじつけてまで対面し、勝負に出た。これまで幾度となく期待を裏切られ、もう絶対に求めないとブレーキをかけまくっていたのにやってしまったのだ。今まででしたこともないような勝負。どうすればいいのか全くわからなかった。結局やったことと言えば自分の推論や思うことをひたすらにぶちまけただけ。それでも彼女は言つた、自分を知ってほしかった、それだけでよかった、救われたと。

俺も同じだったんじゃないだろうか。自分の葛藤や苦勞を知って欲しい、しかし同情

や慰めはいらぬ。彼女は俺の独白を聞き、ただただ受け止め自分と重ね、俺に暴かれることを望んだ。互いに似たものを求めていたからこそ、お互いの期待に応えられたのではないだろうか。

ずっとずっと求めていた存在になってくれた陽乃に俺は間違ひなく救われた。そしてこれから彼女といふことで、話すことで互いに色んなことを突きつけ合い、己を知り、身の振り方を見直して行かないといけなくなる。おそらくそれはかなり難しく辛いだろう。しかしそれと同時にひどく楽しみでもある。これまで未来の自分に何も抱けなかった俺が、変化は逃げだと豪語していた俺がそんな事を思ってしまった。たとえ変化することが逃げだとしても、それでもいいとさえ思っている。そう思わせてくれたのは陽乃だ。こんなにも今胸が高まっているのは彼女のおかげだ。

そうわかれば、俺はひとつ大事なことを忘れていた。陽乃に言わないといけぬことがあった。これは今すぐでなくては。

持っていたマツカンの残りを一気に飲み干し、空き缶を近くのゴミ箱に放る。ズボンのポケットから携帯を取りだし、さつき交換したばかりの番号を画面に表示させる。ん、思い立ったはいいがやはりなれないことなだけあって緊張するな。いや、今更陽乃相手にその必要はないか。一息ついてから発信ボタンを押す。数コール後にぷつぷつという音と共に電話が繋がり、陽乃の声が聞こえてきた。

「もしもし？ 八幡？」

「はい。先程はどうも」

「や、それはこちらこそ。どうかした？」

「ええ、まあそうですね。ちよつとした要件というか、いや、ちよつとではないか。えつとですね……」

そう言い淀んでいると、

「ちよつと詰まってるみたいだけど、なんか言いにくいこと？」

「言いにくいというか、ちよつとばかり恥ずかしいというか」

「恥ずかしい……あ、もしかして寂しくなつてもう会いたくなつちやつた？ それならそうと言いなよー。全く八幡ったら。仕方ないなー、無視したら八幡死んじやうもんね。よし、なら早速明日にでも学校まで迎えに……」

「ちよつ！ 待て待て！ 何勝手に話進めてるんですか。そんな訳ないじゃないですか。なんすかもう寂しいつて、それに死ぬつて俺はウサギか何かですか。にしても学校までつて、あんた暇人かよ」

「暇人つて失礼な。君への優先順位が高いだけだつて」

「……………」

くつ、嬉しいことを言ってくれぬぜ。つい無言になつちまつた。

「おーい、なに黙っちゃってんのー？ あー！ もしかして嬉しくて言葉にならないとか？ ぷっ、あははははははっ、ちよろい、ちよろいよ八幡。ちよろ過ぎ、ぷくくっ」

おい、ぼろくそ言ってくれるじゃねーか。ああそうだよ、ちよろいよ。俺はちよろいんだよ。でも、そんな笑うことなくね。俺泣いちやうよ？ あれ、既に目から汗が……。

「おい、笑いすぎだ。あながち間違つてないから何も言い返せないのが辛い。とりあえず落ち着け。ちっ、今度絶対なんかで大笑いしてやる」

「くくっ、ふー、いやー笑つた笑つた。ごめんって。そんなに怒らないでよ。まあこの私を大笑いする機会なんてあるのかな？」

「んなもん作つてやりますよ」

「やれるもんならね。まあ本当にやられそうで少し怖いけど。あ、あとさっきのは別からかうためじゃないよ。普通に本心だから」

「そうですか、ありがとうございます。嬉しいこといつてくれますね。それと別に嘘だとは思いませんでしたよ。だから予想以上に効いたんです」

「う、そう。き、君も嬉しいこといつてくれんじゃん。えー、なんか早々にやり返された気分なんだけど」

「ん、案外陽乃もちよろいのか？」

「そんなわけないでしょ！ 私は八幡とは違って百戦錬磨なの。どれだけたくさんの人

を手の上で転がしてきたと思つてんの！」

いや、なに自信満々言つてんだよ。被害者乙です。そして俺も乙です。

「はあ、何言つてんすか。まあ、その調子だと俺に転がされんのも近そうですね」

「くつ、八幡つて弄りすぎると突然強気になるよね。なんなのそれ」

「さあ、羞恥心が許容量を越えると何でもできちやうんですかね」

「なにそれ怖いよ」

「俺に言われても。だいたいこんななるって知つたのは陽乃に弄り倒されてからですし」

「ふむ、私はとんでもない怪物を産み出してしまったのかもしれない……」

「なんすか、怪物つて。ちよつとSっ気が強くなるだけじゃないですか」

「いや、今までの君からは考えられなかったからさ」

「それについては同感です」

「でしょ！ あ、そういうえば結局何の用だったの？」

そうだよ、まだ俺目的果たせてないじゃん。なんかこの人と話してるとどんどん脱線していつてよくわからないところに行き着くんだよ。なんで用があるつてところから俺が実はSだつて話になるんだよ。何の繋がりもねえ。でも、おかげで緊張解けたけど。

「そういえばさつき言い忘れたことがあったなー、と思いましてね」

「言い忘れたこと？ わざわざ電話してくるくらいだから何か重要なことなのかな？」

「そうっすね。俺にとつてはかなり大事です」

「ほうほう。あえてメールではなく電話してまでとは。それほどまでに大事なのか。と
いってガンガンハードルあげちゃう私」

「おいやめろ。折角いけそうだったのになんてことしてくれやがる。」

「へっ、そこら辺は受けとる側の自由なんであなたがなんて思おうといいですよ。元は
と言えば俺の自己満足のためですし」

「ちよつとした抵抗をする。そして俺は少しだけ深呼吸して気持ちを落ち着かせる。
その様子を感じ取ってか、陽乃は電話の向こうで静寂を保っていた。よし、言うか。」

「こちらこそ、俺を信じてくれて、俺を救ってくれてありがとう。陽乃。俺はこれから先
が楽しみで仕方ない。だから、これからよろしくな」

言い終えた後も沈黙を破らない陽乃に告げる。

「用件はすんだので、それじゃ、また来週に」

俺はそう付け加えて電話を切った。切っちゃった。いや、仕方ないじゃん！ ようやく言ったけど、頑張つて告げたけど、リアクションを待てるほどの心の余裕はもうないんですよ。ふー、なかなか大変な任務であった。

今、陽乃はどんなだろう。アホ面かましているか、笑っているか。俺と同じ事を思ってくれてたら嬉しいな。

そんなことを考えながらしばらく余韻に浸つてポケーつと座っていた。ようやく落ちて着いてきたような気がする。しっかりと礼も言えだし、そろそろ帰ろうかな。

そう思つて立ち上がろうとしたとき、まだ手に持つていた携帯が震えた。どうやらメールらしい。おそらく陽乃からだろう。さつき勝手に電話切っちゃったし。や、これで違つたらすごく恥ずかしいでしょ。空気とかぶち壊しだし、でもそういうのをしれつとやっていくのが広告メールなんだよな。

そんなアホみたいなることを考えながら確認すると、予想通り陽乃からだつた。何かな、弄りの文章がつらつら並んでたり、勝手に切つたことへの文句だつたりすんのかな。ちよつと怖いな。少し心配しながらメールを開く。

そこには俺の予想に反して簡潔に三言、

「どういたしまして 私も楽しみだから！ こちらこそよろしく！」

そんなメールを見て自然と、ひとつ笑みがこぼれる。そして呆れたように俺は呟いた。

「全くこの人は……」

そうごちる彼の顔には、まだ優しげな笑みが残っていた。

「いいかげん帰るか」

彼はそう呟いて立ち上がり、紙袋を取って家へと歩みを進める。その足取りは軽快で、まるでこれから起こるであろう厄介事にも負けないと言っているようだ。

実際、彼はこれからたくさんの厄介事に巻き込まれる。そして、たくさん面倒をかけられ、彼らしく間違える。その過程で彼が、彼を取り巻く者たちが変わっていくのだが、それはまだ先の話。

そんな彼に月明かりが優しく降り注いでいた。

八幡は新しい理由を得る

俺は今、自分の家の玄関の前に立ち尽くしている。これまでにこんなにも家の扉を重く感じたことがあっただろうか。

何故こんなことになっているかは数分前にさかのぼる。

公園を出たあと俺は帰路を急いでいた。時間は既に夕飯前。辺りはすっかり暗くなっていた。これ以上遅くなると小町に何言われるかわからないからな。

若干焦りながら歩いているときつきポケットにしまった携帯が震えた。しかも電話だ。一体誰からだ？ さっきの流れからして陽乃はないだろう。となると、もしかして……。

嫌な予想を頭の片隅に押しやりながら携帯を取り出すとそこには「比企谷小町」とあった。あー、ほら、予想通り。しかもまだ繋がっていないのに携帯からまがまがいオーラが漏れ出ているように見えるのは気のせいだろうか。いや、気のせいじゃないんだらうな。やだな、出たくないな。

しかしでないわけにもいかないので恐る恐る通話ボタンを押し、電話に出る。

「もしもし?小町ちゃ…」

「もしもし!おにーちゃん!今どこほつつき歩いてるの?!もう何時だと思ってるの?!
ちゃんと生きてるの?!」

いきなり大声で捲し立てられた。思わず耳から携帯離しちやったし。内容も、お前俺のお袋なの?って感じだ。てか、最後の何?まさかどつかで野垂れ死んでるとでも思ったのだろうか。失礼な。

「ちよ、声大きい。今家に向かっているとところだから。それにもう2、3分で着くと思う。あと、ちゃんと生きてる」

「ほんとに!もう!遅くなるならちゃんと言わね!またどこかで事故にでもあつたんじやないかって心配したんだから」

前言撤回。めつつや良い妹でした。さつき変なこと考えた俺を殴りたくなる。

「おお、わりい。心配かけたな。俺は大丈夫だ」

「ん、無事ならいいよ。小町がお兄ちゃんを心配するのは息をすることくらい自然なことなのです。お、今の小町的にポイント高い!」

「おー、高い高い」

「適当だなー、で、どうしてこんなに遅くなったの?」

「あー、その話はもうすぐ家に着くから、それからでいいか？」

「そうだね。家についたらしっかりじんも…、お話してよね！待ってるから！」

「そういいって小町は電話を切った。おい今尋問って言ったよね。今日のこと根掘り葉掘り聴かれちゃうってことだよな？こわいなー、やだなー。はあ、急ご。」

そして今に至る。あー、気が重い。なに聞かれんだろ、誤魔化せるかな。

そつと玄関を開けて家に入る。するとそこには仁王立ちした小町が待ち構えていた。仁王立ち小町。お、なんか可愛くない？語呂もいいし。仁王立ち小町流行らせようぜ！「なにアホなこと考えてんの？」

小町が冷たく言い放つ。アホなことって！いや、アホなことか。ええ、現実逃避ですよ。だって仁王立ち小町の可愛い響きに反して、纏っている空気は恐ろしいのよ！さらに目が楽しそうに爛々と輝いてる。そんなに尋問楽しみなのかな？

「おう、すまん。ただいま？」

「おかえり。じゃ、早速なんで遅かったのか聞かせてくれるかな？」

いきなりかよ。やばいよ、どうする。ここはひとまず誤魔化してみよう。よし、八幡のとほける攻撃！

「あー、えつとだな。そう！買った本を読みたくなくてな。ちよつと喫茶店によつてたんだよ。そしたら思いの外夢中になって、気づいたらこんな時間に……」

「嘘だ！」

おつと、どこの鉈持ったお嬢さんかな？ てかなんで小町そのネタ知つてんの？ 俺の部屋の漫画勝手に読んだな。全然構わないけど。

「嘘だなんて……。そ、そんなわけないじゃないですかー」

「じゃあどんな本だったのか説明できるよね？」

小町ちゃん強い。何も言えないよ。

「降参だ、何故ぼれたんだ」

「くつくつくつ、お兄ちゃんも詰めが甘いなー。その紙袋、口を閉じてるセロハンテープに一度もはがした形跡がないからね。つまり、買った本はその紙袋から取り出されてない。ということは、本を読んでいたつてことは嘘になるのだよ。わかつたかね、ワトソン君！」

なんてことだ、そこまで見ていたなんて。強すぎるぞ、小町のみやぶる攻撃。

「ちくしょう、やられたぜ」

「ふふん、小町を騙そうなんて八万年早いんだよ。お兄ちゃん」

小町ってアホの子だと思つてたのに。なんか悔しい。

「あ、そうそう小町。心配かけたからさつきコンビニでプリン買ってきたんだ。いるか？」

「え！プリン？いるいる！ナイスだよお兄ちゃん！ちようだい！」

「落ち着けよ、なあ小町。さつきまでのかしこいおまえは何処に行ってしまったんだ？」

「え、どゆこと？」

「俺はお前の電話のあと急いで帰って来たばかり。おまけに手には紙袋しか持ってないぞ？つまりだな……」

「そんな、嘘だったの？ プリンないの？ なにそれ、その嘘小町的に超ポイント低いよ……」

「すごい残念そうにしている。ちょっと仕返そうと思っただけなのに。うわ、なんかすごい悪いことしちゃったみたいじゃん。」

「おい小町、俺はまだプリンを持っていないとはいってないぞ。」

そういつて持っていた紙袋を開けてコンビニのビニールを取り出す。実は電話のあと家に帰る前に近くのコンビニで買ったのだ。心配してくれたみたいだからそのお詫びに。それを紙袋にしまってから急いで帰って来た。プリン一個ねじ込むくらいの隙間はゼロハンテープ剥がさなくてもあつたからね。

「わーほんとにプリンだ！」

「おう、心配かけたからな。そのお詫びだ」

「ありがとう！さっきのなし、やつぱりポイント超高い！」

予想以上の喜びっぷりである。お兄ちゃんも嬉しいです。さすが、あげて落とすならぬ落としてあげる作戦だ。そして小町の頭の中はプリンで一杯になり、俺のことは忘れ尋問を逃れられる。いや、別にこのためにプリン買った訳じゃないからね。ほんとに礼として買ったんだから。これ副産物だから。

「じゃあ、それ食うためにも早いとこ飯にしようぜ。俺も腹へったんだ」

「そだね。じゃあちやつちやと手洗いしてきて。小町先に準備しとくから」

「おう」

よし、うまくいったぞ。これで俺の平穩は保障された。後は飯食って寝るだけだな。

洗面所で手を洗ったあと、荷物と着替えのために自分の部屋によつてからリビングに行く。すでに夕飯の準備は整っていて小町は自分の席についていた。きつと俺が帰ってくる前にほとんど済んでいたのだろう。本当に悪いことしたな。今度からちゃんとして連絡しよう。

俺も小町の向かいである自分の席に座り、一緒にいただきますして食べ始める。やはり小町のご飯はうまいな。親？今日も休日出勤です。まじ社畜の鑑。おそらくそんな親の血が流れてるから文化祭でもあんなに働いてしまったんだろうな。ちくしょう、社

畜の才能なんて望んでない。

夕食を終えて食器を片付けた後、小町は俺のあげたプリンを食べようとしていたところで話しかけてきた。

「あ、そういえばお兄ちゃん。なんで今日はあんなに遅かったの？」

おっと小町ちゃん。なんでその話を思い出してしまったんだい？ プリンに塗りつぶされたはずだろう？

「おう、そういえばだったな。てか、なんで思い出した？」

「プリン見てたらそういえばと思つて」

プリンめ、お前のせいか。まあ逃げられるとは思つてなかつたよ。でもそれなら逃げられるかもなんて淡い夢を見せないでほしかったな。プリンさんや。

「あれだ。人と会つてな、しばらく話してたんだよ」

「人つて誰？」

「黙秘権を行使する」

「なんでさ！」

「いや、色々面倒なことになりそうだから」

だつて小町ちゃん口軽そうじゃん？ 特に同じ部活のあの二人とかに対して。そんなことになったら明日からの部活地獄だよ？ 教えるのはその機会が訪れたときでいい。

自ら教える必要はない。

「ならないよ！さあ、言っちゃいな！」

「言わないから」

「なら、このシャーロック小町ちゃんが当てて見せよう。ワトソン君よ」

「なにそのキャラまだ続いてたの？」

なんか話す前から面倒になってきたよ。

「雪乃さんか結衣さんだね」

「その心は？」

「もし相手が男の人だったらお兄ちゃんはそんなに洩らないはず。となると女の人になるけど、お兄ちゃん女の人の知り合い雪乃さんか結衣さんくらいしかいないじゃん」

おやおやお小町ちゃんや。最初の方はなかなかの推理かと思っただけど最後ひどいこと
いってない？俺にも女性の知り合いくらい……、片手で足りるな。

「残念、不正解だ。もうおしまいな」

「えー、自信あつたのになー。なんとつてお義姉ちゃん有力候補の二人だからね！」

「いや、それないから」

でたよ、小町のお義姉ちゃん候補。それすごい嫌なんだよね。その気が全くない相手を候補にされても、それにたまに本人いる前で言おうとするからね。たちが悪い。

「なんで？ たぶん脈ありだよ？」

「絶対ないから大丈夫」

あいつらが俺にとかあり得ない。まず住む世界が違うのだ。あいつらがいるのは上位、俺は底辺。あつてはならない。というかその前にまず俺にその気がないんだよ。

「まったく、超ネガティブ思考なんだから、このゴミいちちゃんは。小町的にポイント低いよ」

「小町よ。そのお義姉ちゃん候補つてやつも八幡的にポイント超低いぞ」

「どうして？ お兄ちゃんのための候補だよ。逆に色々頑張ってるのを感謝して欲しいくらいだよ！」

「それ余計なお世話だから。別にその気のない人相手にそんなことされても俺も向こうも迷惑だぞ？」

「またそんなひねくれたこといつちやって」

「いやマジだから」

思い込みが激しいのが悪いとこだよな。空回りしちやってるから。

「ほんとに？」

「ほんとに」

「そつか。でもお兄ちゃんがそうでも向こうがそうとは限らないじゃん。折角のチャン

スなのにもつたいないよ?」

「小町、そういうのはチャンススどうこの前に気持ちが大それたと思うぞ?」

いいこといつてやったぜ。

「なに、いいこといつてやったぜって顔してんの?正直その顔ちよつと気持ち悪いよ。」

おふう、今ので俺のHPが0になった。目の前が真つ暗になつちやう。

「ひどいこと言うな小町。お兄ちゃん泣いちゃうよ?」

「泣いたらちよつと気持ち悪いがキモいに昇格しちゃうけどいいの? だいたいお兄ちゃんが変なこと言うから…」

よし、こうなつたら小町に身をもって不快感を味わつてもらおう。

「じゃあさ、俺がもし大志を義弟候補とか言つて、お前とくつつけようとしてきたらどうだ?」

「うわ、なにそれ、ポイント低すぎるよ。小町ポイント大暴落だよ。今までのポイント帳消しにしちゃうかも」

おう、そこまで言うか。自分でいつてなんだけどひどいな。さすがに同情しちゃう。ごめんよ大志、例に出しちまって。今度なんか奢つてやろう。

「だ、だろ。いやだろ? それが俺の気分だ」

「うん、なんかごめんね。小町よく考えられてなかつたよ。今度からやめとく」

相当のダメージだったみたいだな。ほんとに大志に申し訳なくなつて来た。完全に脈ないみたいだし、今度少しだけお兄さんって呼ぶの許してやろう。

「わかってくれたらいいんだ」

「でもさ、それつてそこそこ告白される小町とそんなこと全くないお兄ちゃんじゃ話が違うんじゃない？ 小町はこれからたくさんチャンスあるかもだけど、お兄ちゃんはこれ逃したら人生ソロプレイ確定かもよ？ 専業主夫の夢叶わないよ？」

む、一理なくもない。確かに恵まれてる人間とそうでない人間のチャンスの価値は全然違う。それでも嫌なもの嫌だ。

「その時はその時だ。夢を諦めるのと望まない人と一緒になるのだったら俺は前者をとるな。そういうのつてそんないい加減にしていいことじゃないだろ？ むしろ世の中で一番気持ちが一番大事な事じゃないか？」

「うん、そうだね、お兄ちゃんの気持ち考えられてなかったや。これから気を付ける！ それに、小町はお兄ちゃんに幸せになつてもらいたいから、お兄ちゃんが好きな人とそうなるよう応援してるよ！ 今の小町のポイント高い！」

「おう、わかってくれたらいいんだ。八幡的にもポイント高いぞ。まあ、そんな相手出来るか甚だ疑問だが」

「結局後ろ向きなのは変わんないんだね。でも大丈夫だと思うよ。お兄ちゃんがしつか

り前向いて歩いていけば、お兄ちゃんを気に入る人も、お兄ちゃんが気に入る人も出てくるって。現に小町はお兄ちゃんのこと気に入ってるからね！」

「そうか、ありがとな。お兄ちゃん頑張るよ」

「うん頑張つて！」

「じゃ、俺風呂入つてくるから。あまり夜更かしするなよ」

「わかった。じゃ、小町は勉強しようかな。明日小テストあるみたいだし。おやすみ」

「おう、おやすみ」

なんか知らないうちにいい雰囲気になって、いい流れで終わった。聴かれなくてすんだな。さすが俺運がいいぜ。

「あ、そういえば結局誰と一緒にだったの？」

おふう、逃げ切れてなかったんかい！まあ今の小町ならちやんと頼めば誰にも言わないだろう。それにこれから頻繁に外出することになるからな、誤魔化しきれないだろ。

「他言無用で頼むぞ」

「うん、わかった」

「陽乃さんだ」

「陽乃さん?! ふむふむ、なら帰ってくる途中で捕まったとか?」

「まあ、間違いではないな」

「なんか煮えきらない言い方だね」

「なんだ、その、友達になつた」

「ふむ、友達ね」

「ああ、だから来週からちよいちよい外に出るから」

「ふむ、外出ね」

あれ? 思ってたよりもリアクションがショボいな。まあいいか、風呂はいろ。

リビングを出て風呂場に向かう。すると後ろの方から……、

「えええええええ!!?! 友達?! あの陽乃さんと?! しかもお兄ちゃんが外出?! その

前にお兄ちゃんに友達?! あれ? 何から疑問に思えばいいの? 小町なんかもうよく

わかんなくなつちやつた。寝よ」

この後小町は本当に寝たらしい。おかげで次の日の小テストはボロクソだったとか。

ちなみに翌日の朝、晩の俺の発言のことはすっかり覚えていて根掘り葉掘り聴かれたのは言うまでもない。結局、当たり障りのないことしか教えてないが。小町には言えな

い内容もあつたしな。

それでも最後には笑顔で、よかつたねと言つてくれた。やつぱり小町はいい妹だ。俺もいつかはあいつをちゃんと純粹に思えるようになりたい。そのためにも色々頑張らないとな。

そう決意を新たにして学校に向かう。

余談だが、朝からたくさん話をしたせいでいつもより時間が押し、家を出るのが遅くなったので小町を中学まで送つてから学校に行ったのだがギリギリ間に合わず平塚先生の鉄拳をくらうはめになった。くそ、ついてない。

八幡はやはり陽乃にはかなわない

陽乃と友達になった日から一週間がたった。そして今日は陽乃と会うために駅まで来ている。駅前で待ち合わせをすることになったのだ。それで約束の場所まで向かっているのだが…、

人が多い！

まだ陽乃に会えてすらいらないのにすごい疲れた。しかも人が多いせいで見つけられる自信があまりない。こんなものジャコの中から小さいタコ探すようなものだ。いや、それは大袈裟だな。話を盛りすぎだ。

とは言ったが、念のため見つけられるような作戦を考えておいた。ありがたいのは探す相手が陽乃つてところだな。あの人超が付くほど美人だから目立つだろう。

いや待て、俺は今からその超美人と会うわけだ。逆に言えば超美人の待ち合わせの相手がこの俺だ。大丈夫か？　なんか今更心配になってきたな。陽乃のことだから気にしすぎとかいってくれそうだけど、その後大改造とか言って着せ替え人形にされそうだな。気にしすぎかな、考えないようにしとこう。それよりさつきと陽乃探そ。

そう思つて探し始めるが、やはり人が多くて視界が悪いせいかもしれない。しかたない、作戦を実行に移すか。その名も、その辺の男の視線観察作戦だ。陽乃だから近くを通つた男は十中八九チラ見するだろう。それがたくさん向いてる方に陽乃がいるという寸法だ。ただしこれには俺くらいは観察眼が必要だ。それと注意として他の美人がいた場合、誤つてそちらに出向いてしまう可能性があるのでくれぐれも即決はしないことだ。

しばらく作戦を実行していると早速多くのチラ見する人たちを発見した。お、これは作戦成功かな？

その視線の先の場所に近づいていく。でもちよつとおかしい。俺の想定ではチラ見だけなのだが、ちよつとしたガヤガヤも聞こえる。え、なんで？ そう疑問に思いながら確認してみると、そこに陽乃はいた。ただこれは俺の作戦が成功したと言えるのか。

確かに陽乃はいた、頭の悪そうなる3人にナンパされてるっていうオプシオンつきで……。

いや、あの人なにやってんの。さくつと逃げるよ。あんたならできるだろに。そんな思いを込めながら視線を向けていると、陽乃がこつちに気付いた。そして、

にんまりと笑つた。

あね、なるほど、俺に助けろと、じゃないとわかかってるよねって言ってるんだな。先

週友達になったばかりなのにもうアイコンタクトできるとかすごい。や、違うか、これはこの状況が分かりやすいだけだな。

しかもなんか面白いの期待してそうだな。大方あれだろ？俺が彼氏のふりをして助けに来るのを期待しているんだらう。そして弄られる。うん、絶対そうだ。それがわかってやるわけがない。しかたない、再び俺の作戦の一つを使うか。陽乃に近づいて声をかける。

「うつす、お待たせしました」

「八幡遅いよ！ だいぶお待たせされちゃったよ」

「すいません。なにぶん人が多くて」

「まあ、許してあげるよ」

「ありがとうございます。じゃ、早速行きましょうよ」

そういつて歩き始めようとすると肩を捕まれた。

「おいなに無視しちゃってんの？この姉ちゃん今俺達が誘ってんだけど」

「そうそう、ガキは引つ込んでろよ」

ですよねー、無理ですよ、空気のように扱う作戦。流石に成功するとは思ってなかつたよ、ちよつとやってみただけ。試すって大事じゃん？他の作戦に移るか。

「いや、こっちは待ち合わせなんで。お引き取りください」

「は？なにいつてんの？お前」

「お前その女の彼氏かなんかなの？」

「ねー、こんな奴より俺たちの方が楽しいよー」

「いや、彼氏じゃないですよ。友達です」

正直に答える。てか陽乃、にっこり笑ってないで加勢して。俺一人じゃ疲れるよ。

「なら、問題ねーよな。なあ彼女、一緒に行こうぜ」

よし、作戦実行だ。

「しつこいですよ。いい加減……ん、あれって。陽乃、あの人って最近よくテレビで見る女優さんじゃない？名前なんだっけ？」

「へ？どっか？」

急に俺から話をふられた陽乃は少し驚いて答える。

「ほら、あそこですよ」

そういつて俺たちのいる場所と男たちを挟んで正反対の場所を指差す。それにつられて男たちも振り返る。

「え、まじ？どっかどっか？」

「やべえな、どっかだ？」

「えー、あれじゃね？」

「いや、違うだろ。似てるけど」

「よくわからんな、おい、もっと正確に教えろ」

「なんか目印とかないのか？」

「おい、黙ってないで……っていない!？」

「まじかよ!逃げやがったな!」

そしてしばらくキョロキョロ俺達を探して、諦めたのかどこかへ歩いていった。そんな様子を俺達は近くの物陰から見ていた。

「いったようですね」

「そうみたいね、で、八幡。今のなに？」

「なにつて、作戦です。相手の視線を俺達の反対側に向け他のものに大きな注意を向けさせることで隙を作り、その間に近場の死角に隠れてやり過ごす。名付けて、あ、UF Oだ!作戦です」

「なにそのダサい作戦…、私八幡が彼氏のふりしてくれるの待ってたのに」

「そんなことだろうと思ってあえて、です。しかもそれ俺絶対キョドるから嫌ですし」

「ちえっ、それが見たくてあのナンパもそのままにしたのにな、というかよくそんなアホみたいな作戦が成功したよね」

「同感です。ぶっちゃけ成功するなんて思ってませんでした」

本当に思つてなかった。最終的に国家権力ちよつとお借りします作戦、つまり通報するよと脅すつもりだったんだけど。相手がシヨボかったんだな。

「でも隠れるとき八幡が手を引つ張つてくれたのはよかったよ」

「つ、あれは不可抗力です。必要に迫られただけです」

「もしかして手を繋ぎたくてこの作戦にしたのかな？もう可愛いなー、そうならそうと言えはいくらでも繋いであげちゃうよー」

「違いますよ、くつ、そこまで考えが至らなかつた自分が情けない」

「素直になりなよー、ほら、お姉さんの手だよ、繋ぎたいでしょー」

「いらぬですよ。あ、もしかして陽乃が繋ぎたいんですか？そうですか。そうならそうと素直にいえばいいのに」

「いや違うわよ！からかつてただけでしょ！」

「くくつ、どうだか？」

「厄介なSになつちやつた」

あなたのせいですから。そしてちよつと頬を赤らめるの止めてもらえませんかね。凶星だったのかと思つちやうじゃん。

「ほら、早くいきますよ、で、今日はどこ行くんですか？」

「そこは君がリードしなよ」

「俺がそんなこと出来るわけないでしょう、というかまず選択肢がないんでサイズになりますよ」

「まあ期待はしてなかったけどね。今日はこの前とは違うところの喫茶店に行くわよ。同じところじゃつまらないしね」

「そうですか、じゃ、行きましょう」

そう言つて陽乃の隣に並んで歩き始める。

「今度はもうちよつと頭の良さそうなナンパをキープしとこうかな。じゃないと八幡のキョドリっぷりを見れないし」

「めんどいから止めてくださいよ。それに本当は通報すると脅すつもりでしたんでどのみち見れませんよ」

「えー、つままないな。普通私の彼氏のふりとかこぞつてやりたがると思うんだけどな」

「でしようね。でもそれだとさつきも助けようとした人いたんじゃないですか?」

「うん、いたね結構。全員睨んで追っ払ったけど」

「なにやってんすか」

「えー、だつてみんな下心丸出しだったし。これを機にお近づきになってのがバレバレ」

「まあ、だいたい男がそうでしょうよ」

でも助けようとした人たち意味わかんなかっただろうな。絡まれて困ってる顔してると思えば、近づいてくんなよって顔してくるんだもん。ほんとお疲れ様です。

「じゃあどうやってたらしめてくれるのー?」

「いや、どうやってもしませんよ」

「それなら次までに他の作戦全力で考えてやるわ」

何に労力費やそうとしてんだか。

そんな雑談をしながら歩いてしていると目的地についたようだ。店内に入ると数人いるだけで、雰囲気はかなり落ち着いていた。静かなクラシックのBGMも流れている。ふむ、こういうところはかなり好きだな。

「どう? いいお店でしょ? 八幡が好きかなと思ったんだ。その様子だとお気に召したみたいだね」

「はい、かなり好きですなこういうところは。ありがとうございます」

「まあ、ちよつとしたお礼みたいなのだと思ってくれればいいよ。それと普通に八幡と来てみたかったしね」

「つ、しれつとそういうこと言うんだから気が抜けませんね」

急に来るとドキツとする。不意打ちには弱いな。そんな俺の様子に陽乃は笑顔を向けていた。だからそういうのが弱いんだって。まあ、俺のリアクション見て楽しんでる

んだらうけど。

窓際の二人席に案内され席につく。俺と陽乃は同じパウンドケーキとコーヒーを頼んだ。あんなに大きくおすすめて書いてあると頼むしかないよね。陽乃も美味しいうっていつてたし。店員が注文確認して去っていったあと陽乃が口を開いた。

「八幡たちそろそろ体育祭でしょ？なんか面白いことないの？文化祭みたいに」

「そうですね。なにもなくはないですけど、面白いかどうかはちよつと」

「へー、また面倒事？」

「城廻先輩から体育祭を成功させたいって相談が来たくらいですか」

「めぐりが？」

「はい。それで盛り上がる競技を考えることになりました、男子は棒倒し、女子は騎馬戦をやることになりました」

「雪乃ちゃんは騎馬戦出るの？」

「出るどころか大将やる気ですよ。しかも大将は特別衣装です」

「ほんとに？ うわー、見たかったなー。確か来週の土曜だったよね。その日大学の外せない用事があるのよ。そこで八幡にお願い、写真撮ってきて！」

なんか急をお願いされちゃったよ。流石、やっぱりこの人は妹が大好きなんだな。

「今回は俺救護の仕事あるんで厳しいっすね。誰か雪ノ下の人間に頼んで写真でも撮っ

てもらえばいいんじゃないですか」

「それならしかたないね。執事にこつそり頼んでみようかな」

その人大変だな。まあ当日は外部の人も入れるみたいだから大丈夫だろう。うちの体育祭は文化祭と違ってあまり人来ないけど。

「まあ、雑談はこのくらいにしてさつきと本題に入りましょう」

この調子で続けてるといつまでたつても修学旅行に行けないからな。はい、メタ発言です。

「その事なんだけどね、あれから私たくさん考えたんだ。それでちゃんと今の段階の結論を出したの。聞いてくれる？」

「はい、もちろん」

俺のその言葉を聞いて陽乃は安堵の息を一つ吐いてから語り出した。

「私ね、雪乃ちゃんへの負の感情を認めようと思うの。誤魔化そうととしてる時点でもう認めちゃってるようなものだったから」

「そして自分が嫌いな大人と一緒にだつてことも受け入れる。八幡に言われた通り、私にはそのやり方が染み付いているわ。だからどんなに否定しても間違はなく同類なのよ」
「私はそんな汚い私が嫌い。でもさ、八幡言つたじゃない？人相手にいい感情のみで関われるわけがないって。それってさ自分に対してもそうなんじゃないかって思ったの」

「私が私を嫌なのと同時にきつと好きになれる部分がある。まだそれは見つけれないけど、絶対あるって信じることにした。それを見つげるために足掻いてみる。私が私を諦めるのはそれをしてからでいいかなって」

「そう思えたのも八幡のおかげだよ。君が信じてくれた私を、私も信じてみようと思えた。ありがとう」

そう言つて陽乃は最後に微笑んだ。そうか、陽乃は逃げるのをやめたのか。受け止めて、背負つてなお、前に進むもうと決めたんだ。ははっ、やっぱりこの人はすごい。この強さが雪ノ下陽乃なのか。

「そうですか。陽乃ならできますよ。だつて陽乃は、雪ノ下陽乃はそうやつて前を見れる人間ですから」

「八幡のおかげだけどね」

「それでもですよ。それとそんな陽乃をこれから近くで見ているのは嬉しいですね」

「私もこれからの八幡を見ていけるのは楽しみよ」

「そういわれても、俺はこれからもこれまで同様たくさん間違えると思うんですけど」

「それは私も同じよ。その度にお互いにお互いを笑えばいいじゃない？ バカねって。それが私たちでしょっ？」

「ですね。そのときはさんざん笑ってあげますよ」

「ふふつ、私も八幡が泣くくらい笑ってあげる」

ほんと、この人といると楽しいな。これからも退屈しないだろう。

店員が注文したものを持ってきた。それを二人してつついていると陽乃が聞いてきた。

「八幡はなんかないの？」

「なんかとは？」

「うーん、心配事？とか懸念事項？とか」

「まあ、ないわけではない、いや、あったと言うのが正しいですかね」

「あった？」

「はい、たつた今陽乃の話聞いてなくなりました」

「聞いてもいい？」

「全然いいですよ」

俺も話しておきたいしな。

「陽乃は俺の大きな期待に一度応えてくれている。だからこれからも俺はたくさん期待をしてしまうでしょう。でもそれに答えてもらえなかったとき俺はきつと裏切られたと思ってしまう」

「これまでもたくさんありました。自分勝手な理想を押し付けて、そうならなかったら相手に失望する。そんな自分が大嫌いでした許せなかった」

「でもそれが俺なんですよね。俺もそれを認めないといけない。だからまあ、これから俺がそう思ってしまうことがあるかもしれないので先に謝つとこうかなと」

そう言つて締めると陽乃はムスつとしていた。やっぱり怒らせたかな。

「八幡はさ、最初にした約束覚えてる？」

「約束？」

「そう約束。私たちは自分の意思で信じるって話」

「確かにしましたね」

「じゃあなんで八幡は謝るの？」

「なんでってそれは申し訳ないと思つて」

「だからさ、私は八幡に信じてなんて頼んでないんだよ。八幡が裏切られたと感じて、それを八幡が嫌悪しても私に謝る理由にはならないよ。だつてそれは八幡が自分で私を信じた結果なんだから」

「……」

「私たちの関係は互いの傷を舐め合うものじゃない。寄りかかり合うものじゃない。肩を並べて立つものだよ。だからそこで謝つたらいけないよ」

「そうだ、謝るのは違う。そこで謝ってしまったえば俺は自分の意思で陽乃を信じていないことになる。陽乃が信じてくれるから陽乃を信じている、だからこそ後ろめたさを感じてしまうんだ。つまり俺は最初から間違っている。俺は俺が陽乃を信じたいから信じるんだ。」

「だからそういう状況になっても自分の中で完結させるべきなんだ。またやつてるよ俺って苦笑いしていればいい。謝ってしまうのは結局まだそんな俺を受け入れられていないことにもなる。」

「その通りですね。俺はまだそういう自分を認められていない。それにこの関係への覚悟も足りなかつたみたいです」

「そうだね。ふっ、八幡は甘々だね」

「否定できません。情けない限りっすね」

「まあ私も完璧に受け入れられたかと言われればまだだしね。そんなに急には無理じゃない?」

「慰めですか?」

「私にまだできてないのにそんなあつさり八幡にやられてたまるかつて感じ?」

「言いますね」

「まあね」

なんか今日はやられっぱなしだな。今のは間違はなく俺を励まそうとしていた。後に言い加えたのも本心だろうけど。

「やっぱり陽乃にはかなわないな」

「ぶっ、なにそれ。らしくないよ」

「まあたまにはいいじゃないですか」

「先週もらしくないことしてたけどね」

「確かに、でも言いたくてしかたないんですよ」

「今までの君からじゃ考えられないよね」

「ほんとですよ」

ほんと、こうなれたのは陽乃のおかげだ。陽乃に出会えてよかった。

「八幡、これからどうする?」

「帰りましょう」

「却下」

「えー」

なんとという切り返し早さ。最初から俺が帰るっていうの予想してただろ。バレバレな俺も俺だけだ。

「そうだなー、あれだよ。八幡私の隣歩いてるくせにちよつとぼつとしないよね、というか若干ダサイ」

「ひどいっすね。まあ自覚はありますよ。そういうの得意じゃないんで」

「という事で君をちよつと改造しにいこう！」

「や、金ないんで結構です」

「大丈夫大丈夫、たくさん買ったりしないから。ちよつと様子見るだけだつて。とりあえず適当に遊びにいこうよ。遊びを知らない八幡に友達の私が遊び方を教えてあげよう」

「えー、求めてないっす」

「むー、私が八幡と遊びたいの。いいじゃない、お願い」

「はあ、しかたないですね。まあいいですよ」

別にこの後何もないし。ちよつと疲れそうだけどそのくらいか。

「やったね。八幡押しに弱いよね、ちよろ」

「さて、帰ろうかな」

「ごめん！冗談…じゃないけど、ごめんって」

冗談じゃないのかよ。まあなにも言えないけど。

「で、どこ行くんすか」

「とりあえず駅まで戻ろうよ。そこから適当に歩いて決めればいいんじゃない？」
「そうですね」

二人の休日はまだ終わらない。

二人は買い物をする

あれから店を出て駅まで戻ってきた。来たときより落ち着いているかと思つたが相変わらずの人の多さだ。そして何より目につくのがリア充の数。視界に常に4組は入ってくる。爆発しろよ。

かく言う俺も隣に陽乃いるから勘違いされてめっちゃ睨まれてるけど。まあ、俺みたいなばつとしないやつがいたらね、なんでお前だよってなるよな。しかたないとは思うけど、そこのお前はなんで隣に彼女いるのに俺睨んだよ。げせぬ。

とりあえず心労がやばい。まじパトラッシュ。あ、これ死ぬほど疲れるって意味ね。気に入ってるけどあまり使わない方がいいのかな、名作だしやめとこ。怒られそう。

「なに今にも天に召されそうな顔してんの？」

「いえ、周りの視線がちよつと……」

「そうかい、私はいつものことだから気にならなかつたけど、八幡はそうじゃないもんね」

「それもそうですけど、こもってる感情が全部妬みですから余計に」

「あね、私が美人だからだね！ごめんね！」

そう言って目配せする陽乃。なんか目から星が出たのが見えたような気がする。そしてそれを見ていた他の男が数人胸を撃ち抜かれていた。

「あれー、なんでそんなにげっそりしてるの？ 私のウイंकよくなかった…、訳ではないよね。現に他の男はやられてるし」

「確信犯かよ。ちよつとりアクションする元気がないだけです」

「えー、また今度八幡が元氣なときにやる。あとこの視線を何とかするためにも八幡をばつちり改造しないとね」

「そんなんでなんとかなるんですかね。石はどんなに磨いても石ですよ」

「八幡って石は石でも色のついたきれいなやつじゃない？」

「まあ、パーツは悪くないと思ってますよ、目以外。なんだって妹の小町は可愛いですからね。兄の俺も少しは整っていてもおかしくないはず」

「なにその理由、しかもはずってそこまで自信はないのね。まあ目とそのボサボサの頭のせいじゃない？ あとセンス！」

おい最後の致命的じゃねーか。知ってるけど、こればかりはどうにもならないような気がする。

「この目は既に俺のアイデンティティーと化していますからね、今更直したいとは思いませんね」

「それについては同感ね。あとセンスは訓練で少しはなんとかなるのよ」

訓練つて嫌な響きだな。なにをするの、すごい怖い。

「大丈夫大丈夫。そんな厳しいことじゃないから。ひたすら私に合う服を探すとかでいいのよ」

「それ十分厳しいですよ」

「そうかなー。あ、着いたよ、まずここからね」

陽乃はそう言つて店に入つていった。待つて、ここ店つて言うより美容院じゃね。しかもめっちゃやおしゃれだし。無理無理無理無理！　こんなところ入れるわけないって。ちよつと改造つて、これガチなやつじゃん。

「なにぼやつとしてんの、行くよ」

「待つて陽乃、こんなところに俺が入れると思つてんのか？」

「私が一緒だから問題ないわよ。ほら」

手を捕まれ店内にドナドナされました。なにこの未知な世界、やべ、胃が…。

「いらつしやいませ陽乃様。今日はどのようなご用件で」

「今日はこの子お願い。いい感じに整えてあげて」

「了解しました。では、こちらにどうぞ」

なんだよこの対応。もう意味わかんない。考えるのやめよ。この世には抗えない

力つてのがあるんだよな、うん。
そうして俺は思考を放棄した。

「やっぱり整えるだけで印象大分変わるじゃない」

「そうですね、こちらのお客様は素材はなかなかでしたので」

「でしょ？　で、これキープするの大変なの？」

「いえ、先程のお客様の状態からそういうのが不得意だと判断したので簡単にできるよ
うな髪型にしました」

　なんか誰かが話をしている声が聞こえる。片方の声は陽乃だな。あれ、俺今何してたんだっけ。確かカフェで陽乃と話して、駅まで戻ってきて、ん？　そのあとどうしたんだっけ？　てか、目の前に座ってるんの誰。しかも目が腐ってるし。いや、目が腐ってるのは俺だわ。てことはこれ俺か。あー、思い出してきた、ここ美容院だ。知らないうちに終わったんだな。

「で、いつまで八幡はそうしてるの？」

「たった今長い眠りから覚めました」

「なにいつてんの？　それで、どうよ。大分印象変わったでしょ」

「ほんとつすね。で、これ料金は……」

「私が無理矢理したようなもんだからね。だしとくよ。まあ、コネで半額にしてもらったんだけどね」

「そうですか、でも半分は出させてくださいよ。自分のことなのになにもしないのはちよつと。それに結構気に入ってますし」

「そう？　気に入ってるならよかつたわ」

「何がいいって、アホ毛をなんの違和感もなく存在させられるところだよ。今まではこのアホ毛をなくさないために無理にいじってこなかったからな。」

「よし、頭はすんだね。次は服見に行こうよ」

「ええ、仰せのままに」

もうこここまで来たたら抵抗しないよね。逆に楽しんでやるよって気分。できるかわからんけど。

そしてまたまた陽乃は行く店があるらしく、俺はおとなしくついていく。陽乃なんか楽しそうだな。

「陽乃はずいぶんと楽しそうですね」

「まあね、こうやって気兼ねなく遊べるのは久しぶりだからね」

「大学の人と遊んだりしてないんすか？」

「いや、結構あるよ。でもほら、そういう人たちには色々気を遣ったり考えて行動したりしないとイケないじゃない？ それに比べて八幡には今更そんなことしてもね」

「さいですか」

「そうそう。今までは結構一人で自由にすることが多かったけど、これからは八幡連れていけるね」

「まあ俺は基本一人じゃなにもしませんからね、構わないですよ」

「よし、じゃあ早速ここでたくさん付き合ってもらおうかな」

「どうやら二軒目に到着したようです。だからさ、なんでこんなにお高そうなのかな。あ、陽乃だからか。俺には無理だな。」

「大丈夫。八幡のを買うとか言わないよ。見るだけ。私はなんかいいのあったら買うけど、よろしくね」

「なら心配ないですね。俺の残念なセンスで選んであげますよ」

「え、なんか知らないうちに吹っ切れてる。少しは頑張つてよ」

「ハードルは下げとくに限ります」

店内に入つてみると奥から店員が出てきた。や、もう驚かないよ、どんな対応されても。大方、雪ノ下家のなにかしらかがどうにかなつてんでしょ。もうなに言いたいのかわかんない。

「まずは八幡からね。男物はあっちかな」

「俺も探した方がいいですかね」

「私がいくつか見繕ってみるから試着してきてよ」

「わかりました」

陽乃はしばらく服を物色してから俺にいくつか渡してきた。それをもつて試着室にはいる。こんなの似合うのか？

着終わってカーテンを開けると陽乃が女の店員と話をしていた。いつの間に店員呼んだんだよ。で、なんで陽乃は少し顔赤いの。店員はにやにやしてるし。なんの話してたんだろ。

「で、どうでしょう」

「ああ、うーん、わ、悪くはない。でもなんかこうしっくりこないかな」

「そうですね。服の組み合わせは問題ないと思うんですけど」

店員さん、それって俺が悪いみたいじゃん。え、ほんとにそうなの？ うわ、泣きそう。

「あれじゃない？ もうちよつと背筋伸ばしてみなよ。多少はよくなるんじゃない？」

「ごうですか」

「あ、良くなりましたね。猫背はだいたい見映えを悪くしますから」

「そうですか。これからは直した方がいいかな」

「そうしなよ、体にも悪いし」

それから再び試着室に戻って着替える。結局これ買わないんだよな。とりあえず俺がなんとかなることはわかったしいいか。

試着室からだと既に陽乃は自分の服を探していた。持っていた服を店員に渡してから陽乃のもとへ向かう。

さて、頑張りましょうか。

「お待たせしました。適当に選べばいいんですか？」

「適当はやめてよ。私が聴くからどっちがいいか答えて」

「あの定番のやつですね。了解です」

「じゃ、これとこれどっちがいい？」

そう言って2着のブラウスを見せてきた。片方はベージュでもう片方は白。どちらも落ち着いた感じの服だ。

「んー、あれですよね。陽乃ってなんでも似合いそうですよね」

「まあね、私だし」

「だからなのか難しい」

「まあ、そんな深く考えないでさ」

「じゃあ、ベージュの方で」

「理由は？」

「理由ですか。まだ陽乃がその色の服着たところを見たことなかったから、ですかね。あと俺の好み」

「本当にさらつとといったわね。へー、八幡はこういうのが好きなのか」

「どちらかというと、ですけどね。選択肢ない状態で何が好きなんて聞かれても答えられませんか」

「だろうね。ま、試着してくるね」

そう言つて今度は陽乃が試着室へ入つていった。ふー、ひとまず落ち着いたか。服の話なんてわからないからあまり深く突っ込まない方がいい。遅い筆がさらに遅くなる、むしろ止まる。あれ、変なこと言つたな。

陽乃を待つているとさつき陽乃と一緒にいた店員がやつて来た。

「彼女さんですか？ 美人ですね」

「違います。友達ですよ」

「本当にそうなんですか。さつきあちらのお嬢さんにも伺つたんですけど同じ返答でした。でもただの友達つて訳じゃないんですよね？」

「そうですね。まあ俺の場合は友達つて言うもの自体が普通じゃないんですけど。でも

俺の中で特別なポジションにいるのは確かです」

「大事なんですね」

「そうですね。こう思うようになったのはつい最近ですけど」

「そういう人がいるっていいじゃないですか。おまけに美人ですし」

「俺も初めてですし、感謝してます。それに例え陽乃が美人でなくなっても問題ない。それくらい大きなもんくれましたから」

「ふふつ、それ聞かせてあげたいですね」

「止めてください。そんなことになったらしばらく部屋から出れません」

なににこにこ笑ってるんですか。なるほどね、さつきも陽乃とこんな話してたのね。それでその顔ですか。にしても知らない人相手に恥ずかしいこと言ったな俺。この短い間にだいぶ慣れたかも。

そうこうしているうちにカーテンが開いて陽乃が出てきた。

「やっぱり普通に合うわよね」

「まあ最初からわかってたことですけど、普通に似合ってますね」

「はい、ちゃんと似合っていて可愛らしいですよ。ね、お客さん?」

え、そこで俺にふる? もう既に感想言ったあとじゃん。この店員俺に可愛いつて言わせたいのか? あー、なるほどな、そしてどぎまぎする俺のリアクションを見て楽し

むと。さっきの話で俺が思いの外さらつと答えちゃったから物足りなかったのか？
そうなればキョドつてやるものか、こっちは最近慣れてるから問題ない。

「確かに可愛いですね、と言つても陽乃にとつてはいつものことですよ」

「だそうですよ、お嬢さん。彼曰くあなたはいつも可愛いそうです」

「え、ちよ、ちよつと、八幡、しれつとそういうこと言わないですよ」

「もう今更ですよ」

「人の前でそういうこと言われる身にもなつてよ！」

「陽乃のことだからいつも言われてそうだと思つただけだな」

「確かに言われるけど……。はあ、ほんと吹っ切れた君の恐ろしさは馬鹿にできないわ。

普段があれなだけに不意打ちのダメージが絶大」

陽乃が取り乱すのを見るのも面白いな。今度何か考えとこう。それで店員さんはなぜいい笑顔してるのかな？ 俺別に普通だったでしょ。陽乃はちよつと拗ねた感じ
着替えに行つてしまった。

「やはり本当に可愛らしい人ですね。今まであんな姿見せたことなかったですから」

「今まで？」

「はい、私はもうここに10年くらい勤めているんですが、結構前から陽乃さんは通つて
くださっているんです」

「そうなんですか」

「いつもは疲れた顔して一人でいらっしやっては、たくさん服を買っていかれまして。ここは彼女にとってストレスの発散場所です。でも今日、初めて人を連れて来たのでビックリしましたよ」

「初めて、ですか」

「それにいつもと違って楽しそうでしたし。やっぱりああしているのが年相応で似合ってますよ」

「まあ、あいつも色々ありますからね。それにしてもよく見てるんですね」

「あはは、前から気になっていたので。でも今日からは心配しなくて良さそうですね」

そう言つて彼女は優しく微笑んだ。本当に長いこと気にかけてたんだな。

試着室から陽乃が出てきた。ちなみにあの服は買うらしい。陽乃が会計を済ませたあと店員に見送られながら店を出た。あの店員さん終始いい笑顔だったな。

「今日はもう解散しよっか」

「ですね、もう行くところも思い付かないし」

「じゃあ、来週は二人とも忙しいみたいだし、ぼちぼち連絡するね」

「お願いします」

「じゃあね、体育祭頑張つてね、面白い話期待してる」

「まあ、適度にやりますよ。陽乃も元気で」

そう言葉を交わして別れ家に帰った。家に着くと俺の頭も見て小町が目を輝かせた。なかなかいい感じらしい。あとは戸塚に誉めてもらうだけだな。

ちなみに翌日ちゃんと戸塚は誉めてくれました。奉仕部の二人？　なんか信じられないもの見るような目を向けてきたよ。まあ、それが普通のリアクションだよな。葉山たちもそんな感じだったし。戸塚ありがとう。

旅の前に厄介事はやってくる

あれから体育祭も終わり、教室内は修学旅行が近づいているためか若干浮わついている。なんとたつてクラスを中心葉山グループが浮わついているからな。と言つても葉山本人はいないんだが、主に戸部がうるさい。

にしても修学旅行かー。ぼっちには特に嬉しくない行事だな。自由行動以外気まずいだけじゃん。もういつそ俺一人のグループでいいわ。

そんなことを鬱々と考えていると、ちよんちよんと背中を叩かれた。振り向くとそこには天使、もとい戸塚がいた。

「今度のLHRで修学旅行の班決めするんだって」

「へー、そうなのか。まあみんなだいたい決まってるんだろ」

「八幡はさ、決まってるの?」

「いや、どつか余ったところにぶっこまれんじやないかなーって思ってる」

「そうなんだ。それならさ、僕と一緒にの班にしない?」

……まじか、前言撤回。修学旅行最高。超楽しみ、戸塚まじ天使。

「いいのか? よろしく頼む」

「うん！ よろしく！」

わー、笑顔がまぶしい。そうか、これが浄化されるといふことか。

「一班四人なんだけどあと二人どうしよつか」

「その辺は他のところとドッキングだろうな」

「そうかも。どこ行きたいとかある？」

「それは他の二人とも話し合わんとな」

「そうだね。じゃあ話の続きはちゃんと決まってるからね！」

そう言つて手を振つて席に戻つていった。さつきまでの憂鬱な気分は消え去り、次の数学の授業を真面目に受けようと思えるくらい気分は優れていた。つまりかなりいい気分。

そういえば陽乃にはなんのお土産買おうか、普通だと面白くないよな。いいリアクション見たいし。

そんなこと考えていると教室に葉山と海老名さんが入ってきた。珍しい組み合わせだ。しかも葉山は困つたような顔をしている。あいつも大変だな。乙。

時は飛んで放課後。奉仕部の3人は特にすることもなくいつも通り、つまり俺と雪ノ

下は読書、由比ヶ浜は携帯いじりをしていた。と言いたいところだか雪ノ下が持つてるの、あれ旅行雑誌だよな。そんなに楽しみなのか、意外だ。

「もうすぐ修学旅行だねー。ゆきのん、どこ行くか決めた?」

「まだね。行きたいところが多くて決めあぐねてるのよ」

「そっかー。でも京都に行ってもなにするのって感じじゃない? 遊ぶとこ少なさそうだし」

「はあ、あなたは歴史や文化の大切さを……、知らなさそうね」

「ちよ、ゆきのんひどい!」

そして由比ヶ浜が雪ノ下に抱きついた。あ、なんかゆりゆりしだしたよ。これは空気になるしかないな。俺は空気、よし、大丈夫だ。

「ヒツキーは決めた?」

ダメだったみたい。

「由比ヶ浜さん、そんな可哀想なこと聞いてはダメよ。彼にそんなこと決める権限があるわけじゃないじゃない。同じ班の人の意向に従うしかないのよ」

「あ、そっか。ごめんねヒツキー」

「おい、お前らちよつと待てよ。何勝手に俺を可哀想な人にしてくれてんの」

「違うのかしら?」

「今回は違うね。なんせ戸塚と同じ班になることが決定しているからな。戸塚とならどこに行ってもいい。だからそんな権限は要らない」

「あはは、そうなんだ。よかつたねヒツキー」

由比ヶ浜は苦笑いしながらそう言ってきた。雪ノ下はため息をはいている。そんな反応しなくても……、本当に嬉しいんだもの。

ちよつと微妙な空気になった部屋にノックが響く。こんな時期に依頼か？ 雪ノ下の返答のあと扉が開かれ、葉山、戸部、その他二人が入ってきた。何しに来たんだよお前ら、悩みとかなさそうだろ。

「なんのご用かしら？」

「いや、ちよつと相談があつて」

雪ノ下の異様に冷たい対応に葉山が答える。こいつまだ葉山嫌いなのか。

「お前が？」

俺は率直な疑問を葉山に投げた。

「今回は俺じゃなくて……」

「俺つす。用件なんだけども、……」

葉山の後に戸部が続けた。お前かよ、お前こそ悩みないだろ。いつもベーベー言うてるだけじゃん。しかもなに言い淀んでんの。いつもの勢いはどうした。

「ほら、言っちゃえよ」

「そうだぞ。言っちゃえ」

モブ二人は戸部を煽っていた。ごめん、名前忘れちゃった、だからもう君たちモブね。
「あ、あのー、俺、海老名さんのこと結構いいって思ってた、この修学旅行で決めたいかな？」

「え！マジ?!」

「つまり告白の手伝いをすればいいのかしら」

「そうそう、そんな感じでおなじやす！」

「戸部、それ失敗したらどうすんだ？俺達ができるのは部の方針を考慮するとアドバ

イス程度だ。成功の保証はできないぞ」

「ちよ、ヒキタ二君、やる前から失敗とかネガティブすぎっしょ」

「そうも言ってられんだろ。告白なんて既存の関係を壊しかねん。それでもするのか？

というか俺は馬に蹴られたくないんで他人の色恋沙汰には干渉したくないんだが」

絶対関わっていいことないし、何より面倒だ。俺はこの修学旅行、戸塚と楽しまない

といけないんだよ！お前なんぞに割いている時間などない！

「ヒキタ二君噂通りきついこと言うわー。でもあれっしょ、それほどまじで考えてくれるってことっしょ」

「いや、戸塚との時間の邪魔をされたくないだけなんだが……」

「この期に及んでもあなたはそれなのね」

「いいじゃんヒツキー！戸部っちも本気みたいだしさ。手伝ってあげようよ！」

「えー、というかお前海老……」

「ヒキタニ君そこをなんとかおなしやす！」

あー、もううるせえ。雪ノ下にパスしよ。

「まあ俺に決定権はないからな。雪ノ下に聞け」

「お願い！いいでしょ！」

「そこまで言うのなら……、受けましょうか」

「ありがとうゆきのん！」

雪ノ下は相変わらず由比ヶ浜に弱いな。あー、戸塚との時間がー。

「と言っても私はクラスが違うしあまり力になれないと思うのだけれど」

「そこら辺はたまにアドバイスくれるだけで大丈夫つしよ」

詳しい内容に入りかけたときに葉山が口を開いた。そういえばいたな。葉山が空気になるつてすごい。え？ 他の二人？ 最初から空気です。

「じゃ、ここからは戸部だけでいいかい？ 俺達部活いかないといけないから」

「あ、いたのね。全然構わないわよ」

「隼人くん、俺もあとから行くからよろしくー」

そうして3人は部屋を出ていった。雪ノ下…、葉山顔ひきつってたじゃん。やめてあげなよ。

「で、具体的にどうするつもりなわけ？」

「んー、当日は私は優美子と姫菜となるのは確実だろうし、たぶん隼人くんたちと行動することになると思うからサポートはしやすいかな」

「へー、頑張れ」

「で、ヒツキーは戸部つちと同じ班でサポートすればよくない？」

「残念だかそれは無理だ。なぜならさつきから言っているように戸塚と組むからな。こいつと組んでいる余裕はない。それにこいつら四人で既に決まってるんじゃないのか？」

「あー、その通りだわ」

「だそうだ。な、無理だろ？」

「でも、大岡君と大和君も事情知ってるし別れてくれるんじゃない？ そうすれば彩ちゃんもいれて四人だよ」

「む、それなら確実に戸塚と一緒にになれるな。実は余ったところが3人3人でバラバラになるかもしれないと危惧していたんだ。この際サポートのことはどうでもいい。よし、それでいこう」

「ちよ、ヒキタニクーん」

「まったく、あなたはぶれないわね」

よし、これで戸塚と確実に一緒だ。戸部はまあ適当でいいや。どうせ失敗するだろうし。本人もその覚悟があるみたいだからな。

「じゃ、そういうことでよろしく！」

そう言い残して戸部は部活にいった。あいつ軽いなー、本当に大丈夫か？

戸部が襲来して二日後の放課後。俺は部室で修学旅行の行き先を考えていた。昨日無事に戸塚と一緒にの班になれたんだよ。うるさいのもいるけど。ちなみに女子の方の穴埋めはサクサクらしい。あいつ文化祭終わってから結構海老名さんと仲いいしな。

「んー、ゆきのんどういうルートがいいと思う？」

「そうね、やはり定番どころは押さえたいかしら」

あなたたち楽しそうですね。俺も戸塚と行きたいところちゃんと押さえとかなくては。そう意気込んだところでノックが聞こえた。え、またかよ。この短期間に？

「どうぞ」

「失礼しまーす」

そう言つてそろつと入つてきたのは海老名さんだった。

「あれ、姫菜じゃん。やつはろー」

「はろはろー。ここつて奉仕部であつてるよね」

「そうよ、それで何か相談でも？」

「うん、実はちよつと戸部つちのことで……」

「ええ!! と、戸部つちのこと?!」

おい由比ヶ浜、そのリアクション0点だぞ。何かあんのバレバレじゃねえか。ほら、海老名さんもやつぱりつて顔してるし。うわ、面倒事の予感……。

「最近ヒキタニくんの戸部つちと隼人くんの絡みが多くて、ハヤハチの勢いにトベハチが迫る勢いなんだよ!」

「え?」

「でもその分大岡君と大和君との四人の絡み合いが少なくなつたから、何か仲悪くなつたのかなーと思つて」

「あ、えつと、それは……」

由比ヶ浜が詰まっている。

「確かにヒキタニくんと絡みもいいけど、元々のカップリングを捨てるのも惜しいのよ! だから今まで通りいいかないなものかなと思つてね!」

「俺はいらないけど」

「あの、彼女は何をいつてるのかしら」

「わからなくていい、やめとけ」

雪ノ下が腐に目覚めてみる。陽乃の目から血が流れるぞ。絶対にいいことない。

「まあ、大丈夫じゃないか？ 男子っていつも一緒って訳でもないし」

「それならいいんだけどね、ヒキタニ君よろしくね」

そう言い残して出ていった。あー、これは本当に面倒なことになったな。

「結局なんだったのかしら？」

「うーん、なんだったんだろ」

二人は完全に取り残されてるし。わからなかったっぽいな。でもこれは教えるべきじゃないだろう。たぶん由比ヶ浜がいるせいでわざと濁している。俺にだけわかるようにしたかったんだろうが、確信が持てないな。まあ大事なことからもう一回直で俺に言ってくるだろう。それくらい分かりにくかったからな。気付かなかったふりしとこ。

俺、ちゃんと戸塚と楽しい修学旅行できるの？

「あ、そうだゆきのん。三日目の自由行動さ、一緒にまわらない？」

「え、でもクラスが違うし難しいのではないかしら」

「その辺はどっかで待ち合わせすればいいじゃん？ ね！ どうかな！」

「そうね、それなら良さそうね」

「よし、じゃあヒツキーもね」

「は？ 俺は戸塚が」

「ほら、彩ちゃんも他の人とまわるかもしれないじゃん。グループは一緒なんだし」

「確かに、戸塚には他のコミュニティもあるもんな」

「そうそう。だからいいでしょ？」

「えー、俺は一人がい……」

「はい！決まり！三日目は3人ね！」

「仕方ないわね」

えー。えー、しか出てこねえよ。ちよ、俺の意思は……。

またまた時は過ぎ土曜日。今日はカフェで陽乃と待ち合わせである。店内に入ると店員に待ち合わせであることを伝えてから陽乃のもとに向かった。相変わらず目立つな。

「すみません。遅くなりました」

「大丈夫よ、まだ約束の五分钟前だし」

陽乃は既に注文を済ませているようなので俺もさっさと店員を呼んで注文する。

「そういえば聞いたよ、体育祭のこと。ぶつ、今でも笑える」

「おいなんでそれ知ってんだよ」

陽乃に知られたら絶対に馬鹿にされると思っただけだが、そんなにツボか？

「家の人間送り込めばって言ったの八幡じゃない。おかげで雪乃ちゃんの写真がいっぱい手に入ったわ。ついでに面白話も、くくつ」

「そんなに笑えますか？」

「だって誰が包帯でハチマキ偽装しようなんて思い付く？ どう考えても反則じゃん」

「俺影薄いからいけるかと思っただけですよ」

「いやいや、どんなに影薄くても隼人なんかには近づいたらバレるに決まってるじゃん」

「くつ、なんにも言えん」

「あははは、もう、八幡って策士なのか馬鹿なのかわかんないよね！」

馬鹿だって、ちよつとその件で自信なくしたんだから止めて。やる前までは素晴らしい作戦だと思っただけだよ？ しかもそのせいで負けちゃうし、こう見えて責任感じてんだぜ？

「折角、最近忘れかけてたのに。ほじくり返すんだから」

「いや、いいと思うよ。うん、可愛いつてそういうところ」

「全然嬉しくねえよ」

「もう、照れなくていいから。そうだ、今日はなんかあったの?」

そう、実は今日の誘いは俺からだ。

「ちよつと愚痴りたいことがあつてですね、そういうことできる相手が陽乃しかいませんから」

「お!なにになに!八幡の愚痴とか面白そう」

「俺達もうすぐ修学旅行なんすけど」

「そうだね、この前雪乃ちゃんがそわそわしながら準備してたから」

「え、あいつ独り暮らしですよ」

「この前買い物しているところ見たの。さすがにそこまで過保護じゃないわよ」

「どうだか」

「ちよ、それどういことよ!」

「あー、なんでもない、なんでもないです。まあそれですわね……」

陽乃に戸部の依頼と海老名さんの話をした。

「俺の、幸せ修学旅行計画With戸塚、が台無しですよ」

「八幡、とりあえずその戸塚つて子好きすぎでしょ」

ええ、そうですね。ここまで異様なくらい戸塚つて単語使ってる。さすがにキモい

か。

「まあそれはそれで。で、海老名さんは確実に告白の阻止を要求してますよね」

「そうね、私もそう思うわ。どうするの?」

「まあ、あれから特になにも言つてこないんで、そこまで重要じゃないのかなーと思うことにして放置します」

「それで大丈夫なの?」

「まあ、足は突つ込まないに限りますからね。それに頼み方もちよつと気にくわれないで真面目にお願いしてきたら考えてあげてもいいかな」

「でもそれ八幡やる必要がある?」

「彼女には体育祭での借りがありますからね。といつても俺は見合つていない貸し借りは嫌いなので、オーバーしたぶんはこっちの貸しにしようかな。あの人地味に使いそうだし」

「腹黒いわね。ちよつと私に似てきてない?」

「いや、リスクリターンの計算の結果ですよ。基本タダ働きなんてしないんで。でも陽乃に似てるつてのはなんか嬉しいですね」

「なにそれ口説いてる?」

「いえ、率直な感想です。陽乃を口説くなんて出来ませんって」

「ちえー、つまんないの」

陽乃は口説くよりも強引にいった方がいけそうじゃない？ まあ、どちらにしてもそこまで近づける人がほとんどいないだろうが。

「でもさ、そういう相談って普通隼人にしそうじゃない？ その子隼人のグループなんでしょっ。」

「確かにそうですね。なんで俺に来たんだ？」

「でも隼人じゃこういうことうまく立ち回れなさそうよね。戸部って子とも仲良いみたいだし」

「それについては同感ですね。あ、そういうええばあいつが海老名さんと一緒に教室入ってきたことがあったな。あれこの相談だったのか？ 困った顔してたし」

「それはあるかもね」

「じゃあなんで葉山は奉仕部に相談持ってきたんだ……。あー、なるほど、そういうことか」

「私も何となくわかったかも」

「どうやら陽乃も予想ついたらしい。まああいつとも付き合い長いしな。」

「あいつ俺達奉仕部に戸部を思い留めさせようとしてたのか。自分じゃ止めるに止められないから」

「でも思惑通りにいかなかった。きつとガハマちゃんなら海老名ちゃんと一緒にいることが多いから無理だつてわかるはず、そしたら止めてくれるとでも思ったのかな」

「でしようね。俺や雪ノ下も受けなれないと思つていたんでしよう。しかし由比ヶ浜に押しさられる形で受けてしまった。なるほど、由比ヶ浜の恋愛脳が計算に入つてなかつたんですね」

「それ普通いれないよね。というか入れられなくない?」

「それもそうつすね。葉山にとつてもイレギュラーの連続なんだな。うわ、あいつの修学旅行全然楽しくなさそう」

「あはは、さすがの私でも同情しちゃうわ。今度会つたときは優しくしてあげよう」

「それ逆効果じゃ?」

「ちよつと、失礼ね! いや、確かに急にそんなことしてもそうよね」

「雪ノ下との関係修復してあげた方が喜びますよ」

「そうね、まあ今後の様子を見て検討してあげてもいいかな。0が1になる程度だけど」
葉山はある意味周りに強く出れんからな。そのくせ全ての調和を保とうとするから、それぞれに気を使いすぎるんだ。少しは突きつけてやつてもいいだろうに、特に由比ヶ浜。でもあいつはそんなことしないんだろうな。

「これうまくいけば葉山にも貸し作れそうだな」

「わー、腹黒八幡だー」

もうなんともいえない。でもこれ結構美味しい。一応頭に置いておこう。

「なんかそこまで億劫じゃなくなってきたね。策はそのときに考えればいいし」

「じゃあ修学旅行楽しめそうだね。その勢いでいいお土産よろしく！」

「あんま期待しないでくださいよ」

「あれだよ、センスをよくするための一環で」

「まあそこそこ頑張りますよ」

なんか宿題出た。

「いいなー、旅行かー。私も行きたいな。こつそりついていこうかな」

「なにいつてんすか、あんた大学でしょうが」

「わかってるわよ。ちよつとした冗談じゃない」

「あ、俺と行きたかったんですか？」

「んなわけないでしょ！ なにいつてんのよ！」

「わかってますよ。ちよつとした冗談です。くくつ」

「むー、なんなのよ。ちよつと最近調子に乗ってない？」

「いえいえ、滅相もない。陽乃相手に調子に乗るなどけして」

「じゃあ罰としてお土産総額一万円ね」

「おいちよつと待て、それは止めて！ 飯とか俺の分の買い物できなくなるから」

「えー？ なんだってー？ 聞こえなーい」

「このあま」

この後店員に注意されたのは言うまでもない。気まぎれになった俺達は店を出て、しばらく辺りをぶらぶらしたあと別れた。

来週は修学旅行だ。

八幡は旅の始まりを楽しんでいる

修学旅行前日。俺は明日からの準備のためクロゼットを漁っていた。何がいるんだっけ？基本は制服だから夜の服だけ考えとけばいいか。

下着と寝巻きを適当に取り出し鞆に詰める。ついでに洗面具なども一緒に詰め鞆を閉める。なかなか余裕があるな。まあ荷物は軽いに越したことはない。向こうで買うって手もあるしな。あ、金は多めに入れとこう。

準備が一区切りついたので寝る前に水でも飲もうかとリビングに行く和小町がいた。待つてましたと言わんばかりに。これ、俺が来なかつたらどうするつもりだったんだろ。

「どうした小町」

「ふふん、これを渡そうと待つていたのだよ。しゅばっ！」

効果音自分で言っちゃうのかよ。で、なにこれ。ん？ お土産リスト？ ふむふむ、八ツ橋とあぶらとり紙と????ね。うん定番だな。

「了解した。じゃ、明日に備えて寝るから、おやすみ」

「え！ ちよっと待つて！ まだ最後の発表してないよ！ とうか触れてよ！ 小町

的にポイント低い」

「いや、ろくなもんじゃない予感がしてな」

「大丈夫大丈夫。はいこれ」

「ん？ カメラか？」

「そうです！ 最後の項目は、いい思い出です。たくさん写真撮ってね」

「おう、ありがとな。持ってくわ」

小町、地味にフラインプレード。そうだ、戸塚とたくさん写真撮らなくてはいけない。カメラを忘れるなんて……。今までこんなことなかったからな、仕方ないか。

「じゃ、今度こそ寝るから、おやすみ」

「うん、おやすみー」

部屋に戻り、荷物の最終確認をしてベッドに潜り込む。明日は集合が東京駅だからいつもより早めに目覚ましをセットしないと。よし、いざ夢の中へ……。

はい、おはよう。一本線挟んで朝です。何言つてんだろ。朝御飯を食べにリビングに行く。小町はまだ起きていないようだ。その代わりに親父とお袋がいた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「あんた今日から修学旅行よね。お金あげるからお土産よろしく。余った分はあんたの好きにしていいいから」

そう言ってお袋から2万渡された。え、まじ？ 多くね？

「いいのか？」

「何言ってるの。こつちが頼んでんだから」

「でも多くね？」

「それくらい普通じゃないの？ 修学旅行の小遣いって」

「まあ、あんがと。ちゃんと土産買ってくるわ」

「よろしく。小町も言ったかもしれないけど私の分もあぶらとり紙買ってきてね」

「ああ」

にしても珍しくないか？ 普段は小遣いくれないのにな。不思議に思いながら朝食を適当にとったあと、身支度をするためリビングを出た。すると親父が俺をおって出てきた。

「おい八幡」

「ん、なんだ？」

「これやるからさ…、」

そう言つて五千円差し出してきた。え、親父まで何？

「良さげな酒買つてきてくれないか」

「え、俺未成年だし無理じゃね」

「あ、それもそうだな。すまん、まあこれ持つてけ」

俺の手に五千円握らせてきた。え、なになにに?! お袋といい親父といいどうしたんだ? しかもちよつと酒買えないから落ち込んでるし。まじなんなんだ、旅行に行く前に軽くパニツクだぞ。

「まじで?」

「ああ」

「酒、頑張つてみるわ」

「本当か? できたらよろしく」

その後すごいもやもや、むずむずしながら身支度を済ませ、家を出た。えー、本当になんだつたの。意味わかんないよ。

そのまま悶々としながら最寄り駅まで行き東京行きの電車に乗った。

ここは東京駅。知らないうちに着いていた。いかん、切り換えんな。朝の事は考え

でも仕方ない。

で、どこに集合だっけ？ しおりを見てキョロキョロしていると俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「はちまーん」

これはあれだな、幻聴だな。面倒は避けよう。

「無視するでないぞ八幡。我という唯一無二の友が呼んでいるのだぞ」

家の学校の制服着てるやつの後を追っていけば行けるか？ でもなんか、さつきからあいつついてきてるんだけどキモい、とか思われそうだな。

「え、ちよつ、無視しないで。お願い、我お主にまでいないものにされちゃったら生きていけない」

「おい、それはさすがにキモいぞ、材木座」

「ふははは、やつと反応したな八幡よ」

「なんか用か？」

「いや、お主を見かけたのでな。声をかけようと思っただけである」

「そうか、そういうやお前うちの学校の集合場所わかるか？」

「ふむ、それならこつちだぞ。ついてくるがよい」

「お、助かるわ」

いいところに現れたな。たまには誉めてやろう、心の中で。で、なんかこいつ眠そうなんだけどなんなんだろうか。

「おい、なんでお前そんな眠そうなんだ？ まさか楽しみで眠れなかったとかか？」

「お主正気か？ 我がこんなイベント楽しみなわけなからう。ハブにされて終わるのが目に見えているのに……、グスツ」

「それもそうだな。ゲームでもして徹夜か？」

「いや、漫画やラノベを読みまくっていた」

「それ別に昨日じゃなくてもよくないか？」

「今日から三日三晩触れられないからな」

「お前そこまで拗らせてんのかよ」

「そうではない。定期的に触れないと口調が戻ってしまうのでな。昨日の晩のうちに詰め込んだのだ。ネーミングなど出来なくなってしまうてはつまらんだろ」

「……お前そんな苦勞して、そのキャラ保ってたのかよ」

「そうであるぞ。なかなか大変なのだ」

逆になんでそこまでしてんのか謎だよ。

「それに眠いと移動時間に寝れるであろう？ そうすれば隣の席の輩と気ままずくなることもない」

「おい、そつちが本命だろ」

材木座とそんな他愛もない話をしながら歩いてみると総武の制服を着ている大きな集団が見えてきた。クラスごとに集合なので材木座と別れ、自分のクラスを探す。こういう時に葉山つて便利だよな。あのキラキラしたのがいる集団がうちのクラスだろ？

集合時間になり先生の話が始まった。生徒たちはそそくさと整列して新幹線に乗り込む準備をする。席はグループごとに乗ることになっているが難しくないか？ 3人席と2人席なのにグループは四人ずつだ。

そう思いながら中に入ったがクラスの連中はグループごとに適当に混ざって向い合わせで座っていた。おう、そういう手があんのか。でもこれだと戸塚はいいとして、葉山や戸部と混ざるところを考えると絶対にあーしさん達だよな。そんなところに混ざりたくないな。

そんな俺に天使の声が届いた。

「八幡、こつちこつち」

「おう、隣いいのか？」

「もちろんだよ」

戸塚が二人席の隣をぽんぽんして呼んで来た。やばい、涙でそう。めつちや可愛いし、俺もぽんぽんして。いや、流石にそれはキモいな。でもナイス2人席。もう修学旅

行終わりでいいんじゃないか？

戸塚のとなりに座る。すると隣で葉山と戸部、三浦たちの班が席を決めていた。

「あーし、窓側座る。結衣と姫菜は？」

「私は通路側がいいかなー」

「私はえつと…」

あーしさん、一足先に席をゲット。それについて海老名さんが通路側を希望。由比ヶ浜はなにやら考え事。恐らく戸部と海老名さんをどうこうとか考えているんだろうが。そして地味に班のメンバーである川崎がすごい苦い顔をしていた。でしようね、あの中に入るの辛いだろうよ。

「まあ、適当でいいんじゃないか？ 席は後で替われるし。俺は窓側座ろうかな？」

葉山が席につく。あ、あーしさん葉山が前に来て嬉しそうですね。さて、俺も助け船を出してやろう。

「おい、川…サキサキ、そっち嫌ならこっち来るか？」

「え？ つて、比企谷か。ほんとに？ まじでいいの？」

「戸塚、構わないか？」

「うん、全然大丈夫だよ」

「だとさ」

「ありがとう。まじで助かる」

そう言つて川崎は戸塚の前、窓側に座つた。てかなんで俺達の前の席こつち向いてんの？ それ前に向けて川崎1人で座ればよくない？ まあいいけど。

さらつと離脱した川崎をよそに隣は結局葉山の隣に戸部、そのとなりに知らないうちにいたモブの1人、大岡だっけ？ 大和？ どっちだっけ、まあ大〇が座つていた。他所であぶれたのだろうか。女子は三浦、由比ヶ浜を挟んで海老名さんだ。由比ヶ浜の思惑はうまくいかんかったみたいだな。というかそのメンツで座つたらいつも通りだからそんなこと気にしても意味ないだろ。

うちの席は川崎の隣は空いたまま。どうやらうちのクラスの人数的に問題ないっぽい。

しばらくして新幹線は動きだし、クラスの連中はそれぞれ旅の始まりを満喫し始めた。俺達？ 俺と戸塚はちよいちよい話して川崎は外を眺めてます。実に俺達らしいと思う。ちなみに予想通りというか、隣はいつものノリで遊んでます。

それからしばらく何もすることなくぼけーといていたら戸塚が思い出したように口を開いた。

「あ、そういえば八幡さ。この前の休み街に出てきてた？」

「どうした？ 急に」

「この前テニススクールの帰りに八幡かなつ人見かけたんだけど、人といたから話しかけられなかつたんだよね」

「あ、それあたしも見かけた。先々週くらいで戸塚とは時期違うけど」

「まじで？」

「うん、なんかすごい綺麗な人だったよ」

「そうそう」

「あー、じゃあそれ俺だわ」

「やつぱり八幡だったんだ。もしかして彼女だったりするの？」

「いや、友達だ。俺に彼女はできそうになくないか？」

「そんなことないよ！ 八幡かつこいいもん」

「おう、そうか。ありがとな」

戸塚がそんなこといつてくれるなんてな。すごい嬉しい。にしても見られてたか。別に隠しているわけではないし、ないよな？ まあ雪ノ下や葉山は面倒そうだけど、こいつらは別に問題ないし知られてもいいか。

「あれってさ、雪ノ下の姉？」

「おう、よくわかったな川崎」

「文化祭のときに目立ってたからね」

「あー、なるほど」

「あの人雪ノ下さんのお姉さんなんだ。僕もどこかで見たことあるような気がしたと思ったら、文化祭で見てたんだね」

「でもあんたが友達って珍しいね」

「まあいろいろあつてな。つても最近の話なんだが」

「そう」

「八幡すごい人と友達なんだね」

「そうでもねえよ。あの人も結構普通なところ多いし」

「そうなんだ」

「へー、以外。あの雪ノ下の姉だからとんでもない人だと思ってた」

「いや、それは否定しないぞ。思ったよりもって意味だ。できは雪ノ下以上だ」

「あはは、それはすごいね」

「でも弄るといいリアクションする」

「ふーん、仲良いんだね」

川崎と戸塚がいい笑顔を向けてくる。なんかすごい照れくさいな。やっぱ、こいつら

いいやつだわ。これも友達って言っつていいんだよな。

「まさか俺に友達ができるなんて、昔は思いもしなかったな」

「僕は八幡と友達になれて嬉しいよ」

「そうか、俺もよかつたわ。川崎もな」

「え？　そ、そう。あんがと」

なんかしんみりしちやつた。そしてまた恥ずかしいこといったな。最近本当に抵抗なくなってきた。ちよつと離脱しよ。

「俺、トイレいつてくるわ」

「うん、気をつけてね」

席をたつてトイレに向かう。結構みんな遊んでんな。そんなんで4日ももつのか？　それとみんな遊ぶもん持つてきすぎだろ。

トイレを済ませて席に戻ると二人とも寝息をたてていた。わ、戸塚の寝顔だ。にしてもしこいつらの寝顔綺麗だな。俺も寝るか。

は、ここどこだ。そういや修学旅行だったな。それはそうとなんか右肩にぬくもりを感じる。これあれだよな、間違いないよね。シャッターチャンスじゃないのこれ。で

も、ちよつと体勢きついな。

少し動いて楽な姿勢になろうとしたら戸塚が少し唸って目を覚ましてしまった。あー、ぬくもりが……。

「八幡？」

「おお、おはよ」

「うん、おはよう」

「今どの辺かな」

「んー、時間はそんなにたつてないみたい。外見たらなんかわからないか？」

「ちよつと見てみる」

「あ、八幡。見て見て！」

「なんだ？」

「ほら、富士山が見えるよ！」

「ほんとだな。本物は初めて見る」

「僕もだよ。すごいね」

「タイミングよかつたな」

俺達が少し騒いでしたっせいで川崎も目を覚ました。

「よう、川崎。ちょうど富士山見えるぞ。見るか？」

「ん、見たことないから見とく」

「ほら」

「あ、ほんとだ」

そうして短い間だったが俺達は富士山を楽しんだ。

「富士山見えたってことはまだ京都まで半分以上あるのかな」

「そういうことになるな。といつても一時間半くらいじゃないか？」

「でももう寝れないよね」

「確かに」

「なんかするか？ 俺何も持ってないけど」

「僕トランプ持つてるよ」

「トランプか、大富豪とか出来るか？」

「僕はできるよ」

「あたしも」

「あ、でも細かいルールは？」

「そうだな……」

ルールを話し合った後、俺達3人はゲームに興じた。てか、二人とも強くね？ 特殊

ルールの使い方がまずすぎだろ。

その後途中でやって来た材木座も混ざって四人でトランプで遊びまくった。材木座曰く、トイレに行っていた隙にグループの面子と仲の良いやつに席を取られて行き場をなくしたらしい。それで俺のところに行って来たとか。いきなりエグい仕打ちを受けたようだ。

結局そのまま京都まで遊び倒し、駅につく前に材木座は元のクラスに戻った。今回の修学旅行、かなりいい滑り出しじゃないか？ このままいい感じで終わればいいな。なんかこれフラグっぽいからやつば取り消しで。

え、戸部？ 由比ヶ浜？ なんのこと？

ようやく旅の一日目が終わる

新幹線を降りた俺達は次にバスに乗り込んだ。目的地は清水寺のあるところらしい。もちろん隣の席は戸塚。戸塚のおかげでこの旅行抜群の安定感だ。

数分間バスに揺られ目的地に着いた。バスから降りると恒例のクラスごとの集合写真の撮影をして、大勢でそろそろと拝観入り口に並ぶ。結構待ちそうだが俺の得意分野だ。こんなものボケーっとしておけば知らないうちに入れていいる。

そう思つて一生懸命ボケーっとしようと意気込んでいたところで声をかけられた。

「ヒツキー…」

「あ？ 由比ヶ浜か」

「面白そうなどころ見つけたから行こうよ」

「え、今並んでんだけど」

「でも進まないでしょ？」

「いや、こういう待つの得意なんだけど」

「確かに得意そう…。じゃなくて！ 戸部っちの依頼もあるしさ」

「え、俺どうでもいいんだけど。戸部も結構本気みたいだし大丈夫じゃねえの？」

「そうだけど…。ほら、少しでも可能性はあった方がいいじゃん。もう姫菜たちも呼んでるしや」

いや、全く期待できないと思うんだが。焼け石に水ってこの事だろ？

「ちなみにどこ行くんだ？」

「なんか胎内めぐり？ってやつ」

「む、少し気になるな。行ってみるか」

なんか聞いたことあるぞ。暗い中を進んで最後にお祈りするやつだろ。後で探そうと思ってたんだが別に今でもいいか。

由比ヶ浜の後をおってその場所に行くと葉山、三浦、戸部、海老名さんの四人がいた。お金を払い、入り口までいったところで葉山が口を開いた。

「結構暗いみたいだから俺が先に行ってみるよ。みんなはその後に続く感じでいいよね」

「あーし隼人の次行くわ」

「私は優美子の後ろかな」

「じゃ、俺次行くつしよ」

どうやら蛇というカムカデというか、一列で行くようです。葉山が揉めてもいないのに率先して提案するのは珍しい。これはこの前の陽乃との推測、いいところついているん

じゃないか？ 由比ヶ浜はまたもや難しい顔をしていた。もう諦めればいいのに。

俺は一番後ろについて進んでいった。本当に真つ暗で少し肌寒い。手すりは必須だ、なんも見えん。葉山たちの小さいしゃべり声もしつかり聞こえてくる。戸部は例外、あいつ本当にテンション高いよな。逆に尊敬するわ。

しばらく進むと奥の方に淡い光が見えてきた。ほう、あれが随求石か。なんかこの霧囲気ゲームでありそう。

石に辿り着くとそれぞれ石を回してお祈りした。俺は最後で、既にみんな外に出ていった後ゆっくりお祈りした。

「ヒッキー遅かったね」

「まあな、結構ああいふ暗いところ好きなんだよ」

「へー、そうなんだ」

「それより少し急いだ方がいいんじゃないか？ 他のやつらもういったんじゃないか」

「そうかもな、ちよつと急ごうか」

「んじゃ、行くべ」

そこそそ急いで清水寺の本堂に向かう。なんとかクラスの連中が入る前には戻ることができた。というか俺、かなりナチュラルに葉山たちと行動を共にしたな。変なの。本堂に入り、さらに進むと清水の舞台である。うわ、本物の清水の舞台だよ。幾度と

なくテレビで見てきたけど自分の足で立つてみると何か来るものがあるな。欄干に近寄って見ると綺麗な紅葉を見ることができた。ほんとすげえ。

ちなみに地面まで十数メートルあるらしい。清水の舞台から飛び降りるっていうけどこれ死んじゃうよね。相当な覚悟じゃないと……。あのことわざ軽々しく使うの止めようかな。

「うわ、すげえ……」

どうやら近くの由比ヶ浜も感動しているようです。俺もしばらくこの余韻に浸りたい。

「あ、ヒッキー！ 写真、写真！」

おう、お前は浸らないタイプだよな。異様に切り替え早い。

「写真か？ ならほれ、カメラ貸してみ」

「え、はい」

「はい、とるぞー。よし、オッケーじゃね」

「うん、よく撮れてるね。や、じゃなくて！一緒に……」

「おーい！ 結衣ー！一緒に写真とるし」

三浦と海老名さんがやって来た。

「あ、ヒキオじゃん。ちようどいいや。写真とるし、よろしく」

「私のもよろしく」

「仕方ない、了解した。ほれ、撮るぞー。はい、ピーナッツ」

「ちよ、ヒキオ、なんだしその掛け声」

「何って、ちよつとした千葉のPRだ」

「いや、それ誰もわからんしよ」

え、まじ？ピーナッツといえは千葉だろ？ それぞれのカメラで数枚撮ってから返そうとしたところで三浦が声をあげる。

「あ、隼人ー！ 隼人たちも一緒に撮ろー」

「ああ、そうだな。ん、ヒキタニ君がとってくれるのかい？」

「まじ？ 俺のもよろしく！」

いつもの葉山グループ四人がやって来てカメラ四つ寄越してきた。ちよ、別に撮るのはいいんだかこんなにカメラキープできねえよ。

「あ、八幡！ って、どうしたのそのカメラ！」

「撮るの頼まれてな」

「それじゃ撮れないでしょ。僕が持つとくから」

「さんきゅー、助かるわ」

「これ終わったら一緒に撮ろうね」

「了解」

戸塚ナイスアシスト。そして俺のカメラに遂に順番が来るか。

さくさくと業務をこなし、やつと撮り終わった。というか途中からどんどん人が増えていったんだけど何？知らないうちにカメラの数、十は越えてるぞ。おまけに戸塚のとなりに川崎までヘルプに来てくれるし。

それぞれにカメラを返し終わったあと、皆は元のグループに戻って行った。よし、次は俺達の番だな。

「じゃあ、俺達も撮るか」

「そうだね。誰かに頼もうか」

「それならあたしがやろうか？」

「いや、お前も一緒に撮ろうぜ」

「そうだね、3人で撮ってもらおうよ」

俺は見渡して場を離れようとしていた葉山に声をかける。

「おい葉山」

「なんだい？」

「俺達さつきお前らの写真死ぬほど撮ったからお前が代表で俺達の写真撮ってくれ。3人分だしいいだろ？」

「君が頼み事なんで珍しいな」

「これは頼み事じゃねーよ、取引だ。全然見合つてないが」

「確かにそうだな。そのくらいやらせてくれ」

「よろしく」

そうして俺達は3人で写真を撮つた。小町ちゃん、お兄ちゃんちゃんと普通の修学旅行でできてるよ。

本堂を出てから奥の神社へと向かう。縁結びの神様で有名らしく先ほどから多くの生徒が騒いでいる。お守りを買うための列もすごい。

そしてちやつかりその列に並んでお守りを購入した。え？ 俺のなわけないじゃん。

「おい、川崎」

「ん、なに？」

「これ、大志に渡しといてくれるか？」

「え、これつて。小町、いいのかい？」

「いや、それがな。この前小町と話していたときにあいつに全く望みがないことが発覚してな。なんか俺があれこれいう必要もなかったみたいで。気休め？ いや、慰めか？」

「みたいな感じだ」

「ま、よくわかんないけど渡しとく」

「頼む」

大志、強く生きろよ。

特にすることのなくなった俺は辺りを見渡すと、人が密集しているところを見つけ
た。そういうえば恋占いの石つてやつがあるらしいな。高校生超好きそう。その騒ぎを
遠目に見ていると戸塚が話しかけてきた。

「八幡、みんなおみくじ引いてるみたい。僕たちもやろうよ」

「たまにはいいかもな、行くか」

おみくじ売り場に行くのと既に葉山たちが開封作業をしていた。

「よっし、あーしきすがだわ」

「へー、優美子大吉だ。すごいね。私凶だよ」

「あはは、俺も凶だ」

「つべー、隼人くんが凶引くとかあんだな。あ、俺も大吉じゃん。あがるわー」

「えー、私末吉だー。あれ、ヒツキーも引いたの？」

「まあな、大吉だ。戸塚は？」

「僕も大吉だったよ」

「まあここのおみくじは凶の次に大吉が出やすいからな」

「そうなの？」

「らしいぞ。末吉はレアな方みたいだ」

「んー、そのレアはあんまり嬉しくないかなー」

「そうなんヒキタニ君。んじゃ、別に隼人くんも海老名さんも普通なんじゃね?」

「そうだな。それに凶が一概に悪いって訳でもない。書いてあることはそこそこいいことだったりするっぼいぞ」

「あ、本当だ。私のそんなに悪くかいてないや」

「俺も。ヒキタニ君よく知ってたな」

「テレビで見たことあっただけだ」

にしても大吉って久しぶりに引いたな。でも内容はなんか微妙じゃね?なんだよ最終的にいい感じで終わるでしょうって。俺的に最初から最後までいい感じがいいんだけど。

おみくじが終わると次は音羽の滝である。学業、恋愛、長寿のご利益がある水が三筋流れている。わー、真ん中にすごい大きなペットボトル持った大人がいるよ。そんなことしてるから結婚できないんだと思います、平塚先生。

清水寺を出た後、他に数ヶ所巡り宿泊する宿にやって来た。部屋割りはクラスごと

二、三部屋で、グループがいくつかドツキングして8人くらいである。先生の話の後それぞれ部屋の荷物を置きに行き、すぐ夕食であり、その後入浴だ。

つつがなく夕食、入浴を終え、ある意味一番盛り上がる修学旅行の夜だ。戸塚の風呂？ そんなのは神のみぞ知るでいいんだ。俺達が踏み込んでいい領域ではない。

葉山たち四人は既に麻雀を始めていた。俺は何しようか、もういつそ寝たろうかと、そんなことを思っていたときにまたしても戸塚が誘ってきた。

「八幡、僕たちも遊ぼう」

「そうだな。で、何やるんだ？」

「これ、八幡できる？」

そうやって出してきたのは花札だった。

「一応、こいこいだよな？」

「うん、それそれ」

「あれだな。夏によく見る某アニメ映画に憧れてルール勉強したな」

「八幡もなんだ。僕もあれみてたらなんかやりたくなっちゃって覚えたんだ」

こうやって実際やってみて思うけど、あの映画かなり運いいよな。揃えたい役のうち一枚は大抵持っていかれるし。

しばらく遊んだ後、飲み物を買うために部屋を出て一階に降りて自販機へ向かう。お

い、マツ缶ねーじゃんか。まじかー、もうブラックでいいや。コーヒーを買って近場のベンチに座る。

しばらくブーツとしてしていると知った顔が現れた。お土産コーナーに直行し、ご当地パンスンさんストラップを凝視している。そう、雪ノ下だ。あ、こっちに気づいた。

「こんなところで何をしているのかしら、ハブ谷君」

「別にハブにされたわけじゃねーよ。騒がしかったから出てきただけだ。そういうお前こそハブじゃねーのか？」

「面倒な話の矛先がこっちに向いたから逃げてきたのよ」

「へー、で、あれ買わなくていいのか」

「ええ、見ていただけだもの。あなたお土産は？」

「良さげな店が今日はなかったからな。明日、明後日見かけたら買うつもりだ。小町からはリスト預かってるしな」

「そう」

「お前はお土産買うのか？」

「一応ね、家に適当に」

「姉ちゃんに買ったらしねーの？」

「そうね、何か見つけたら買ってあげてもいいかしら」

「ほう、意外だな。お前のことだから買わないかと思った」

「私は別に姉さんが大嫌いつて訳ではないもの。文化祭でも言ったように一応認めてはいるのよ。でもまあ…、いろいろあるよの」

「そうか」

「それに最近なんか以前より柔らかくなった気がするのよ」

「へ、へー、それは良かったな?」

「そうなのか、雪ノ下相手にも少し変わったみたいだな。」

「この頃すごく楽しそうなの」

「ふーん」

「いったいどうしたのかしら、何か知っている?」

「え、い、いや。俺が知るわけないだろ」

「そうよね」

おう、冷や汗ダラダラ、あぶねー。

ちよつとしたピンチに見舞われた俺は視線を他所に向ける。すると明らかに怪しい格好をした我が部の顧問を見つけた。あの人がやってんの。

「おい、あれ平塚先生じゃね?」

「本当だわ、何かしらあの格好。恥ずかしくないのかしら」

「お、こつち見たぞ。てかこつち来た」

「おい、君たちこんなところで何をしている」

「先生こそ何処行こうとしてたんすか？」

「ちよつとラーメン屋に行こうと」

「それつていいんでしょうか」

「いや、あまりよくないからこんな格好してるんだ。しかしばれてしまったな。うん、君たちも来たまえ、ご馳走しよう。赤信号も皆で渡れば怖くない、だ。」

「え、まじすか。奢りならその話乗りましょう」

「私は結構です」

「そうか、まあ無理強いはいしない」

雪ノ下とは別れて先生と二人でタクシーに乗り込み、ラーメン屋へ行つた。この人とは無駄に興味があうんだよな。でもイラツとさせられることも多いし。この人ほど両極端の感情を与えてくる人も珍しい。

美味しいラーメンを食べたあとタクシーを拾うため大通りへと向かう。すると途中で開いている酒屋を見つけた。そうだ、一か八か先生に頼んでみるか。

「先生、頼みがあるんですけど」

「ん、なんだね？」

「酒を買ってくれませんか」

「いや、流石に生徒に酒を買え与えるのは……」

「すいません、俺じゃなくて親父に買いたくて」

「ほう、君がそういうことを考えるとはな」

「こつちに来る前にちよつとありましてね。俺も変な感じですよ。で、頼めませんか」

「いいだろう。でも他言無用だぞ」

「そりゃこつちが頼んでますからね。助かります」

「構わん。いつか君と飲める日が来るといいな」

「え、まじすか。そういえば先生って教え子と飲んだりするんすか？」

「ああ、といつても陽乃くらいだが」

「へー、陽乃と。あの人酒強いんですか？」

「かなり強いぞ。ん、今陽乃って言ったか？」

「あ、や、気のせいでは？」

「ふ、そんなことで誤魔化せるとでも？」

「いえ、決してそんなことは」

「なるほど、この前会ったときにやたらとスッキリしているように見えたのは君のおかげだったのか」

「そこまでじゃないです。乗り越えたのは陽乃自身ですから。逆に俺が助けられてる方ですよ」

「そうか、君はそういう相手を見つけられたんだな。陽乃も。私はあまり力になれなかったようだな」

「それはないんじゃないですか？ 陽乃にとって先生の存在は大きいでしょうし、俺

だって先生に奉仕部にぶちこまれなければ陽乃と出会えてませんから」

「そういつてくれると嬉しいな」

「ただ先生にはもう少し色々良く見て考えてほしいですね。すいません、少し凶々しいことを言いました」

「いや、構わんよ。教え子にこんなこと話すのもなんなんだが……。実はこの前私の恩師と会ってな、君たちとのことを話したら怒られたんだ。少し無責任が過ぎる、方法は悪くはないが生徒が危ない橋を渡る前にちゃんと動くべきだってな。思い返してみるとその通りだったよ。私はいつも最初と最後だけ、基本外から見ただけで、その結果君が損をする方法を取らせ続けてしまった。今更だが、すまなかつた」

そんなことがあつたのか。少しこの人を見くびっていたかな。

「別に構いませんよ。俺は損してるなんて思つてませんし」

「相変わらずだな君は。でも雰囲気は良くなったように思うよ」

「どうもです」

「さ、さつきと親父さんへの土産買って戻るぞ」

「お金はこれでお願ひします」

「郵送だよな？」

「はい」

「ではいいものを選んでやろう」

ほんと、嫌いになるに成れない、憎むに憎めない人だ。

酒を買い、送り終わって宿まで戻ってきた。部屋に戻る頃には出てから一時間ほど経っていた。それなのにお前らまだ遊んでんのかよ。つてもまだ一時間過ぎくらいだし普通か。

「あ、八幡おかえりー。かなり遅かったね」

「おう、ちよつとな」

「そうだ、今葉山くん達と交代で麻雀やってるんだけど八幡も混ざる？」

「お、ヒキタニ君じゃん。ちよ、隼人くん達まじ強くてさー、混ざってくんね？」

「別にいいが俺もそこそこできるぞ」

「まじ？ つべー、弱い俺だけかよ」

「戸部くん、僕もそんなに出来ないから。さつきから僕と戸部くんだけローテーション

みたいになつてゐるし」

そんな会話をしていると部屋にでかいのが入つてきた。

「はちまーん、我と遊んでー」

「何しに来た材木座」

「もうお主しか頼りがいないのだ。我は交代待ちなのだが一向に交代がやつてこない」

「どんまいだな。で、何するつもりだ？」

「ウノを持つてきた」

「ウノか」

「ちよ、材木座君それファインプレーだわ。隼人くん麻雀やめてウノにするべ」

「ウノか。大人数でできるしいいな」

おい戸部、それももう麻雀勝てないからだろ。それにお前のせいで、急にザ・リア充に

話しかけられた材木座が石と化したじゃねーか。

「おい材木座、しつかりしろ」

「は！ 何事だ?!」

「今からウノだ。お前もやるんだろ、安心しろ。葉山はハブにはせんだろ」

騒がしいまま夜は更け、12時になった頃お開きになり就寝となった。

結局戸部弱いじゃねーか。

八幡は彼女の話聞く

修学旅行二日目。今日はグループで行動する日である。朝からバカみたいに混雑しているバスに乗って映画村までやって来た。葉山達は皆、江戸のような町並みを見てはしゃいでいた。

「八幡大丈夫？」

「おう、なんとか」

俺はすでに人混みにやられグロッキー寸前です。

色々アトラクションを見てまわり、最後にお化け屋敷に行くことになった。あまり得意じゃないから断りたい、断りたいけど……、

「八幡！お化け屋敷だって！僕好きなんだー。楽しみだね」

こんな満面の笑みの戸塚を前にそんなことは出来ない。してはいけないのだ！

8人は多いということで四人ずつに別れて行くことになった。俺と行くのは戸塚と川崎、由比ヶ浜である。先に葉山たちがはいつた後、それに続いて俺達も入る。

「あたしこういうの苦手なんだよね」

「へー、川崎はおばけが怖いのか？」

「え、あんたも怖いんじゃないの？」

「いや、おぼけは別にどうってことないな」

「は、じゃあなんでそんなにびびってんの？」

「え、そう見えるか？」

「逆にそんなんで見えないわけなくない？」

今の俺の状況を説明しよう。楽しそうに進む戸塚の後ろに引っ付いてます。

「僕も怖いのかと思ってた。違うの？」

「違うんだ。俺が苦手なのはビツクリすることだ。こういうところは急に驚かしてくるだろ？下手したら心臓止まる。じわじわ来てくれるなら大丈夫だ」

「じゃあヒツキー、怖い話とかは大丈夫ってこと？」

「そうだな、どうせ作り話だし。それよりもリアルにあつた人間のどろどろした話の方が……、つつ………」

『ぎゃー』

急におぼけ出てきた。俺を除く3人は大きな悲鳴をあげている。え、俺？ 声が出ませんでした。その後も何度か気を失いそうになりながら進んでいき、なんとか出た。

「八幡、大丈夫？」

「な、なんとか」

はい、本日2回目の大丈夫？入りましたー。にしてもすごいな、なんで戸塚はそんなにツヤツヤしてるんだ。一緒に出てきた他二人もボロボロなのに。そんな俺達を確認した葉山が切り出す。

「結構遊んだな。そろそろ次に行こうか」

「えっと、次はどこ行くんだっけ？」

「金閣寺とかあるところだったはずだ」

ぞろぞろとバス乗り場へと向かう。かなりの混み具合だったので、俺の提案でタクシーで移動することになった。あー、快適でござる。

それから色々な寺や庭を見て見てまわり、龍安寺へ行くため歩を進める。その途中で由比ヶ浜が話しかけてきた。

「あんまりうまくいかないね」

「そりやそうだろ。こんなんでもポンポンうまく行くななら今頃世界はリア充だらけだ」

「そうだけども。やっぱ、戸部つちに頑張ってほしいじゃん？」

「戸部は充分頑張ってるんだろ」

「うん。でも力になりたいからさ」

「その気持ちを悪いとは言わんが、お前はもうちよつと全体を見た方がいい。ほどほどにしとけ」

そう言い残して到着した龍安寺に入る。ここにはあの有名な庭があるんだよな。どの角度から見ても全部の石を見ることが出来ないらしい。こういうのって実際試してみたくなるよな。

その庭へ行くと先客の中に雪ノ下を見つけた。

「よう」

「あら、奇遇ね」

「だな。もうすぐ由比ヶ浜も来ると思うぞ」

「そう、なら少し話をして来ようかしら。依頼も任せつきりだし、一応考えたルートも渡しておきましょう」

「へー、そんなの作ったのか」

「なにもしないわけにはいかないもの」

「そうか」

話を終えて、雪ノ下はちようどやって来た由比ヶ浜の元へ行つた。俺は早速いろんな角度から庭を見てみることにした。ほー、本当に見えないんだな。何を思つたらこんなの作れるんだろうか。

予定を消化した俺達は宿へと戻つてきた。ちようど夕食の時間の前だったので、部屋に荷物をおいて食へに行く。その後風呂をゆつくり済ませて部屋へ戻ると、なんかすご

い人数が集まっていた。え、なにこれ。

「おい、戸塚」

「あ、八幡おかえり」

「おう。なんだこの人数」

「皆で麻雀大会することになってクラスの男子がほとんど集まってるんだ」

「なるほど、それで葉山のいるこの部屋が会場になったわけか」

「そうみたい。僕も参加するけど八幡もどう？」

「流石にここまで騒がしいのはな、遠慮しとくわ。外出てくる」

「わかった。今度一緒にやろうね」

「おう」

戸塚に手を振って部屋から出る。さて、どうしよう。コンビニに立ち読みでもしに行
くかな。

宿を抜け出してコンビニへやって来た。何を讀もうか探していると声をかけられた。

「ん、ヒキオじゃん」

「よお」

「そーいやあんたらさ、何企んでるわけ？」

「いや、特には」

「海老名にちよつかいだしてんじゃん」

「あー、俺らつてより頑張つてんのは由比ヶ浜だな」

「はあ、結衣何やつてんだし。どうせ戸部のためなんだろうけど」

「知つてたのか？」

「流石に見てりゃわかるし」

「だよな」

「ちよつとき、話さない？」

「俺とか？」

「あんたしかいないでしょ。立ち位置的にあんたが適任なのよ」

「まあ、いいぞ。場所移るか」

コンビニでそれぞれ飲み物を買って宿に戻る。一階の休憩スペースに机を挟んで座る。この時間だとみんな遊んでこんなところには来ないだろ。

「で、なんだ？」

「あーしき、昔海老名にしつこく男進めちやつたことあんのよ。そしたらあいつ他人事みたいにもういいやつて言ったんだ。そん時の顔がさ、笑つてんに目だけ異様に冷めてんの。あーしても超びびったわ。慌てて謝つてなんとかなつたけど」

「へー、そんなことがあったのか」

「あの目つてさ、人を見限ったときの目だと思うのよ。普段から一線引いてるなどは感じてはいたけど、あんなにきくつと切られるなんて思ってたし。あいつにとつては、ただ楽しくしているだけの今の状態が一番居心地がいいんだと思う」

「だろうな」

「だから結衣を止めてくんない?」

「それは海老名のためか? わかっているとは思いますが戸部はかなり本気だぞ。なかなかの覚悟もある」

「海老名のためつてより、あーし達グループのため。もしこのまま戸部が海老名に何かしたらきつと壊れる」

「そうか、だから戸部に自分の気持ちを殺させ、今まで通りさせることでグループを維持すると。そんなにうまくいくか? 俺はそうは思えないが、そんなもんまたすぐぶつ壊れると思うぞ」

「じゃあどうすればいいわけ? なんか隼人も色々してるみたいだけど、上手くいってないみたいだし」

「まあ葉山はすべてを綺麗にまとめようとするからな。今回はほとんど無理に近いだろ」

「あー、もうまじ、なんなわけ?! このままじゃヤバイし」

そう言つて三浦は頭を抱える。

「にしても意外だ。お前つて結構考えてんだな」

「あんた、バカにしてる？」

「いや、普段はわがまま言つてることが多いから」

「まあそうだけど……。あーしき、今のメンバーかなり好きなのよ。なんだかんだこんなあーしをみんな受け入れてくれるし。でもこんなことになつてき、みんなどこか一歩引いていることがわかつて。はあ、あーし達つて結構薄つぺらだつたんだよね。あ、戸部は除く、あいつは一歩も引いてないわ」

「でも戸部が一番お前らの繋がりを信じているんじゃないか？ あ、いや、もしかしたら何も考えてないだけかもしれない」

「そんなこと言うなし。でもそれができんのが戸部じゃん？ あーしもつと隼人や海老名に踏み込みたいし、結衣にも普段遠慮なんてさせたくない」

「別にしてみりやいいじゃねーか」

「でも隼人達はそれを望んでないでしょ。これはあーしのもつと近づきたいってわがまま」

「普段はわがままなのにな」

「レベルが違うつしよ。下手したら取り返しのつかないことになるんだから」

「そうだな、だからそれをするにはかなりの覚悟がいる。でもそれだけ、その先にあるものは尊くて美しい。まさに一度限りの大博打って感じだな。成功すればとびつきりを手に入れられ、失敗したら失う」

「なんかずいぶんと知った口聞くじゃん」

「まあな、経験済みだ」

「え、あんたが？」

「おい、失礼だな。ほんとだぞ」

「うっそ、成功したわけ？」

「ああ。今じゃ勝負に出て良かったと心底思っている」

「へー、そうなん。でもあーし達には…」

「そりゃ、まだ覚悟出来てないからな。葉山は足踏みしたままだろうし、海老名さんは踏み込まれると逃げそうだ。まあ、そんな覚悟ばつとできる訳がない。それまでの関係が長ければ長いほどな」

「だしよ。厳しくない？」

「さあな、俺にとつてはどうでもいい話だからな。お前らが諦めようが諦めまいがどっちでもいい。厳しくて好きにすればいいんじゃないかね？」

「ここにきて急に適当じゃん」

「ここから先は俺がどうこう言うことじゃないからな。お前が決めることだ。でもこうやって戸部が動き出したことでお前達は揺らいでいる。綻びも見え始めた。なら、この辺が仲良しごっこの潮時なんじゃないのか?」

「葉山はみんなで仲良く、戸部は告白したい、海老名さんは変わりたくない、由比ヶ浜は応援したいっていうわがままを現にぶつけまくってる。みな自分の思うように、したいように動いている。なら別にお前も好きないようにしていいだろ」

話は終わりだという意味表示のため立ち上がり、部屋へ上がる階段に向かう。

「わーった。あーしもつと考えて、頑張ってみる。ヒキオ、話聞いてくれてあんがと。あなた、なんかいい風が変わったと思うわ」

「そうか、サンキューな。まあせいぜい頑張れ。あ、そうだ、今回の戸部の件、俺は基本動くつもりはないが海老名さんから直接俺に頼みが来たら何かしらかするかもしれない。まあやってお前らの延命治療のようなもんだろうが。だから、そんな焦る必要はない。覚悟はしっかり考えて決めろ」

「うん。まじであんがと。あーし達のことなのに」

「別にいい。ただでするわけでもないしな。んじゃ、戻るわ」

三浦と別れて階段を上がり、部屋に戻る。男子達はまだ麻雀大会をしているようだ。お前ら呑気だな、三浦はあんなに悩んでたのに。特にすることもないので戸塚がやって

いるところでもみよう。

「よう戸塚、調子はどうか？」

「あ、八幡帰ってきたんだ。まあまあって感じかな。そうだ、八幡今からでもやる？」

「そうだな。次どっか開いたら入れてくれ」

そうして俺は麻雀大会へ参戦した。

三日目の朝。超眠い。昨日遅くまで起きすぎたわ。あんなに盛り上がりたとは思ってなかった。朝ごはんギリギリでいいかな。でも今日でこの宿は終わりで、今晩は嵐山の方の宿に泊まることになる。そのため荷物をまとめてロビーに出しておかないといけない。起きないと、まだ寝てたいな。

部屋のメンバーはもうすでに朝食を食べにいつているようで誰もいない。身支度をして部屋を出ると、ちょうど朝食を済ませてきたのであろう戸塚とばったり会った。

「あ、八幡起きたんだ」

「おう、おはよう」

「うん、おはよう。出ていく前に声かけたんだけどね、起きそうになかったから先に食べてきちゃった」

「全然全然構わないぞ。そういうえば今日は自由行動だか戸塚は部活の友達とまわるのか？」

「うん、そのつもりだよ」

「なら次会うのは今日の宿だな。楽しんでこいよ」

「もちろん！ 八幡もね」

「おう」

戸塚と別れて朝食を食べに行く。時間が遅いのであまり人もいず、快適だ。今日は自由行動なんだよな。どこ行くかな。今日でお土産は買っておいた方がいいだろう。明日だとみんな買うから人多そうだし、色々店をめぐるのは今日だからな。

朝食を終え部屋に戻ると俺以外はもうすでに出発しているようだった。身支度を済ませ、大雑把に部屋を整えた後荷物をまとめて一階ロビーに降りる。荷物を指定の場所において宿を出ると由比ヶ浜と雪ノ下がいた。

「あ、ヒツキーやつときた！ おそい！」

「え、どうしたんだお前ら」

「どうしたって、ヒツキー待ってたんじゃん」

「まじっ。」

「三日目は一緒にまわろうって約束したでしょ」

「あー、そういやそうだったな。悪い、ずいぶん待たせたな」

「ごめん、八幡すっかり忘れてた！ てへぺろ！」

「あなたはろくに約束も覚えてられないのかしら鳥谷くん」

「お前の毒舌は朝から絶好調だな。すまん、昨日、一昨日の戸塚との旅が楽しくてつい」

「はあ、あいかわらずね」

「それにヒツキー眠そうだね。寝れなかったの？」

「いや、昨日の夜遅くまで起きててな」

「あら、あなたは皆が遊んでいる中さつきと寝るのではないのかしら？」

「いや、わりと俺もそうなると思っていたんだが今回の旅行はそうでもないらしい。な

んか普通の旅行ができている」

「珍しいこともあったものね」

「だな、これも偏に戸塚のおかげか…」

「あはは、良かったね」

「まあ、それは置いといて待たせたのは本当に悪かったな。どつかで何かしらかおこるくらいはしよう。高いのはなしな」

「それなら許してあげる。何かしてもらおうかなー」

「由比ヶ浜さん、そういうのはここぞというときにとつておくべきよ」

「雪ノ下、お前こえーよ」

ひとまず歩き出す。そういや今日はどうするつもりなんだ？

「おい、今日はどこ行く予定なんだ？」

「そうね、本当は依頼のこともあるから彼らの近くにいるべきなんでしょうけど……」

「まあ、それはやめといた方がいいだろうな。後をつけるのは誉められたことじゃない」

「そうなのよね。けれど、由比ヶ浜さんに考えたルートを渡してもらっているから今日は気にしないでいいでしょう。最終目的地はみな一緒なのだし確認はそのときでもいいのではないかしら」

「それでいいんじゃない？ 俺はこの依頼あまり気が進まないからな」

「そうね。やっぱりやめとけばよかったかしら」

「でも戸部つちも頑張ってるし……」

「その話は今はいいだろ。受けてしまった以上しっかり落とし前はつけなきゃならんし。その前のことを今とやかく言ってもい見ないだろ」

「そうね、とりあえず今日は行きたいところに行くってことでいいかしら？」

「うん、それでいいよ！ でも行きたいところか、私あまりお寺とかわかんないし」

「なら有名どころをおさえていくのでいいんじゃないか？ それなりの催し物とかもあるだろうし」

「そうね、私は何か所か行きたいところがあるのだけれど付き合ってもらえるかしら?」
「うん、もちろんいいよ!」

「俺も構わないぞ。あ、俺今日のうちにお土産を物色したいんだが」

「嵐山の付近は店がたくさんあるらしいから、早めに嵐山に着くようにしましょう。私も見てまわりたいし」

「私も!」

「助かる。あ、どつか途中で学業の神様が有名なところもないか?」

「あら、あなたが学業で神頼み?」

「違うよゆきのん、たぶん小町ちゃんのためじゃない?」

「そうだ。ついでに自分のもするつもりだ。数学あがんねーかな」

「私もやろう!全部上がるかもしれない!」

「あなた達…、そんなので成績よくなれば誰も苦労はいないわ。努力しなさい」

「ですよねー、わかってたよ。でも気分的な問題がさ、あると思うんだ。プラシーボ効果みたいなものあるかもしれないじゃん? あ、ないですよね、はい。」

「で、最初はどこ行くんだ?」

「まず伏見稲荷大社にしようと思うのだけれど」

「ほう、あの千本鳥居があるところか」

「あ、私もそれ知ってる。テレビで見たことある」

ああいうところってすごくキツネ出そうだよな。アニメの見すぎか。行き先が決まった俺達はひとまずバス停へと向かう。修学旅行三日目はまだ始まったばかりだ。

陽乃になに買おう……。

八幡は動くことを決意する

まず最初に伏見稲荷大社にやって来た。やはり実物を見るとこの鳥居は圧巻だな。

「じゃあちよつと登ってみましよう」

雪ノ下の一言で鳥居の中の階段を上っていく。まあこの中は登ってみたいよな。だけれどお前って……

「ぜえ……ぜえ……」

「だ、大丈夫ゆきのん？」

「ちよつと、休憩を、しましょう」

壊滅的に体力なかつたよな。最後まで行くには今来た分の2倍はいかないといけないぞで。

「落ち着いたらもう降りるか」

「そうだね。他のところにもいきたいし」

「ごめんなさいね。た、体力がないばかりに」

「人も多くなってきたし頃合いだろ」

雪ノ下が復活するまで待つてから階段を降りる。この先はまた今度来たときでいい

か。

下まで降りた俺達は次の目的地である東福寺へと向かう。ここも雪ノ下の提案なのだがよく知らないところだ。

東福寺に着き敷地内に入ると、美しく紅葉が目飛び込んできた。

「うわ、すごいな」

「ここは紅葉で有名なスポットなの。高いところから見れる場所もあるから行きましよう」

この後、死ぬほど紅葉を堪能し北野天満宮へと向かう。俺の要望である学業のご利益があるところだ。着いてみると俺達以外にも結構な高校生がいた。

「結構いるわね」

「あはは、みんな考えること一緒なのかな」

「俺達もさっさとこの波に乗って済ませちまおうぜ」

あまり長くない列に並び、順がまわってくるのを待つ。みんな必死に願っているのが見える。おい、ちゃんと勉強しようぜ。

俺達の番がまわってきたのでお賽銭を投げ込み手を合わせる。えーと、小町が無事合格できますように。後、ついでに俺の数学が少しくらいよくなりますように。ま、ちゃんと勉強しないといけないんだけど。いい加減捨てるのはやめよ。

あ！ 陽乃教えてくんねーかな。確か理系だったはず。たぶん文理関係なくできると思うが。今度頼んでみよう。あ、まさかこの閃きはいきなりご利益か？

目を開けて隣を見てみると唸りながら手を合わせている由比ヶ浜がいた。お前が一番必死だな。それ、神様もびびってんじゃねーの。そんならい一生懸命勉強すればいいのに。

お参りを済ませ付近で昼食をとり、しばらく近場の観光名所を巡り嵐山へやって来た。時間は3時頃。宿に夕食まで済ませて6時半に集合しなくてはいけないので時間は結構ある。

ひとまず嵐山を見てまわり、宿の近くの竹林の道までやって来た。

「ここがよくテレビで見るところか。実際なかなかいいところだな」

「そうね、雰囲気もいいし落ち着くわね」

「ここだ！ 告白するならここがいいんじゃない？」

「ええ、ここなら問題なさそうね。それに夜はこの時季ライトアップするらしいわよ」

「後で戸部つちに薦めてみる」

「そのライトアップ何時からだ？」

「7時半からみたいよ」

「そうか」

戸部が告白することになっても、とりあえず7時半まではないと考えていいな。

「じゃ、お土産見てまわりたいからひとまず解散でいいか？」

「だね、夕食はどうする？」

「時間を決めて待ち合わせでいいのではないかしら」

「集合が6時半だから5時半には合流した方が良さそうだな」

「場所はこの辺でいいかしら？」

「ああ」

「じゃ、また後でね。ゆきのんあっち行ってみよう！」

「え、由比ヶ浜さん、解散じゃ……」

「いいじゃん！ 一緒行こうよ」

「はあ、まあいいわ」

仲がよろしいようで。さて、俺も行くかな。とりあえず八ツ橋とあぶらとり紙だな。

これはどつか大きい店に入ればあるだろ。

しばらく歩いてお土産屋に入る。あぶらとり紙を買い八ツ橋を選ぶ。八ツ橋つて結構種類あるけどなんか違うのか？ どれが美味しいとかあるのだろうか。もう複数買ってしまおうか、よし、それでいこう。八ツ橋を買い、外に出たところで葉山グループを見かけた。まあ特に用もないのでスルーして他の店に向かう。すると突然肩を叩

かれ、振り向くと海老名さんがいた。

「はろはろー、ヒキタ二君」

「あ？ 海老名さんか。葉山達はどうした」

「さつきお土産探しのために少し解散したんだ」

へー、俺達と似たようなもんか。でも葉山達も単独行動とかするんだな。ま、プライベートもあるしそんなもんか。

「そうか。で、なんかようか？」

「ヒキタ二君、依頼忘れてない？」

「依頼？ なんのことだ？」

とぼけてみる。やっぱりか、タイムリミットも近いしそろそろ来ると思っていたが。

「え、この前奉仕部に行った時……」

「あれを依頼というのか？ 依頼つてもんは内容をしっかり伝えてよろしく頼むことだ」

「でもあのときは結衣がいたし……」

「それはつまり俺だけわかればよかつたってことか？ なら直接俺に言いに来てもいいだろう」

「……」

「まあ戸部を止めてくれとでも言いたいんだろ？」

「やつぱりわかつてたんだ」

「まあな、俺だし。でもあのあと何も言つてこなかったからさほど重要でないのかと思つたが」

「でもわかつてたなら…」

「わかつてたならやつてくれてもよかつたじゃないかつて？　俺は何でも屋じゃないぞ。やるわけないだろ」

「でも文化祭りや相模さんを助けてたよね」

「あれか。確かに助けたな」

「じゃあなんで」

「俺は何の見返りなしに、危機回避なしに行動したりしない。何もなしに行動するならよつぽど近いやつのためじゃないと動かない。相模の件は危機回避だな」

「どういうこと？」

「あのまま相模を放置してみろ。おそらく相模は非難される。そうすればあの文実の事態が表沙汰になり、さらにそれは加速する。最悪いじめに発展して相模が自殺なんてことになる可能性も0じゃない。そこまでいかなくても責任問題どうのこうのでかなり面倒なことになりかねん。そこで俺に色々擦り付けられても困る。結構派手に動いて

いたからな」

「それに比べ今回の件は俺に何の影響もない。それでお前達がバラバラになろうがどうでもいい。だから特に動かなかった」

「そうなんだ…」

「それに海老名さんの頼み方も気に入らなかつたしな」

「それは…」

「つたく、俺をなめすぎだ。なんでもするお人好しなわけないだろ」

「ごめん」

海老名さんは絶望した面持ちで呟く。でも三浦にああ言った手前ここで放置したりはしない。あいつは本気だからな、無下にしたりは出来ない。

「そんなに告白はダメか？」

「ダメだよ。振った後に上手く続く関係なんて存在しないよ」

「まあ難しいだろうな」

「私は今が好きなんだ。みんなでバカやってられる今が…」

「そりゃな、ぬるま湯ほど気持ちいいものはない」

「何が言いたいのか？」

「今のお前らの環境はぬるま湯以外の何物でもないだろ。表向きは仲がいいが誰も互い

を信じられていない。特に葉山と海老名さんはそれが明らかだ。今回の件ではつきりしただろ？」

「う、でも」

「でも？ 今回の件の始まりは海老名さんが戸部の気持ちから逃げたことからだ。なぜ向き合わない？」

「私じゃ無理だから。誰とも付き合うなんて出来ないよ。腐ってるし」

「はっ、都合のいい理由だな」

「なら、ならどうすればいいのっ……。誰にだって踏み込まれたくないところがある、言えないことだってある。失うのだって怖い。どうしたらいいのか……。わからない」

「そうか、だから周りに頼ったと」

「それしかできなかつた」

「あのグループから離れるってことはやっぱできなかつたのか？」

「うん、前の私なら出来たかもしれないけど……。今じゃもう」

「はー、まったく、それってもうそれくらいあいつらの存在がでかくなってるってことだろ？ だから一線引いたままの自分をもどかしく感じる」

「……」

「なら逃げるなよ。自分のために自分で動け」

「そんなことできたらやっつてるよ」

「なら何も求めるな。失う覚悟も出来ないのに手に入れられるわけがない。何かを維持するのにだって代償が必要だ。その代償を払えないならそれを持つとうとするのもやめるんだな」

「……」

「まあ逃げたきや逃げればいいじゃねーか。その先で何があるうがそれも全部自分の責任だ。それをお前の周りのやつらが許すとは思えないがな」

「え、それはどういう…」

「お前の周りには強者が多いってことだ。で、どうする？ 俺に頼るか？」

「え、何とかしてくれるの？」

「まだ何も考えていないが、体育祭での借りもある。それと何とかするっていう解釈は困るな。この問題を解決するのはお前らだ。俺じゃ出来ない、ただそのリミットを伸ばすくらいはできるだろう。もちろんただじゃないがな」

「ただじゃないって？」

「貸しつてことにして俺が何か頼んだときに動いてもらうつもりだ。それでも構わないというなら頼まれてもいい」

「比企谷君、お願い。私に猶予をください。今すぐは無理だけど、もう逃げられないのは

わかってるから。怖くて仕方がないけど、乗り越えるために時間をください」

「わかった、なんか考えて見るわ。つても俺だからどんなやり方になるかわからん、臨機応変で頼むぞ」

「わかった。本当にありがとう」

海老名さんと別れる。さて、どうするかね、それは後で考えるか。お土産から済ませよう。

あ、陽乃に一応報告しておこうかな。時間的に学校も終わってそうだし。休憩できる場所に移動し、携帯を取りだし電話を掛ける。

「もしもし」

「もしもし？八幡？」

「ああ、陽乃、今大丈夫ですか？」

「うん、ちよつと待って……、大丈夫だよ」

「何か取り込み中でした？」

「大学の友達といただけだから」

「急にすいません。とりあえず報告しておこうと思ひまして」

「あ、例の告白の件？」

「はい、一応動くことになりました。貸しつてことにして」

「そう、どういう経緯で？」

陽乃に今までのことを大雑把に説明する。

「という訳です」

「なるほど、あれだね。やっぱり八幡はお人好しだね」

「別にそんなことはないですよ」

「いやいや、普通そこまでしないって」

「そうですかね」

「うん、だってほつといても問題ないことだもん」

「まあそうですけどちよつとした借りもあったし、みんな前向きでしたし」

「向かせたのは八幡でしょ」

「う、まあ否定はしませんが」

「そうやって一回はチャンスを与えちゃうんだから。なんだかんだ優しいというか甘いというか」

「ははっ、そうですね。俺は案外人間が好きなのかも、いや違うか、人間の可能性を信じていると言った方がいい」

「なるほどね、それで八幡のやり方はああなのね」

「というと？」

「八幡は当事者の感情をうまい具合に操作して事態を収めるよね」

「そうですね」

「その中でも悪意を操作することが多い。文化祭とか夏のキャンプとかの件がそれでしょ。八幡の策が成功する度に人の醜さが証明される。でも本当は自分の策が失敗することを期待してるんじゃない？ そうすれば人間が汚くないことが証明できるから」

「……よくわかりましたね。ま、今回は直接手出してますが」

「私と八幡が似てるって言ったのは誰だっけ？ 二人とも人間の醜さをよく知っているじゃない。私はそうではないことを自分を通して、自分の中に探している。なら八幡は逆に、周りにそれをしていいるのでは？ と思っただけよ」

「さすがですね。でも俺は周りの人間を利用していただけだから誉められることじゃないです」

「それでも周りには八幡に助けられたと思う人がいるはずだよ。その気持ちを八幡は否定しちやいけない。その感情は相手のものだから。それにそれも八幡の行動がもたらした結果だから受けとる必要があるんだよ」

「はあ、確かに救ってくれたなんて言われたら、俺は拒絶しそうですね。そこまで見透かしますか、かなわねーな」

「でしょ！ 八幡検定一級だもの」

「なんすかそれ、あげてもいいですけど」

「かわりに陽乃検定一級あげるよ」

「それは…、ありがたく貰っておきます」

「あと、大変なときは私も頼つてよ」

「そんなこと言われなくても、そんな時は陽乃にさっさと話してると思いますよ」

「そう。ならいいけど…」

「陽乃こそちゃんと俺を頼れよ。お前そういうの慣れてなさそうだからな」

「う、うん。ありがと…」

「…どうです？ グツと来た？」

「あー！ からかったな！ もう！ えー来たわよ。超グツと来たわよ。うつかり惚れる

レベルよー！」

「え、そんなに？」

「だ、だつてそんなこと初めて言われたんだもん、あんなの。あー、急にペース乱されまくりじゃない。もう知らない！ お土産金額二万にアップ！」

「は！ あれまじだったの?! ちよ、二万は洒落になんないつて」

「最近八幡が私を年上扱いしてるのかわからない」

「い、一応？」

「なにそれ」

「だって最近陽乃からかいがいがあって」

「それ前まで私の台詞だったのに、いやまだ譲らないから」

「おう、頑張れ」

「それとお土産審査厳しくなったから」

「まあそのくらいは頑張ります」

「よろしく」

「あ、からかったけど、ちゃんと頼ってくださいよ」

「うん。じゃ、旅行残り楽しんで」

「おうよ、じゃ」

ふー、なんかだいたい長いこと電話してたな。よし、早速陽乃の土産探すか。

「あ、陽乃お帰りー、って顔赤いけどどしたの」

「え、そう？」

「うん、なかなか。珍しい」

「電話でなんかあった？」

「いや、特になかったよ」

「あやしー、もしかしてついに陽乃に男か？」

「え、まじ?!」

「違うって。そんなんじゃないから」

「あ、顔また赤くなつた」

「うわ、めっちゃ気になる。今まで誰一人寄せ付けなかったのに」

「だから違うって」

「こりやビッグニュースね」

「そうね、最近取っつきやすくなつたと思つたらそういうことか」

「ちよつと、話聞いて？」

「おけ、話を聞こうじゃない。で、どんなやつ？」

「大丈夫、広めたりはしないから」

「そういう意味じゃないから！」

この後何とか誤魔化して逃げ切つた陽乃だった。

彼はとことんついていない

あれからしばらく店をまわり、一番候補の店へと戻ってきた。京都だから和な物がい
いだろうということでもちりめん細工屋だ。ここならいろんな物があるからいいの見
つけられるんじゃないかと思つているのだが、どんなのにするかね。小物とかもある
し、アクセサリーもあるのか。ちよつと種類多すぎじゃね？

じっくり時間を使つて選び会計を済ます。んー、これでよかつただろうか。大見得を
切つたわりにシヨボくなつたかな。ガツカリされないといいが。いや、陽乃の場合は
ガツカリより、バカにされてここぞとばかりに弄られそう。すげー心配だわ。

気が付けば雪ノ下達との合流まで30分を切つていた。なんか微妙に時間が余つた。
これから何をしようか考えながら店を出る。

「ん、比企谷か」

「あ？ うわ、葉山」

「うわって、ひどいな」

「んなこと微塵も思つてないだろ。一人か？」

「ああ、今は単独行動だね。君こそ一人なのかい？」

「何当たり前のことを聴いている、俺は基本一人だ」

「あはは、にしても珍しいところから出てきたな。興味あるのか？」

「ちよつとした私用でね」

「妹さんへの土産か」

「残念、不正解だ。ま、お前には教えん」

「なんか余計気になるな」

葉山は苦笑いを浮かべる。

「そういやお前、なんとかなりそうなのか？」

「…なんのことだい？」

「今更誤魔化せるわけないだろ。それに俺のところにも海老名さん来たからな」

「やつぱり、俺じゃ無理って思われたか」

「そんなの当たり前だろ。相反する事を同時に処理するには行動に余裕がないといけない。お前は何も捨てないからできるわけがない」

「捨てられるものなんてあるはずないだろ」

「でも全てを取ることはできない」

「それでも俺は全部を丸く収めたいんだ」

「はっ、そんなんだから自分の本当に大事なものを失うんだ」

「う……」

「……お前にとつてそんなに周りつてもんは大事なのか？」

「……ああ、……」

「足枷になつてゐるのに？ お前にいらん期待ばつか押し付けるのにか？」

「それでもだよ。それに答え続けないといけなのが俺だ。周りを大切にしなきゃいけないのが俺なんだ」

「いや、知るかそんなこと。いけないとかじゃなくてさ、お前がどうこうしたいとかないの？」

「それは……」

「なに、そんなこと思っちゃいけないとか言いたいのか？」

「っ……」

「なんつーか、馬鹿つていうか不憫つていうか。みんなの葉山隼人は哀れだな」

「お前に何がわかる」

葉山はけして声は荒げなかったが、明確な怒りを含んだ声で言う。

「知るか、周囲に拒絶、失望されるのが恐くて足踏みしてるやつのことなんか。俺は常に拒絶され失望されてきたんだ、そんな恐怖とつくに忘れたわ」

「でも、君は周囲からの異常な期待と理想の押し付けを味わったことなんてないだろ。」

それがあるのとないのでは全然違うんだ」

「そうだな、それは俺とは種類が異なる。俺には実感しえないことだ。ははっ、むしろそっちの方が怖そうだな。ある日突然、今までニコニコしていたやつらが掌を返すんだ。そんなの経験したら正気でいられんだろう」

「同じ地獄に落ちるのでも、天国を知っているものと知らないものではその苦しみの度合いは違うってことか」

「まあそういうことだな」

俺は最初から味方なんぞ存在しなかったからな。良くも悪くもそういう環境に素早く慣れてしまった。

「でも俺はお前みたいに周囲からの期待を背負ってもがいているやつを知っている。そいつは自分を押さえ込め込むのが上手くて、なんだかんだしつかりやれているように見えて、内側はボロボロだった」

「その人はどうなったんだい？」

「この前吹っ切ったよ。いろんなもん乗り越えて前を向いた。かつこよかつたぞ」

「二人でやってのけたのか？」

「いや、そいつ曰く、つい最近でできた友達のおかげらしい。ま、そのお友達もそいつに助けられてんだがな」

「その人は大きな存在を手に入れたんだな。そんなもの俺には……」

「なに後ろばつか見ていつてんだ。その目見開いて周り見るよ」

「それはどういふ……」

「んなもん自分で考えろ。はあ、今回の件だけは頼まれたから俺が何とかしてやる。でもこつから先は自分の力が及びそうにないことでも己でやらないといけないことが多い。それは自分でやれ」

「わかつているさ。本当なら今回だつて俺がなんとかしたかつたんだ」

「お前は自分に甘過ぎる。しつかり力量と手札を把握しろ。それを越えたものを望むから失敗するんだ」

「くつ、なんでもできる君が羨ましいよ」

「それは誤解だ。俺の手札とお前の手札が全く違うからそう見える。俺のできないことは大抵お前ができる。逆もまたしかりだ」

「君つてやつは…、そうやつていつも俺を見透かしてくる。やつぱり君を好きにはなれないな」

「いや、いらんし。好きとか言われたら鳥肌立つわ。まあ、みんなからあぶれるのが俺だ。みんなの葉山君に期待なんてしてやらん。どうせしても応えられんだろうしな」

「いつてくれるな」

「今までの行いを振り返ってから言ってみろ」

ふと時計を見ると約束の時間が近くなっていた。少し距離があるからもう向かった方がいいかもな。

「悪い、時間だ。俺はもう行く。あと今回の件は貸しだからな」

「君に借りを作るのは怖いな」

「無理難題は言わねーよ。俺の手札にお前がいるだけで幅がかなり広がるんだ。そのためだ」

「つまり、俺は君の駒にならないといけないということか」

「悪く言えばな、でも一回だけだ。俺的には貸しを山ほど作って常時駒として持っていたい」

「あはは、俺を駒扱いするなんて君が二人目じゃないかな」

「二人目が容易に想像つくな」

今こうなってるの、その一人目の影響受けたからだとは言えんな。

「あ、あと一つ謝つとくわ。最初に戸部をとめられんくてすまなかつたな。由比ヶ浜が予想外だったろ」

「っ、君はなんでもわかるんだな」

「なんでもはわからん、わかることだけだ」

きまった。言ってみたかった、羽〇さんのセリフもどき。え、恥ずかしいからやめた方がいい？ でも言うじゃん、言わぬは一時の後悔、言うは一生の黒歴史つて。はい、言わないですよ。しかもそれじゃ今黒歴史作ったことになっちゃう。おい、葉山なに顔ひきつらせてんだ。

「葉山、今のはなかつたことにしよう」

「なら、それで借りはチャラに……」

「いや、俺は今とつても恥ずかしいことを言ったわ。全然忘れなくていいぞ。墓まで持ってたけ」

「冗談だよ。じゃあ俺も行く。はあ、君だけは頼りたくなかつたのに」

「へっ、ざまあねーな」

「そこは慰めてくれるんじゃないのか」

「俺がお前にそんなことするわけないだろ」

葉山と別れて合流場所へと向かう。あいつはあいつで苦労しているが、その原因はあいつの甘さだ。はあ、三浦はあいつのどこのかいいのかね。おかん体質だからかな。

俺が合流場所に着いた五分後くらいに二人がやって来た。それから夕食を食べ、宿へと戻ってきた。部屋のメンバーは今までと一緒である。つまり、戸塚も一緒だ、ついでに葉山達も。

集合して、先生の話を聞いてからそれぞれ部屋へ解散し、そこから入浴時間だ。今は6時45分、戸部はまだ部屋にいるし由比ヶ浜の話がいつてるはずだから先に風呂入っても大丈夫だな。風呂でどうするか考えよ。

「あ、八幡お風呂行くの?」

「おう、戸塚はどうする?」

「僕晩御飯食べ過ぎちゃつて。今日は入浴時間長いみたいだし、もう少しゆっくりしてから入るよ」

「そうか、俺は先に行つてくるな」

「いつてらっしやーい」

ナチュラルに振られたぜ。部屋を出て大浴場に来た。色々済ませ湯に浸かる。

へー、疲れたー。これからまた疲れるけどー。さて、どうするか。まず戸部に告白させてしまったら終わりだ。そして海老名さんが今誰とも付き合うつもりがないことを戸部に伝える必要もある。改めて考えるとマジめんどくせ。

そうなると告白シチュエーションを作らせたなら不味いな。戸部は俺が説得するとして、最悪今回のごたごたを教えてもいいんじゃないかと思う。あいつならそれで踏みとどまるだろうし、そこで終わったりはしないだろ。

なら早めに話をつけないとな。風呂を上がって着替えを済ませる。まだ7時15分、

早く部屋に戻って戸部と話すか。

この時は知りもしなかった。既に事態は動いていることを…。

足早に部屋へと戻る。戸を開けると戸塚しかいなかった。あれ、なんで？

「あ、おかえり」

「戸塚、お前一人か？」

「そうだよ。五分くらい前に葉山くん達が出ていったから」

「え、なんで？」

「戸部くんが海老名さんに告白しに行くんだって。夏にいったやつ本気だったんだね」

「え、まじか。なんかいつてた？」

「えつと、近くの竹林でライトアップされると同時にするんだって。すごく壮大だね」
「だな、すごく壮大でロマンチックだ。それなら案外上手くいったり…、するわけないだろ！は!?誰だよそんなアホなこと言い出したやつ！もうシチュエーションでき

ちゃってんじやん！

「ちよつと出てくるわ」

「八幡大丈夫？ 顔色よくないけど」

「大丈夫……じや、あまりないな。でも心配すんな、なんとかする」

「八幡のことだからまた一人でしちゃうんでしょ。でも無理はしないでね。僕じや力になれないみたいだけど……、どんなことになつても僕は八幡の味方だから」

「その言葉で十分だ。サンキュー戸塚」

部屋を飛び出し、竹林の方へ急ぐ。こりや着くのはぎりぎりだな。どうするかも考え直さねーと。

あはは、一番最初にこれが浮かぶって、流石俺だな。あまり気乗りはしないが他に思いつかん。急いでるときに一つ思い付くとそれ以外出てこなくなるよね。待て、そんなこと言っている場合じゃない。

海老名さん、葉山、三浦には話しているから誤解はないだろう。三浦はいない可能性も高い。問題は戸部だ、これは最悪恨まれるのを覚悟しないとイケないか。しつかり謝らないとイケない。

もうこの愚作でいくしかない。はあ、つたくついてねーな。

陽乃は何て言うかな…。

考えがまとまったところで竹林に着いた。戸部達はどこにいるんだ？探しながら進んでいくと、見つけた。

「あ、ヒツキーやつと来た。もう始まつちやうよ」

「おい、なんでこんな早くなつたんだ」

「大岡くんがライトアップと同時にすればって提案してそれで」

おのれ、モブ。

「お前ら、これ失敗すんぞ」

「うっ…」

「そうね。やつぱり無理だったわね…」

「はあ、まあここは俺がなんとかする。いろんなやつとの約束もあるし」

「ごめん」

「ごめんなさい、任せるわ」

そうこうしているうちにライトがついた。戸部が口を開く。

「海老名さん、俺…」

さて、やりますか、俺らしい愚作とやらを。

戸部の前へ割り込む。そして…

「海老名さん好きです。付き合ってください」

俺の突拍子もない言葉を聞いて海老名さんは驚き目を見開くが、すぐに俺のしたいことがわかったのがすぐに答える。

「ごめんなさい。今誰とも付き合う気はないの。じゃ、もう行くね」

はあ、こんなもんかね。

「だってさ戸部、今は時期じゃないみたいだ。もう少しあとでもいいんじゃないか？」

「ちよ、ヒキタニ君……」

「悪いとは思っている。恨んでくれても構わない、それくらいの事をしたんだ。お前の覚悟踏みにじって本当にすまなかった」

そう言い残して戸部のもとを離れる。すると葉山がやって来た。

「悪い。君のやり方は知っていたのに……」

「別にいい。俺に頼るんだからそれくらいの覚悟はしとけ」

「ほんと、すまない」

そういって葉山は戸部の方へと向かった。俺もやることやったし帰るか。そう思っ
て方向転換したとき、目の前に雪ノ下と由比ヶ浜が出てきた。

「あなたのやり方、嫌いだよ。上手く言葉にできないけれど、とても嫌い」

苦い顔をして雪ノ下が言う。

「先に戻るわ」

「ゆきのん……」

雪ノ下は早足で去っていった。俺と由比ヶ浜だけが残される。

「……上手く、収まったのかな」

「ひとまずって感じだろ」

「……なにするのかと思っただけど、一瞬本気かと思っちゃった」

「んなわけないだろ」

「でも、もうこういうのやめて。人の気持ち、もつと考えてよ。いろんなことわかるのになんで、それがわかんないの」

そういつて由比ヶ浜も去っていった。

……やべ、やらかした。完全にやらかした。この二人計算にいれるの忘れてたわ……。葉山達のことしか考えてなかった。

でもあいつらがアホな依頼受けたのも悪いわけだし、俺のやり方はこうだって知っていたはずだ。まあ、あいつらのこと考えてなかった、配慮してなかったのは悪いな。そこは今度謝つとくか。

でも俺が謝ると、あいつらにも反省してもらわないといけないんだが。あの様子

じゃ、今は動揺してるかなんかで考えもまとまらんだろう。学校に戻ってからでいいか。

にしてもあいづらがあんなになるとは思ってたな。そういうもんなのか？
こんなんだから配慮が足りないって言われんのかな。

宿への道をのんびり帰る。新しい面倒事は生まれたがひとまず肩の荷が下りた。ぼちぼち歩いていると前に人影が見えた。

「ヒキタ二君」

戸部だ。

「戸部か。なんだ、殴りにでも来たか？ 大人しく受けないといけないな。さあこい！」
「や、ちよ、ヒキタ二君俺をなんだと思ってるの？」

「え、違うのか？ てつきりさつきのを怒っているのかと」

「怒ってるっていうか、ヒキタ二君の話を聞いときたい的な？」

「なんだそれ」

「いや、さつきのヒキタ二君の告白が全然本気とは思えないっつーか、振られたのに落ち込むより先に俺に謝ったから。ただ邪魔をするなら謝ったりしないっしょ」

「お前、思ったよりアホじゃないな」

「さつきから言うことひどすぎじゃね?!」

「すまん、で、何が聞きたいんだ?」

「なんであんなことしたのかとか?」

「なんで疑問になつてんだ。話してもいいが、面白い話じゃないぞ?」

「それでも俺が絡んでんなら聞かないわけにはいかないっしょ」

「そうか、なら教えてやる」

　　そういつて今回の始まりから終わりまでを歩きながら話す。

「つまり、俺が早まっちゃまったせいで…」

「いや、お前が自分を責める必要はない。むしろ告白しようとした度胸は誉められるべきだ」

「そんなことないっしょ。俺全然軽く考えてたし、みんなのこと見えてなかったんだ」

「まあ、そうだな。で、お前どうすんの?」

「どうつて?」

「海老名さんのこと」

「やつぱ、諦められないっしょ。今回かなりマジだから、今度はまたいろんな覚悟してい

くべ」

「そうか、なら頑張れ。次は邪魔したりしないから」

「ヒキタニ君、マジサンキューな」

「ああ。そうだ、俺ヒキガヤなんだけど」

「え、まじで？俺今まで間違つてたの？隼人くんもいつてたからてつきり、マジごめん」

「直してくれるんなら別にいい」

「まじ紳士じゃんヒキガヤ君、つべー」

「さっきの策を聞いて紳士はないだろ」

「でもそこまでしてなんとかしちゃうとかやばいっしょ。大先生じゃね？ヒキガヤ大先生ー」

「あんま調子乗ると塵にすんぞ」

「ちよ、冗談だつて。ごめんなさい」

「冗談だ」

「いや、トーンがガチだったんだけど」

「気のせいだ」

「えー。ま、いいか。それよりヒキガヤ君、さつさと部屋戻つて風呂いくつしよ。俺ヒキガヤ君のこと色々誤解してたから、結構おもしろいつてわかつたし。もう仲良くなるし

かないべ。だからまず一緒に風呂にでも」

「わり、俺もう風呂入った」

「え、ヒキガヤ君、それはないべ。じゃ、もう一回いつとく?」

「いくわけないだろ」

「なら夜一緒に遊びたおすべ」

「昨日も一昨日も遊んでるだろ」

「じゃ、今日も問題ないっしょ」

「はあ、勝手にしろ」

騒がしい戸部の相手をしながら部屋へ戻ってきた。俺と戸部が一緒にいたのを見て葉山が驚いた顔をしている。さらに戸部の態度を見て目を見開いている。葉山よ、戸部は予想以上にやるやつだぞ。てめえも早いとこ前を向け。

この後俺を除いたメンバーは風呂にいった。戸塚は帰ってきたときに部屋にいなかったから先に風呂にいったのだろう。

静かな部屋のなかでぼんやりする。明日で修学旅行も終わりだな。帰ってからの厄介事ができはしたが大きい旅行だったんじゃないか。歴代一位だろう。最後まで楽しんでしよう。

騒がしいまま修学旅行の終わりは近づいてくる。

帰ってからぎくしゃくした中に持ち込まれる一つの依頼でまた苦勞するはめになることを、珍しく人の輪の中で遊んでいる彼はまだ知らない。ほんと、彼はとことんついていない。

ほら、また負けてるし。

さつそく厄介事

四日目、今日は少し見てまわって帰るだけだ。にしても眠い。また遅くまで遊んでしまった。戸部元氣すぎだろ。

部屋の片付けをして荷物をまとめ、ロビーへと降りる。朝食は既に済ませている。

「ヒキガヤ君今日ってどこ行くんだっけ？」

「どっかで適当に見てまわったあと駅に行つて帰るんじゃないかなかったか？ その途中で土産買う時間とかあつたはず」

「つべー、俺まだ全然お土産買ってなかつたわー」

おい、ちよつと待て、なんでナチュラルにお前が横にいるんだ？ 今までこのタイミングで話しかけてきたの戸塚だろ？ なに乗つ取つちやつてんの、チェンジだ、チェンジしろ！

点呼をとりバスに乗り込んだ。隣はもちろん戸塚、死守してやつたぜ。

しばらくしてバスから降ろされ集合時間だけ伝えられて解散となった。お土産は既を買つてあるし今日は基本的に暇だ。戸塚も他の友達とまわりにいったので余計に暇である。また新幹線でね、だつてさ。仕方ないから散歩しよう。そう思い歩き出そうと

したところで声をかけられる。

「ヒキオ」

「三浦か、どうした」

「とりあえずお礼いっところこうと思つて。あんがと」

「おう、律儀にどうも」

「それとさ、結衣の様子がおかしんだけど、なんかあつた？　もしかしてあーし達のことのせい？」

「いや、それは間違ひなく俺のせいだろうな。俺のやり方が気に入らなかつたらしい。ま、俺のまいた種だから自分でなんとかする」

「わーつた、でもなんかあつたら言つて。元を辿ればあーし達の事があつたからだし」

「ああ、そのうちな」

「じゃ、もう行くし」

そう言つて葉山達の方へと歩いていった。さて、俺も行くか。

はい、帰つてきましたー、家に。え、飛びすぎだつて？　仕方ないじゃん、あの後ずつ

とぶらぶらしてただけだし、帰りはみんな寝ちゃってるし、俺も寝たけどさ。特になにもなかったからもう家です。

にしても家に帰り着いたとたんどつと疲れた。旅行あるあるじゃない？ 帰ってき たっていう実感のせいか急に体が重くなるやつ。

「ただいまー」

「あ、お兄ちゃんおかえり！ どうだった、修学旅行は!？」

「おう、楽しかったぞ」

「ほ、本当？」

「ああ、本当」

「よかったね！ お兄ちゃんがこういう行事を楽しめたことってあまりなかったから」
「そうだな。俺もびつくりだった。ほれ、お土産だ。リビングにでも置いといてくれ」

「わかった。ありがとー」

小町にお土産が入った袋を渡す。小町はそれを持ってとてとてリビングに走っていった。

はー、めっちゃ疲れてるわ。そうだ、俺この三日間あんま寝てないんだ。ずっと夜更かししてた。もう早く飯食って風呂入って寝よ。

そして時は過ぎ週始めの月曜日。え、また早いって？土日は寝ている間に終わっていったんです。

あー、学校かー。もつと寝ていたい。しかも部活かないといけないじゃん。絶対気まずいよね。重い足でペダルを踏みしめ通学路を走り学校を目指す。

教室に入るといつも通り賑やかだった。修学旅行終わったからもうテストくらいしかないのに何が楽しいのだろうか。

「お、ヒキガヤ君じゃん、うえーい」

「うえーい」

ついそのまま返しちやっただじゃん。

「あんれ、テンション低くない？」

「いや、これが普通だ。むしろお前が高すぎる」

「そんなことないっしょ。俺いつもこんくらいじゃね？」

「そうだな。つまりいつも高いお前の近くにいるから相対的に見て俺が低く見えるだけで俺は悪くない。お前が悪い」

「つべー、よくわかんないうちに俺悪者になってね？」

「気のせいだ」

ほんと元氣だな。二言ほど交わした後戸部は葉山達のところへ戻っていった。そして再び声をかけられる。

「ヒキオ、おはよう」

「ん、三浦か、どうした」

「いや、挨拶したただけなんだけど」

「そ、そうか。おはよう」

なんかこいつら修学旅行の件以降、若干距離近くなってるよな。ほら、クラスの連中も何事かかって顔してるし。三浦とも適当に言葉を交わした後、席に向かう。椅子に座りボケーっとしていると教室に戸塚が慌てて入ってきた。え、もうそんな時間か。

朝礼がさらつと終わり授業が始まる。そろそろ勉強にも本腰いれていかないといけない時期だから真面目にうける。ちよ、先生そんな怪訝な目で見ないでくださいよ。傷ついちゃいますって。

そんな感じで授業が終わり、待ちに待っていないなかった放課後。部室の方へ向かっていた俺は知らないうちにベストプレイスにいた。わ、無意識で逃げてきちゃったよ。しかし実際何を言えればいいのかわからない。俺の反省を言った後なんて言えればいいだろうか。穏便に済ませたいし、どうすっかな。

なかなかまとまらないがこのままでいても仕方がない。ひとまず部室行くか。部室に着き、戸に手をかけ開ける。

「よう」

「こんにちわ、来たのね」

「まあな」

部室には二人とも先に来ていた。でもあまり空気がよろしくない、この空気で切り出すのかよ。胃に穴が開くぜ。定位置に座り本を取り出す。どう切り出すか悩んでいると由比ヶ浜が口を開いた。

「みんないつも通りだったね」

「そうだな」

「なら依頼はなんとかあったってことでいいのかしら」

「たぶん……。てか、ヒッキー知らないうちに戸部っちと仲良くなってるし」

「あら、あんなことしたのにいったいどういう風の吹き回しかしら」

「まあ色々あったんだよ。まあ、その、修学旅行の時はお前達に不快な思いをさせて悪かったな。でも今回の件はお前達も反省するところあるはずだ。確かにあんな手を使ったのは悪いがそもそも……」

突然開かれた扉に俺の話は遮られる。うおい、何事だ！ せっかくチャンスだったの

に。微妙な空気が部室内に漂う。つて、やっぱあんたか平塚先生。

「先生ノツクを」

「す、すまん。今回は本当にタイミングが悪かったみたいだな。本当にすまん、出直すよ」

「いや、今さらですから別にいいですよ。なんの用ですか？」

俺の言葉を聞いて聞いてもう一度すまないと呟くと、扉の方を向いて合図を出した。すると部室に城廻先輩と亜麻色のセミロング女子生徒が入ってきた。先輩は相変わらずほんわかしている。で、このもう一人誰だっけ、どっかで見たことあるような気がするんだけど。

「あ、いろはちゃん」

「結衣先輩、こんにちは〜」

「やつはろ〜」

「あれ、お知り合い？　じゃあ一色さんの紹介はいいかな？」

一色いろはというらしい。待って、名前だけわかってても無理だつて。見たことのあるんだつて、たぶん。あれだな、結衣先輩つていつたからこいつ一年だよな。そうなる那一年と関わるようなことがあったとき……。文化祭？　でもなにも引つ掛からんぞ。うんうん悩んでいると由比ヶ浜が教えてくれた。

「一色いろはちゃん、サッカー部のマネージャーやってる子だよ。柔道大会の時に見かけてると思うんだけど」

「……あ、あんときのか」

「やっと思ひ出したのね」

俺の反応を見て一色は驚いた顔をしている。え、有名人だった？ ま、俺だし知らなくてもおかしくないよな。

「たまにうちのクラスにも来てたけど」

「え、まじで、さっぱりだわ、すまん」

「あはは、私ってあんまり目立ちませんからいいですよ」

「ヒ、ヒッキーはクラスメイトもあんまり覚えてないから落ち込むことないよ！」

「おい、失礼だな、クラスメイトくらい」

「じゃあみんなの名前言える？」

「……気にするな一色」

「あははは……」

なんかすいませんね。さっさと本題に入ろう。

「で、城廻先輩何の依頼ですか？」

「あ、うん。もうすぐ生徒会選挙があるのは知ってる？」

「ええ、既に公示までですんでいますね」

「本当はもつと早くにやるはずだったんだけど立候補者が集まらなくておしちやつたの」

「で、何が問題なんですか？」

「その会長の立候補者が一色さんなんだけど、当選しないようにしたいの」

「え、こいつが？」

「あ、今向いてないかと思いました？ よく言われるんですよ、とろいとかー鈍いとかー」

「つい、言葉に出てしまった。こいつがって言っちゃったよ。そして一色さん、一瞬顔ひきつりましたね。なんとか取り繕ったみたいだけど。いや、実際上手いとは思うよ、ただ俺はもつと神がかつた奴と一緒にいるからな。」

「で、なんで落選させることに？」

「そこからは私が説明しよう」

「そう言つて平塚先生が説明を始める。一色は勝手に立候補されたこと、委員会が本人確認し忘れたこと、担任はよくわからんサクセスストーリーを描いているため話を聞かないということなどを述べた。複雑そうだ。」

「こいつら推薦名簿に本名書いてんすか」

「ああ、それについては指導をいれる」

「アホっすね。公示まで済んでるってことは一色の名はもう出てるってことですよね」

「ああ、そうなる」

「取り下げってできないんですか？」

「あの担当がな、それに……」

「どうやって取り下げようって話で……」

「どうということですか？」

俺の疑問に雪ノ下が答える。

「規約に取り下げについて明記されていないのよ」

「ゆきのん、一年生だからって理由じゃダメなの？」

「それも同じく書かれていないわ」

なにこの依頼、難しすぎんだろ。

「てか先生、これ結構大きな問題じゃありませんか？」

「ああ、わかってる。しかし誰も深刻に考えないんだ。私一人では限界でな、君達の力を貸してもらいたい。どうなっても責任はしっかり私がとる」

「まあ、そうならいいですけど、ぶつちやけ先生が責任とるのも変な話ですよ。担任なるとかできませんかね」

「なんとも言えん。私も説得を続けてみるがどうなるか…」

「まあ、ひとまず案を出しますか。なんかあるか？」

「やはり他の誰かをたてるしかないのではないかしら。取り下げができない以上一色さんは選挙に出るのは確定だもの」

「でもそんなことするやついるか？ いないからここまでこのびたわけだし」

かなり難しいだろう。しかも一色と戦つて勝たなくてはいけない。一色は男には人氣そうだしそこら辺のやつなら無理だろう。本気でやる気のあるやつが出てきたら一色を取り下げる説得をしやすくなりそうだが。

それぞれ悩んでいると雪ノ下が予想外の事を言い出した。

「なら私が立候補しましょう」

「は、正気か？」

「本気かね？ 部活はどうする？」

「別に会長をやりながらでも問題はないかと。今もほとんど依頼はありませんし」

「ゆきのん、ほんとにやるの？」

「ええ、別にやつてもいいと思つているし」

「待て、俺は反対だ」

俺はストップをかける。

「なぜかしら。一番いい方々だと思うのだけれど。効率だつていいじゃない」

「確かに手つ取り早いし簡単だ。しかし生徒会長なんて大役をそんなんで認めるわけにはいかないだろ。学校の顔でもあるし、多くの行事を引つ張つていけないといけない。それをやってもいい程度の奴に任せたくはない」

「う、けれど他に手はないでしょう。やりたいという人間が居ないのが現実よ」

「まあ、そこが問題なんだ。今ぱつと思いつかないし、時間がほしいんだが」

「先生この問題の期限は？」

「来週の火曜日が予備日になっている。そこで立候補できるからそれまでだな。私もなんとかできないか考える。本当にすまないな」

「じゃあ、私たちはどうするかまた明日確認しましょう。一応私は準備を始めるわ」
「ああ、じゃあ今日は解散で」

俺の一言で皆帰る支度を始め、俺は部室を出て靴箱へ向かう。靴をはきかえて校舎から出ようとしたところで由比ヶ浜が追っかけてきた。

「ヒッキー待つて」

「なんだ？」

「あの、ちよつと一緒に帰れる？」

「わり、今から用事あるんだが」

「そこまでいいからちよつと待ってて」

そう言つて慌てて靴を履き替え俺の隣に並んだ。

「あの、ゆきのんのことなんだけど」

「生徒会長になるつてやつか」

「そう。もしゆきのんが会長になったらさ、部活なくなつちやうよね」

「どうだろうな」

「だつてゆきのん一つに集中するとそればかりになつちやうし。文化祭の時みたいにならな」

「まあな、あのまま会長になつても文化祭の二の舞になるだろうから止めたんだ」

「私さ、奉仕部が好きなんだ。三人でいることが好き、なくしたくない。だから、私が生徒会長になる。私なら適当に仕事こなして部活に行けるし、そうすればなくなるならいいね」

「それはダメだつて言つてるだろ。そんな適当にやつていい役職じゃないんだよ。生徒会がしくじれば最悪学校のイメージに影響してくる。そうなると多くの人間に迷惑がかかるし、被害ははかりしれない。それをわかつていて覚悟と意欲のあるやつじゃないとダメなんだ」

「でもそれじゃ…」

「はあ、そう言えばさつき言いそびれたけどよ、修学旅行の件俺がもつとしつかり止めればよかつたつてのもあるけど、お前が海老名さんの気持ち考えて戸部の依頼を拒否すればあんなにこじれなかつたんだ。本当は海老名さんの一番近くにいたお前が気づかないといけなかつたんだ」

「うん…」

「別に戸部を応援するとか、部がなくなるのは諦めろとか言っているんじゃない。自分の望みは持っていてはいいが、それに基づいて行動したときの他人の気持ちや及ぶ影響を考えるべきだ。修学旅行でお前が俺に言ったようにお前も人の気持ちを考えた方がいい」

「…そうだ、私全然姫菜のこと考えてなかつた。私自分のことばつかりだつたんだ」
「まあ、自分の感情に素直すぎるのがお前のいいところであり悪いところだ」

こいつは基本的に優しいから素直にそういうところが出るのはいい。ただ独りよがりな望みを持ったとき暴走してしまうのが問題だ。まあ、その優しさとの相性が俺は良くない。あいつは些細なことでも心配してくれるが、その分俺は気にせざるおえなくなる。両者とも苦しいしかしくない。

「ヒッキーごめん、私ひどいこといっちゃった。ほんとごめん」

「別にいい、事実だつたしな。実際お前に偉そうなこと言える立場じゃない」

「でも、やっぱりあんなのはもう見たくないかな」

「ああ、なるべく気を付ける」

ちよつとした沈黙が流れる。これどこまで一緒なの？

「ゆきのんのこと、どうしよう」

「それは今から考える。お前も考えとけ」

「うん、頑張ってみる。じゃあね」

「おう」

そう言うて由比ヶ浜は帰っていった。さて、俺も行きますかね、ドーナツショップまで。陽乃待たせるのも悪いし急ごう。俺は歩みを早める。

陽乃はよくわかっている

あれから急ぎ足でドーナツショップまでやって来た。店内には結構な人がいた。学生は帰宅するタイミングだから仕方ない。店内を見渡して本を読んでいる陽乃を見つめる。その姿はかなり様になっていて、なかなか注目されているが陽乃は知らぬ顔だ。さすががつすね、陽乃さんや。そんなことを思いながら陽乃の所へ行き正面に座る。ふ、周りの連中よ、その反応にはもう慣れたさ。

「お待たせしました」

「お、来たね。お久しぶり」

「どうも、つってもそんな期間あいてませんけどね。電話もしたし」

「それもそうね。ま、とりあえずおかえり？」

「ただいま」

「どうだった京都」

「かなりいいところでしたよ」

「それはそれは、楽しめたみたいだね」

「ええ、とても」

軽い挨拶を交わした後ちよつとした雑談を続ける。それに一区切りうち、俺は飲み物とドーナツを買うために一度席を外れる。会計を終えて席に戻ってきたタイミングで陽乃が言う。

「じゃ、修学旅行の話を聞こうか」

「そうですね。先にいっておくと今日はまた別の相談があるんでよろしく」

「修学旅行であの後なんかあった？」

「まあそれはそうですが、相談はまた違うことです」

「えー、修学旅行終わったばかりでいきなり？　八幡京都でお祓いでもしてきてもらった方がよかったですんじゃない？」

「なんか憑いてますかね」

「ほら、証拠に目がとんでもないことに…」

「うるせ、ほっとけ」

ちよつと、脱線してるよ。

「で、修学旅行は？」

「そうですね、あの電話の後からですね……」

陽乃にあの後あったことを由比ヶ浜とはさつき和解したことを告げる。

「あははは、そこでその方法が真つ先に思い付いちやうあたりがほんと八幡だね」

「う、そんな笑わんでも」

「くくつ、でもさー八幡。嘘はいけないな、この陽乃ちゃんは誤魔化せないぞ♪」
「嘘なんて…」

「雪乃ちゃん達の事を計算にいれ忘れたつての、嘘でしょ」

「それは」

「忘れてなんかない、いれなかつたんだよね」

「……」

「だつていれちゃうと八幡のやり方でできなくなっちゃうもん。だから意図的に外したんでしょ」

「……」

「じゃないとやる前から思い付いた策を愚策なんて言ったりしないよ。愚かな策、八幡はそれをわかっていたからそう思ったんじゃない？」

「…否定できませんね」

「私が思うに、八幡さ、そろそろ限界なんじゃない？ 今まではなんの支障もなかったかもしれないけど、今じゃ周りに人が増えすぎたよ」

「でも俺のやり方はこうだし、流石に止めるわけには…、目的もあるし」

自分を切る方法は俺の専売特許だ。それをやめるとなると身動きできなくなるに等

しい。

「私は止めるなんて言うつもりはないよ。八幡のやり方は八幡にしかできないし、必ず必要な場面が訪れるから。それにそれをやってのける八幡はすごいって思うよ」

「でも、不必要にその方法を使うのはまずいと思うのよ。修学旅行の件は緊急とはいえ他にもいろんなやり方があるわけじゃない？ まあ八幡の思考回路には既に染み付いちやつてるから真つ先にそれが浮かぶのは仕方ないけどさ」

「これからは柔軟性を身に付けるといいよ。この先も無闇に使い続けると予想外の厄介事を産み出しちやうかも知れないから。今回はそこまで大変じゃなかったけどさ。八幡もそれは望まないでしょ？」

「まあ、そうだな。要は無駄に俺の方法を使い過ぎるなつてことか？」

「そうね、使い分けつて言うのかな。今はこの方法しかないつてときとか、ここは試すチャンスだつてときとかは使つて、ここで使つたら不必要に周りを禍根を残すだけだつて時は別を模索するみたいな感じ？」

「なるほど」

「第一、八幡が本領を發揮しだすのは事態が窮地に追い込まれているとき、もう打つ手がほとんどないつてときだからね。奥義や諸刃の剣みたいなものだよ。普段からそんなものほんぽん使わないでしょ。そんなことしてたらあつちこつちに反動がすごいよ」

「俺の方法ってそんな扱いなの……。でも確かに序盤で使う機会はないかも。にしても陽乃は止めろとは言わないんだな」

「だから言ったでしょ、必要だと思ってるって。それに八幡の強味だもの。それを止めろって、私から仮面と処世術を奪うようなものよ」

「そんなもんか？」

「まあ今回は緊急だったから仕方ないとは思うけど。でも本当によく嘘告白なんて方法思い付くわよね。私じゃ候補にも上がってこないもん」

「ちなみに陽乃だったらどうした？」

「うーん、先生が呼んでたとか、緊急の用があるから来てとかいって無理矢理どっちかを連れ出して、その後戸部くんを説得するかな」

「おお、そんな方法もあったか。さっぱりだったわ」

「いや、結構普通だと思うよ……。八幡の方法を思い付く人の方が圧倒的に少ないって」

「そうか？ まあ、確かに使い分けは大事そうだな。今回はあいつらの機嫌を損ねるだけで済んだけど、今後はどうなるかわからないし」

「そうそう、無駄に八幡の立場を危うくする可能性だってあるもの。精神的ダメージはなんとかなっても社会的ダメージはどうにもならないことが多いし」

「リスクリターンの計算は得意なはずだったんだけどな」

「ダメージは予想外のところから来たり、想像以上に大きくなることがあるからね。利益と一緒で」

「ま、今回はこれがわかつたつてことが大きなりターンだということにしよう」

「なんか丸く収めるところ悪いけど八幡まだ雪乃ちゃんと和解してないよ」

「そうなんよなー、でも今ちよつと」

「え、なに？」

「ほら、最初に言った相談事、あれ絡みでちよつと対立ぎみといふかなんというか」

「へー、どんな？」

陽乃に生徒会選挙に関する今日のやり取りを話す。

「へー、雪乃ちゃんが立候補ね」

「正直今のあいつに生徒会長が務まるとは思えない。文化祭の二の舞になりそうで」

「そうね、想像に難くないわ」

「それに今回は自分から立候補したわけじゃないし」

「あの子が自ら進んでやったことなんてあるのかな」

「部活とかは？」

「そういえば奉仕部って雪乃ちゃんが言い出したのか、静ちゃんが始めさせたのか、どっちかな」

「てつきり雪ノ下が作ったのかと」

「あの子がそんなことするかなー」

なんとなく今までのことを思い出してみる。てか基本奉仕部ってのが受け身なんだよな。積極性の欠片もない。

「あ、あれは？文実は、立候補したんじゃないか？」

「え、そうなの？私てつきりクラスで推薦されたからかと」

「陽乃がやってたからじゃないのか？」

「それでちよつとやろうと思っていたけど言い出せなかったところで、推薦されて乗ったのかと思ってた。相模ちゃんだっけ？の依頼もほいほい受けてたし気になってたのかなーとばかり」

「えー、ならもしかして」

「そうね、その可能性もあるよ。実際規約や現状についても詳しくあったんでしょ？」

もしかして雪ノ下は生徒会長になりたいのか？ そう考えられなくもない、確証はないが。

「でもその場合だとだいぶ楽になるな。したい奴がいるならそいつがやればいい。ただ

問題なのは……」

「雪乃ちゃんの性格というか技量というか……」

「あいつほど立ち位置や評判は適しているのに、内側が全然あってないやついなぞ」
「といつても雪乃ちゃんに足りないのって大きいのが1つだけなのよね」

「あー、確かに。だいたい要素がそこにたどり着くな」

「そうそう、あれよね」

「ああ、あれだな」

「謙虚さだな（ね）」

それさえあればなんとかなると思うんだよな。まず人を見下さなくなるから、周りも無駄に険悪になることはないだろ。それから自分の限界も認めることになるから抱え込みすぎることもない。そして自分の考えが絶対ではなくなるからもつと柔らかくなるはず。

「とはいえ、あいつがちやんと意思表示をしないと背中を押せないな。依頼を利用していただけだ」

「逃げ道や言い訳の元ができちゃうもんね」

「自ら言い出して逃げた奴が一人いたがな」

「そういえばいたね。流石に雪乃ちゃんがあそこまで愚かだとは思わないけど」

「ま、あいつがやりたいかどうかはまだわからないからな。そうじゃなかったときのことも考えないといけない。ちなみにどれくらいの確率でやりたがってると思う?」

「そうねー、7／8割つてところかなー」

「えらい高いな」

「生徒会長は私やらなかったからね。最近是我的後ろを追っかけるのも止めたみたいだし、そこに至ってもおかしくはないかな」

「なるほど」

「あとは姉の勘よ」

「なんか妙に説得力があるなそれ」

その後色々なことを話し合ってみたがこれといった案は出なかった。なんというか、今の俺と陽乃が雪ノ下と話ししてもなんとかなる気が全くしないんだよな。

「あー、もう無理だつて」

「ちよつと私も考えてるんだからがんばってよ」

「世の中ドーナツみたいに甘かったらいいのに」

「八幡それ全然面白くないよ」

「じゃあドーナツ見たいに人の考えの向こう側が覗ければいいのに」

「それされたら私も八幡も何もできなくなるわね」

「そうだ、やっぱなしで」

なんかぐだぐだしてきたな、俺が。これは俺がどつかで妥協すべきなのかもしれない。だいたい意欲のあるやつがいたらもう出てきてるに決まっているんだ。それが出てこないってことはいないってことだろ。なら不安だがやってもいいって奴に頼むしかない。

「なあ、俺ちよつと慎重になりすぎてるか？」

「それはあるかも。所詮、高校の生徒会长つてだけだからね。多少の失敗はなんとかなるし、取り返しのつかないことになるなんて滅多にないでしょ」

「だよな。でもなんでか不安が拭えないんだよ」

「もしかして相模ちゃんの件が尾を引いてるんじゃない？　かなり危ないところまでいったし。あれは、本当ごめん」

「別にいい、済んだことだし。そうなるど厳しく考えすぎたかな。もう雪ノ下に任せてもいいか？　でもやっぱあいつはあいつで不安だわ」

「一色ちゃんを説得するのは？」

「俺は一色のことよく知らないから何とも言えないが、方法としてはなしじゃない。今度一色と話してみるか」

「一色ちゃんってどんな子なの？」

「えつとな、ザ・可愛い女子高生って感じだ」

「なにそれ…」

「ほら、自分の魅せ方を熟知してるやつ。クラスの男を片っ端から引っ掻けそうなやついるでしょ」

「あ、それで無理矢理立候補されちゃったわけね。私だったら女子もまとめて掌の上に乗せるけど」

「陽乃は次元が違うだろ。武器の数が桁違いだ」

「ふふん、それほどでも」

「わー、すごいすごい」

「ちよつと、持ち上げるなら最後までちゃんとやってよ」

「その先にいい未来が見えなかった」

「なによそれ……」

また明日の状況を見てまた考えるかな。もしかしたら先生が何とかするかもしれないし、由比ヶ浜がどう動くかもわからん。

「ちよつと様子見するか。あと一週間はああるし、今は一色と話すことくらいでいいだろ」

「そうね、焦っても浮かばないし。私も何か考えてはみるけどあまり期待はしないで」

「俺も今回は全部丸く収める自信がこれっぽっちもない。というか一色へのダメージを

なくす方法が見当たらない」

「確かに会長になるにしてもならないにしても傷はつくわね」

「まあその辺も本人に聞いてみないとな」

「お疲れ様」

「ほんと、俺この前まで京都いたんだけど……。あ、そうだ」

俺は鞆をあさり、小さな紙袋を取り出す。

「これ、修学旅行のお土産。流石に一万円分じゃないが」

「それ冗談に決まってるでしょ。ほんとにそれだけ買ってきたら困るって」

「あんま期待するなよ」

「わー、きつとすごいんだろうなー、楽しみだなー」

「おい、もう返せ」

「嘘、嘘だって。ジョークよ、悪ノリよ」

「はあ」

「空けていい？」

「もう陽乃のものだし好きにすればいい」

「おや、久しぶりの捻^{ネジ}デレ」

「ほっとけ」

陽乃は開封し始める。俺はそんな陽乃から視線をはずし他所を向く。自分の贈り物を相手が開ける場所って見辛くない？

「これは、ヘアピン……。ちりめん細工ね」

そういう陽乃の手には俺が買った3本のヘアピンがあった。それぞれにちりめん細工の花飾りがついている。どれも明るい色の花だ。

「どうしてこれをも？」

「どうしてって、似合うかなーと思ってる？」

「私には可愛いすぎない？」

「そうか？ 陽乃が普段そういうの着けてないだけで似合うと思っただけだな。慣れないのか？」

「昔からあまりこういうのってつける機会なかったのよね。いつもおとなしめのやつとかだったから。ど、どう？」

「おう、予想以上にいいと、思う」

「そう……。あ、ありがと」

少し沈黙が流れる。……ちょっと誰か助けて。急に空気がおかしくなった。からかうつもりだったのに言葉出てこなかったよ。ワンポイントで印象って結構変わるんだな。

……にしても気まずい。陽乃が下向いたままちよつともじもじしてる。いつものあの感じはどこ行っちゃったの？ そのヘアピン性格改変効果でもあるんじゃないかね？ やばいつて、言葉に出来ないけどやばい。

しばらくそんな右にも左にも傾かない状況が続いていたが、全く想定外の形でそれは傾いた。

「あれ？ 比企谷？」

「あ？ ……折本か？」

「超ナツいんだけど！レアキャラじゃない？てか、なんか印象変わった？ ウケる」

いや、全然うけません。ついていけてないです。ほら、俺よりついていけてない陽乃の目が点になってる。さっきから陽乃がキャラ保ててないよ。

「あれ？ 比企谷って総武？」

「そうだが」

「へー、いつがーい！頭良かったんだー！知らなかった。全然人と話してなかったもんね」

「そうだな」

お前は全く変わってないんだな。あ、折本の目線が陽乃へ向けられた。

「彼女さん？」

「いや、…友達だ」

「え、友達？ 年上でしょ？」

「そうだが…、なあ陽乃、あれ、おーい、いい加減戻ってこーい」

「…は！ あれ？ 何事？」

「おい、大丈夫か？」

「5秒頂戴…、よし、で、どちらさん？」

「まあ、分かりやすく言うのだな」

「うん」

「…黒歴史の1ページだ」

「あーなるほど、だいたい理解したわ。八幡、どんまい」

おい、台詞とはうらはらで目が輝いてるぞ。て、俺ほったらかしで話始めちゃったよ。何をそんなに盛り上がってるの？ とりあえず陽乃のコミュ力に脱帽。

俺はそんな二人をボケーっと眺めていると、急に話をふられた。

「にしてもあの比企谷がこんな美人さんと友達とかびつくりなんだけど」

「そうか？」

「しかもタメ口でしゃべっちゃってるし」

「そういえばそうだな。いつからだ？」

「さー？ もうこの先それでいいよ」

「じゃ、そうするわ」

「あ、そうそう。比企谷さ、葉山くん知ってる？」

「葉山って、あの葉山？」

「総武に葉山くんってたくさんいるの？」

「いや、一人しか知らん」

「葉山隼人くんなんだけど、サッカー部の」

「ああ、そいつがどうした？」

「うちの学校に紹介してって子たくさんいるんだよねー。あ、この子とかもそう。仲町千佳、私の友達」

へー、あいつ外でも有名なんだな。

「お前だったら友達に葉山の知り合いくらいいそうだけだな」

「うちの中学から総武に行った人あんまりいないからそんな友達いないんだよね。でもこんな美人さんと友達の比企谷なら知ってそうじゃない？」

「まあ、一応。でもあいつ誘っても来ないと思うぞ」

「確かに隼人は普通に誘っても来ないわね」

「それ暗に自分が言えれば来るってことだよな」

「もちろん、たぶんすぐ来ると思う」

「やめろ。俺の経験上あいつと関わるとあんまりいいことないんだ」

「そうね、今違うことで手一杯だし」

「だな。というところで諦めてくれ」

「というこことつて、全然そんな内容じゃなかったと思うんだけど…。そつかー、残念だなー。まあ仕方ないね」

「おう、すまんな」

ふと時計を見るとだいたいぶ時間がたっていたので、陽乃と話して今日はもう解散するこ
とにした。俺がテーブルの上を片付けていると、まだ近くにいた折本が口を開いた。

「なんというか、比企谷つて思ってたより面白いんだねー、知らなかったんだけど。マジ
激変じゃん」

「そりゃあの頃からだいたいぶたつたからな」

「私結構誤解してたかも…」

「んなもんだろ、あの頃がやばかったのは事実だしな。あんま思い出さたくないからほ
じくり返すなよ」

「なにそれウケる。それじゃ、私達は帰るね。陽乃さんもうございませう」

「全然いいよー。面白い話聞けたし」

「じゃ、比企谷またねー」

「おう、またがあるとは思わないが」

折本が出ていった後、しばらくたつて俺達も店を出る。

「あいつからなに聞いたんだ？」

「中学の時どんなんだったかとかかな？」

「たいして聞くことなかっただろ」

「うん。全然だった」

「う、自分で言つといてなんだけどそれはそれで…」

「ま、いいじゃない。折本ちゃんも八幡が面白い人って気付いたみたいだし」

「そうか？ 自分じゃよくわからんな」

「私は今の八幡は好きよ。前までのもよかったけどね」

「そうか、ありがとな」

「あれ、照れないんだ」

「今まであんまり言われたことなかったからな。噛み締めてんだよ」

「なにそれ…」

「…、なんか後からじわじわ来そう。来る前に帰ろ。また今週のどつかでな、連絡するか」

ら、じゃ」

「え、あれ、逃げた?!」

俺は急いでその場を離れて帰路につく。そのため俺が陽乃の少し赤みの増した顔に気付くことはなかった。

急いませいか心臓が少しうるさかった。

彼女は思いの外凶太い

昼休みの教室。ちなみに比企谷はベストプレイスにいるため不在。

「おーい、結衣、さっきから元気ないけどどしたん？」

「あ、優美子。別になんでもないよ、あはは…」

「いや、大丈夫に見えないから言ってるんだし。何かあったん？ ヒキオとまだ仲直りできてない感じ？」

「え、優美子知ってるの？」

「まあ、ヒキオから聞いたし」

「え、ヒツキーが？」

「うん、いろいろ話聞いてもらったときにね」

「そんなことがあったんだ」

「で、どうなん？ 手、貸す？」

「ヒツキーとはちゃんと仲直り出来たよ。私にもいけないところあったから…」

「そう、なら他にあるん？」

「ちよつと部活がね……」

由比ヶ浜は三浦に昨日のことを話す。途中で加わった海老名も由比ヶ浜の話真剣に聞いていた。

「……、それで私どうしよつかなって考えてるんだ」

「へー、そんなことが。ヒキオまた大変じゃん」

「優美子知ってたんだね……」

「その下りさつき結衣とやったし。その件は今はまだいいし。で、結衣はどうしたいとかあんの？」

「私は部活がなくなるのが嫌かな」

「なら雪ノ下さんを止めるしかなくない？」

「でも、まず雪ノ下さんが何考えてるのかもわからないよね」

「確かに、ゆきのんがどういうつもりなのか……」

眉間にシワをつくって由比ヶ浜が近づく。すると、三浦は閃いたように言う。

「ならば、聞いちやえば？ どういうつもりなのって？ 考えてもわからないしそうするしかなくない？」

「でもゆきのん話してくれるかな……」

「そんなの結衣次第じゃん。そんなこといつてるならその程度なんじゃない？ 結衣っ

ていつも何も考えずに突っ込むじゃん。それは悪いところでもあるけど、いいところでもあるってあーしは思うよ」

「直接聞くのが無理でも、近くにいれば見えてくるとかあるんじゃない?」

由比ヶ浜はしばらくうんうんと悩む。そして顔をあげる。

「私、ゆきのんの手伝いする。きつとゆきのんのことだから言えないことでもあるんだと思う。意味もなくあんなこと言い出したりしないはずだから。それをゆきのんの口から聞きたい。だから、まず近くでゆきのんをちゃんと見る、それから思ったことを話してみる」

「そう、結衣がそうしたいならそうすればいいし」

「うん、結衣ががんばって」

「二人ともありがとう」

「別に、当たり前前なことだし」

三浦は照れくさそうにそっぽを向く。それを他の二人が微笑ましく見ていた。

そんな彼女らと、少し離れたところで騒いでいる彼らの集団の一波乱はもう少し先の

話…。

放課後、現状確認と方針を確認するため部室へと向かうため教室を出る。しばらくすると、後ろから由比ヶ浜がやって来た。

「ヒツキー、待って」

「あ？ どうした？」

「私、ゆきのんの手伝いすることにした」

「お前反対じゃなかったっけ？」

「そうだけど、それよりゆきのんが何考えてるのか知りたいから。近くにいようと思つて」

「そうか。で、最終的には？」

「うーん、ゆきのんの気持ち聞いてから止めるかどうか決めるつもり」

「なるほど。いいんじゃない？ 俺は一応他の方法探してみるけど」

「うん。わかった」

その後は特に言葉を交わすことはなく部室へと歩みを進めた。部室に着くと既に雪ノ下は到着していて、何かを書いていた。

「よう」

「あら、こんにちは」

「やつはろー、ゆきのん。何してるの？」

「選挙の演説を考えてるのよ」

「へー、随分とやる気だな」

「ええ」

軽く言葉を交わし、俺達は定位置に座る。

「とりあえずこれからの方針なんだが、雪ノ下は今やってんのを進めるのでいいか？」
「構わないわ」

「で、由比ヶ浜が…」

「ゆきのんを手伝う！」

「え、いいのかしら？」

「うん。私じゃ何か方法考えるとか出来ないし…」

「そう、ありがとう」

「で、俺が他を模索」

「思い付きそうなの？」

「ぶつちやけ全くだ」

「やはり、私の方法には反対かしら」

「あー、お前次第？」

「それはどういう…」

「自分で考えろ。というこで、確認は済んだから解散でいいか？」

「え、ええ。いいわよ」

「じゃ、先帰るわ」

そう残して部屋を出る。これでしばらく集まる必要はないだろう。さて、俺もとりあえずやることやりたいんだが…。一色呼びに行かないといけない感じ？ 嫌だよ？

そんなことを考えながら廊下を歩いていると前からちよこちよこしたのがやって来た。

「あれ、先輩？」

「良いところに来たな。ちよつと話があるんだが」

「あの、昨日言ってたやつは…」

「もう終わった。軽く確認しただけだからな」

「そうですか。どんな感じですか？」

「雪ノ下と由比ヶ浜は昨日言ってた方法で。俺は他を探す」

「やつぱり先輩は反対なんですか？」

「一応？」

「なんですかそれ」

「詳しくは後で話す。とりあえず場所を変えるぞ」

俺は一色を連れてベストプレイスにやって来た。話をする前に近くの自販機で飲み物を買う。俺はもちろんマツ缶。

「ほれ」

「わ、なんですか」

「俺だけ飲むのもなんだし」

「別にいいですよー」

「もう買った後だから、いらなかったら後でどうにかしろ」

「そこまで言うなら貰っときます」

俺はいつものようにベンチに座る。一色は立ったままだ。

「で、話なんだが」

「ごめんなさい！好きな人がいるので！」

「……は？」

「……え？」

「何言ってるの？」

「…え、何って話があるって」

「だから選挙の話」

「こ、告白じゃない？」

「なんで俺がお前に告白しなきゃいけないんだよ……」

「だってこんなところに連れてきて話があるって」

「俺、昨日お前を認識したばっかなんだけど」

「えー、まあ、そうですね……。ほら、ここってそういうことする場所ですし」

「え、ここって告白スポットなの？」

「はい、私も何度かここで」

「初耳だ……」

俺、一年半も告白スポットで飯食ってたの？よく遭遇しなかったな。何か今度からここに来づらいんだけど。もしかして俺がいたからできなかったパターンとかあったのかな。そうだと申し訳ないな。

「とりあえず、誤解させてすまん？」

「いえ、その、逆に謝られると私恥ずかしんですけど」

「……さっきのは忘れよう」

「すいません」

「で、さっきの話なんだが」

「一応ってやつですか？」

「そう。何か雪ノ下が生徒会長をやりがつていてる可能性があつてな。そうだった場合はあいつがやればいいが、確証がないから一応俺は他を探している」

「そうなんですか。でもやりたがってるなんてよくわかりましたね。もしかして先輩……」

「いや、違うから。なんですすぐそういう方にいつちやうかな」

「だって二年生の三本指に入る可愛い先輩二人と三人で部活やつてるのに……」

「だからなんだよ。しかもわかつたのは俺じゃなくて雪ノ下の姉だ」

「姉って、あの雪ノ下陽乃さんですか？」

「あのって、あいつそんな有名なの？」

「文化祭ですごかつたから一年生の間でもかなり有名ですよ。そんな人をあいつ呼ばわりって、どういう関係なんですか？」

「友達だが」

「…先輩何者ですか」

「別に特になんでもねーよ。で、本題なんだが、お前へのダメーヂを回避する方法が全くないんだ」

「あー、そういうことですか。それは別にいいですよ」

「別について？」

「既にこうやって立候補させられた時点で無傷で済むなんて思ってますん」

「そうか、ならなんで相談に？」

「そりゃ、なるべく生徒会長なんて仕事したくありませんから。どうしようもなくなったら仕方ないですけど。雪ノ下先輩になら負けても全然いいので、むしろそっちの方が私的にはグッドです」

特に顔の表情を変えることなく一色はそう言う。

「ほーん、そんな性格つつうか外面してるだけあつてなかなか凶太いんだな」

「やっぱりばれてますね」

「お前もうちよつと上手くできないの？」

「無理ですつて。男子に好かれればだいたい女子には嫌われますから」

「そんなもんか。ま、男女関係なく上手くできない俺がいうことじゃなかったな」

「え、先輩つて友達多いんじゃないんですか？」

「なんでそうなるんだ。全くそうは見えないだろ」

「でもさっきの話で…」

「逆に俺嫌われものだぞ？ 文化祭で悪い噂広まりまくったし」

「先輩つて、あのヒキタニつて人ですか？」

「まあ、正確にはヒキガヤだが」

「そうだったんですかー」

「その話もういいだろ。ただお前既に名前は表に出てるから一応演説とか考えてた方がいいと思うんだが」

「取り下げはやっぱできませんかねー」

「雪ノ下がなることになって取り下げたら印象悪くないか？」

「そうですね？ぶっちゃけ変なノリで起きた事態ですしそんな心配しなくてもいいんじゃないかなーって思ってるんですよ。それに私に不利益な噂が流れたときは無理矢理立候補させられてたことを…」

「怖っ、それ最初からやれば？」

「しませんよ。そこまで大事にしたくないですし」

「お前がもうちよつと深刻そうにしてれば早いうちに取り消せたらどうに」

「そんなの絶対にやですよ。負けたみたいじゃないですか、それ相手の一番喜ぶ反応です」

なんか一色の心配は要らなさそうだ。悔ってたわ。周り気にせず葉山にアピールしてるだけはあるんだな。ぶっちゃけすげえ。

そうなるとますます雪ノ下がやる方法が良くなってきたな。もうこれ俺何もしなくていいんじゃない？ どうにでもなるような気がしてた。結局俺が難しく考えすぎてた

だけだったのかも知れない。雪ノ下のそばには一番適任の由比ヶ浜がいるし。

「話付き合ってくれて助かった。もう大丈夫だ」

「いえいえ、元は私のことですから」

「やっぱり雪ノ下がやる方法がいいかもしれない。とりあえずそう思っていてくれ。決まり次第取り下げられるかどうか判断してその後を考えるでいいか？」

「はい。全然大丈夫です」

「じゃ、そういうことで」

話を終え一色と別れて、俺は家へ帰った。

木曜の放課後、俺はまた陽乃に会いにとある喫茶店に来た。今回は俺が早かったので席に座って本を読んで陽乃を待っている。

「やつほー、八幡」

「おう」

「待った？」

「そんなに。いつもは俺が待たせるから気にするな」

「確かに、そうする」

俺の正面に陽乃は座り、適当に二人して注文を済ませる。

「早速、どんな感じ？」

「一色とも話したんだけど、もう雪ノ下に任せようかと思ってる」

「雪乃ちゃんやりたいって言ってた？」

「いや、それはまだ聞いてないが。一色もなんだか大丈夫そうだし。なんせ他に何も浮かばないからな」

「いいんじゃない？ もともと案出せばいい程度の依頼だったんだしき」

「今回はちよつと、いや、だいぶでしゃばり過ぎたな。仕事嫌いなはずが、らしくない」

「まあ八幡そんないってるけどなんだかんだ真面目だからね。結局、私も八幡も今回は出番なしかな」

「そうだな」

店員が頼んだ物を持ってきた。それを飲み食いしながら適当に話をする。

「とうかさ、そのくらいだったら電話で済ませてよよかったね」

「言われてみれば……。最近陽乃と会うのが完全に日常に組み込まれてきたからかな。電話で済まそうなんて思いもしなかったわ」

「そ、そう。私も八幡とこうしてるの好きだから全然いいんだけど」

「おう。……そのヘアピン使ってくれてるんだな」

「もちろん。結構気に入ってるのよ。改めてありがとう。周りにちよつと騒がれたけど」

「なんだそれ」

「ほら、私今までこういったのつけたことなかったからさ。友達にね、いろいろと……」

「まあ、気に入ってんなら何よりだな」

そんなこんなでしばらく他愛のない話を続ける。そうし始めて十数分だった頃、突然俺達の席の側に誰かが近づいてきた。顔を上げるとそこには……、

「ヒツキー?」

「姉さん……」

雪ノ下と由比ヶ浜がいた。

「あ、雪乃ちゃんじゃん。ガハマちゃんも」

「よう、お前ら。…何してんだ?」

「選挙の話し合いをしていて…、で、何故あなたと姉さんは一緒に?」

「まあ、いろいろと?」

別に隠していたわけではないが、ないと思うんだが、変な返答になっちゃった。

……陽乃は、なんか楽しそうだな。

事態は丸く収まるものである

現状報告。俺は席を移動して陽乃の隣に、雪ノ下と由比ヶ浜はその正面に座っている。妙な沈黙が少し流れ、それを俺がやぶる。

「依頼の方はどうだ？」

「順調よ。演説の内容も考えたし、あとは予備日に立候補してまたそれから感じてかしら」

「そうか。順調そうだな」

「まあ、それとあなたにも話があったのだけれど……。それより気になることがあるのよ」
「…ヒツキーはなんで陽乃さんと？」

「ですよ。そこだよね。」

「なんでかって聞かれると…、何でだ？」

「さつき別に電話でもよかったって話になったし、特に意味はなかったよね」
「だよな。ということと特に意味はない」

「私は特に意味もなくこうしている理由が聞きたいのよ」

「……友達だから？」

「誰が？」

「誰って、俺と陽乃が」

俺の言葉を聞いて二人が固まる。おーい、戻ってこーい。

「…大丈夫か？」

「…は！ ね、姉さんとあなたが友達？ 信じられない話なのだけれど」

「ヒツキー、本当？」

「そんな嘘は言わない」

「ほんとだよ」

「そうなんだ…」

由比ヶ浜が小さく呟いた。その言葉に雪ノ下が無表情に続く。

「そう、あなたも姉さんなのね。結局あなたもそこら辺の人と同じ…」

「雪乃ちゃん…」

雪ノ下の言葉を陽乃が底冷えしそうな声で止める。陽乃を横目に見ると、顔は笑っているが目が笑っていない。

「今回は何を言おうとしたのか聞かないで置いてあげるけど、今後八幡のことそんな風に言ったら雪乃ちゃんでも許さないよ。私達のことを録に知りもしないで勝手なこと言わないで」

雪ノ下は突然の陽乃の言葉と雰囲気に唖然としている。陽乃はこれまで直接雪ノ下に矛先を向けるようなことはしてこなかっただろうから、こういうのは初めてなのだろう。

そして、そうやって怒っている陽乃を見て、俺の中で沸き上がってくるこの感情が何なのか理解できない。ただ、素直に嬉しいと感じていることだけはわかった。

「ご、ごめんなさい。軽率なことを言ったわ。本当に、ごめんなさい」

雪ノ下は俯いて謝った。その口調は本心から言っているように重かった。

「もういいよ。私もきつくいったから、そこはごめん。でも2度と言わないでね」
「ええ。でももう……」

「何?」

「なんでもないわ。最近姉さんが丸くなってた理由がわかったような気がただけよ」

少しばかりすつきりした顔で雪ノ下が言う。

「なによそれ。妹のくせに生意気だぞっ」

「逆にあなたの妹だからよ。伊達に長い間あなたを追っかけていないわ」

「もう追っかけてないくせに」

「どうかしらね」

「なによそれ、気になるんだけど」

「眠れない夜を過ごさなさい」

そんなことを言つて姉妹は互いに笑い合つていた。視線を前に戻すと、どことなく苦い顔をした由比ヶ浜が俺を見ていた。

「どうした？」

「あ、んや！ な、なんでもないよ！」

「そうか？」

「うん、そう！ ヒツキーは全然気にしなくていいから！ ……これは私の問題だから」

由比ヶ浜があたふたしながら答えた。最後の方は声が小さくて喧騒に紛れ、俺には届かなかつた。

「で、俺になんかあるつて言つてたけど出直すか？」

「いえ、別に今でも大丈夫よ。由比ヶ浜さんから話を聞いて…」

そう言ううと雪ノ下は体を俺の方に向け頭を下げた。

「修学旅行では酷いことを言つてごめんなさい。先のことを考えずに何もしなかつたのは私だったのに」

「おい、顔をあげろ。俺こそすまなかつた。わかつていたのにお前らをきつた。改めて二人に謝らせてくれ」

「わ、私もあの時はごめん！」

「いや、お前からの謝罪はもうもらってるからいいんだけど……」

「え？ でもヒツキー今……」

「俺は雪ノ下にはまだ謝ってなかったし。陽乃に指摘されて罪が重くなつたからまた謝らないと思つてたんだ」

「そうだったんだ？」

由比ヶ浜が釈然としない顔のまま言う。

「修学旅行の件はそれぞれの不運に不運が重なつちやつたからねー。誰の責任でもないでしょ。各々の課題を把握するにはいい機会だったんじゃない？ね、八幡」

「結果オーライってことか？」

「だいたいのはそうでしょ」

「まあな。てかなんで陽乃がいい感じにまとめて全部持つてくんだよ」

「ほら、当事者三人とその他一人。こういうのってその他一人の役目でしょ？」

「……………ようするに姉さんは」

「そうか、陽乃は仲間はずれにされて寂しかったんだな。すまないな、気づいてやれなくて。頭でも撫でようか？」

「ちよ、なに言つてんの!? 雪乃ちゃん達の前だよ！ でも、ちよつと……」

「冗談に決まってるんだろ。人前でできるわけあるか、二人でもできないのに」
「んな！ ふんだ！」

陽乃は拗ねて、グラスの中の氷をストローでつつき始めた。

「…初めて見る姉さんだわ」

「…私も予想外かも」

「なんか、不思議な気持ちね。言葉にできないわ」

「あはは…」

困ったように言う雪ノ下に由比ヶ浜が苦笑いを浮かべる。

「おい最年長。そろそろ威厳を取り戻せ」

「ん、仕方ない。ま、冗談はこのくらいにして」

「あまり冗談には見えなかったのだけれど」

「冗談は！このくらいにして！ ……どうしよう八幡？」

「いつになくポンコツだな」

「失礼ね。ネタがないのよ」

「あの、私の話まだ終わってないのだけれど」

「え、他になんかあんの？」

「選挙のことよ。私、生徒会長になりたいの。だから立候補したい、いいかしら？」

「ん？　へ？　どういった風の吹き回しだ？」

「その、由比ヶ浜さんに……」

そう切り出して雪ノ下は話始めた。

その日の放課後、部室。雪ノ下と由比ヶ浜は机を挟んで向かい合い選挙の準備をしていた。紙にペンを走らせ、たまに宙を見て考えている雪ノ下に由比ヶ浜は手伝い出してから思っていることを投げ掛けた。

「ゆきのん」

「何かしら」

「なんか、楽しそうだね」

「え？」

「この前から一緒にこうしてるけど、楽しそうだなーって思ってる」

「そ、そうかしら」

「うん。もしかしてさ、ゆきのん生徒会長やりたいの？」

「べ、別にそういうわけじゃ」

「真面目に答えて」

「その…」

「ゆきのんさ、なんでヒツキーが反対したのかわかってる？」

「それは私のやり方が気に入らないからじゃ」

「違うよ。ヒツキーは今のゆきのんには任せられないから反対してるんだよ」

「どういうことかしら？」

「ヒツキー言ってた。生徒会長は大変な仕事だって、意欲と覚悟があるやつじゃないとダメだって」

「でも私になら」

「ゆきのん、そう言うところだと思うよ。ちよつときついこと言うけど、文化祭でもそうだったじゃん。これまでの依頼も仕事も全部一人でやれてた？」

「……」

「私達はずっとヒツキーに頼ってばっかりで何もできてなかったんだよ。依頼だっていつつもヒツキーにおんぶでだっこだった。私達は依頼に私情をたくさん挟んでたけど、ヒツキーはいつも全体を見て依頼をどうにかすることを考えてた」

「今回もそうなんだよ。適当に生徒会長を誰かにやらせたらその後はどうなると思う？きつと大変なことになっちゃう。だからヒツキーは慎重になってるの」

「ならどうすれば……」

「ゆきのんはさ、生徒会長になりたいの？」

「……」

雪ノ下は黙って頷いた。

「ならちやんと言うべきだよ。私は生徒会長したいって。今は転がってきたチャンスにただ乗っかっているだけ、ゆきのんの気持ちはその程度なの？」

「違うわ。今まで私は姉さんの後ろを追いかけただけだったけれど、あなた達と過ごすうちに、そうではなくて自分で何かやりたいと思ったの。それで前から興味があった生徒会長になろうと……」

「そうだったんだ」

「……やはり今のままじゃダメね。由比ヶ浜さんの言う通り、覚悟は足りなかった。明日、比企谷君に話してみるわ。それに修学旅行の件も謝らなければね」

「そうだね。頑張ってゆきのん！」

「あの、色々ありがとう」

「いいんだよ。だつて友達じゃん！」

そう言つて由比ヶ浜は雪ノ下に抱きつく。

「よしーじゃ、どっか遊びいこうよ」

「あの、まだ準備があるのだけれど」

「ならどつか外でやる!」

「仕方ないわね…」

そうして二人は街へと繰り出した。

「……で、今に至るのよ」

「へー、そんなことが。にしても由比ヶ浜」

「そ、そんなたいしたこと…」

「たくさん難しい言葉使ったな。おんぶにだっことかよく知ってたな」

「ちよ、そこ?! 私だって日々成長してるんだよ!」

「でもいいのか? 部活なくしたくないんじゃないか」

「そうだけどさ、それよりもゆきのんの背中押したくなかったの。部活は時間があるときにはするってゆきのんいってるし、私も手伝いに行くし。それでいいかなって」

「そうか」

「それで比企谷君は、その、やっぱり反対かしら」

「いや、もう特に言うことはない。好きにやれ」

「ありがとう」

雪ノ下はほつとしたように言う。

「雪乃ちゃんはいいい友達見つけられたんだね」

「ええ、感謝しきれないわ。でも姉さんも似たようなものでしょ」

「あははは、確かにそうだ。ガハマちゃん、これからも雪乃ちゃんよろしくね」

「もちろんです！」

「じゃ、最後に雪乃ちゃんにアドバイス。もう少し謙虚になりなさい。そうすれば雪乃ちゃんならだいたい上手く出来るから」

「心に留めておくわ」

「じゃ、もう解散か？」

「そうね、もう時間も遅いし、準備はできなかつたけれど仕方ないわね」

四人で席を離れ、会計を済ませて外に出る。

「じゃ、八幡。今日は雪乃ちゃんと帰るから」

「おう」

「え、聞いてないのだけれど」

「えー、いいじゃない。せっかくだしきー」

「はあ、まったく。そう言うことらしいわ。じゃあまた明日」
「バイバーイ」

雪ノ下姉妹は二人で帰っていった。その姿はもう普通の姉妹と言ってもいいだろう。いや、スペックは全然普通じゃないけどね。逆に二人揃つてると異世界感あるよ。

「じゃ、俺達も帰るか」

「うん……。ヒツキーはさ、やっぱり陽乃さんのこと……」

「陽乃がどうかしたか？」

「いや、やっぱいいいや。なんでもない。じゃ、また明日ね」

「おう、じゃな」

そう言うて由比ヶ浜は駆け足で帰っていった。さて俺も帰るか。

あれから雪ノ下は選挙の準備を順調に進め、予備日に立候補した。平塚先生と一色の説得により一色の立候補取り下げも無事に済んだ。そうして選挙も無事に終わり、雪ノ下は生徒会長になった…。

「で、なんで普通に部活やってんだ？」

「この間言ったじゃない。暇なときにはやるって」

「お前いきなり暇なの？」

「引き継ぎは済んだし、メンバーともちゃんと顔合わせしたわ」

「そうか、やれそうか？」

「どうかしらね。まだわからないけど頑張るわ」

「いざとなったら私もいるしね！」

「いや、そこまで戦力になるとは思えないんだが…」

「期待しないで待っておくわ」

「二人ともひどいし！」

由比ヶ浜が声を荒げる。雪ノ下はそれを見て笑っている。

「あーあ、俺の帰宅部ライフ帰ってくると思っただけだなー」

「ふふ、残念だったわね」

「ああ、全くだ」

俺は笑いながらそう答えた。

季節は冬になつた

今日は久しぶりに部活があるので、特別棟へと向かつている。生徒会長になつた雪ノ下はなんだかんだで仕事があり部活の回数は減つた。由比ヶ浜は頻繁に生徒会室に手伝いで行っているらしいがいいのだろうか。俺？ もちろん帰宅です。

といつてもぐうたらしているわけではない。この間から陽乃に勉強を教えてもらうことになり、その課題をやっている。それが学校の課題より膨大な量なんだよ。

俺の数学の成績を見たとき、陽乃の目が点になつてもんなー。高1の範囲から全部復習するつてことで陽乃のノートと付箋のついた問題集渡されて……。

でもそのノートがかなり分かりやすいし、問題集も解く順番が考えられているしでとにかくすごいのだ。ここまでしてくれたので、俺は頑張つて結果を残さなければと思ひ日々精進している。できるようになる気しかない。

まあそれは置いといて、今日は久しぶりに部長様から召集がかけられたのだ。部室につきノックをして入る。

「よう」

「やつと来たわね」

「ヒツキー遅い！」

「いや、お前たちが早いんだと思うのだが」

いつもの定位置に座ると、雪ノ下が紅茶を出してきた。

「さんきゅー」

「ええ」

「そういや仕事は今何してんだ？」

「今は平塚先生が持つてきたクリスマススイベントの準備をしてるわ」

「イベント？ 学校ですんのか？」

「いえ、海浜総合高校との合同で他所でやるわ」

「いきなり合同の仕事って…」

「向こうから話が持ちかけられたみたいで、断れなかったらしいわ」

「早々災難だな」

発足したてでうまく連帯もとれないであろう序盤から他との連帯も求められる合同

イベントですか。ドンマイとしか言えない。

「それがそれだけじゃなかったんだよねー。大変だったんだよ」

「何かあったのか？」

「向こうの生徒会長がね。こんな感じの人でー」

そうやって由比ヶ浜が両手小さく回す。ろくろ回しだ。由比ヶ浜はそこにも手伝いにいってんだな。もう生徒会に入っちゃえばいいのに、なんかそんな役職なかったっけ？

「すまん、何も伝わってこないん。ずっとろくろ回しでもしてるのか？」

「まあ、そう言っても過言ではないわね」

「冗談のつもりだったんだが」

「えっと、ああいう人たちを何て言ったかしら」

「……パリピ？」

「由比ヶ浜、それは絶対違うと思うぞ」

「ちよ、そんなバカを見る目で見ないでよ！」

パリピの生徒会長ってなんかヤバイな。文化祭とか凄そう。

「あれか、意識高い系か」

「そう、それよ」

「なんかよくわかんないことばかり言ってるさっぱりだった」

「で、それ大丈夫なのか？」

「その人達ブレインストーミングをやると言い出して、最初は確かに必要だと思ったから乗ったのだけれど、最終的に何も決めないのよ。ずっとカタカナ使っているだけで一

歩も進んでいない」

「それでゆきのん、しびれを切らしちゃって……」

「叩きのめしたと」

「正論をぶついただけよ」

「もう、ゆきのん抑えるの大変だったんだから。協力してやんなきゃなのに」

「それは、悪いと思っっているわ。でも我慢できなくてつい」

「ははっ、相変わらずだな。なんとかなったのか？」

「ええ、由比ヶ浜さんと他の部員のおかげで助かったわ」

「まったく、今度から気をつけてよ、ゆきのん」

「ええ」

そこそこ上手くやれているようだ。雪ノ下が暴走するときもあるみたいだが、ちゃんと他がサポートできている。この調子だと大丈夫だろう、雪ノ下も反省しているみたいだし。

「今日はそっちはいいのか？」

「準備は順調に進んでいるから今日は休みにしたのよ」

「そうだったのか」

「ただ……」

「まだなんかあんのか？」

「今度から小学生を準備に混ぜることになってね。そっちをまとめるのに少し人手が足りないかもしれないの」

「なんで小学生？」

「向こうの提案で近くの小学校と保育園を引き込むことになって、小学校側がそれなら準備を手伝わせてって言ってきたのよ」

「へー、それでそいつらの相手をする奴がいないと」

「全くってわけではないのよ。ただそういう子達の相手をするのが皆苦手みたいで」
「なるほど、それでちよっくら困っていると」

「そうなるわね」

「先に言っておくが俺は無理だぞ。嫌われる自信ある」

「そこは大丈夫よ。期待してないもの」

それはそれで複雑だな。少しくらい…、そんな風に見えるポイント俺皆無だったわ。

「それで一人の負担が大きくなるように皆で交代しながらやろうってことになったんだ」

「それで、たまにでいいから私達の方を手伝ってもらえないかしら」

「え、なんで？」

「そこに人を割かないといけなくなつたから念のために。今のところ順調だから問題はないのだけれど、おそらく本番が近づくとつれ忙しくなるから人手が欲しくて。毎日じゃなくてたまにでいいからなんとか頼めないかしら」

「まあたまになら別にいいぞ」

「ありがとう、助かるわ」

仕事の話が済むと、いつも通り三人がそれぞれ好きなことをしだした。俺はいい感じに冷めた紅茶に口をつけ、本を開く。最近の家じや勉強しているから読書は学校でしかしていない。

しばらく静かな時間が続くが、突然開けられた扉にそれは壊される。といつてもカツカツ足音聞こえてたから全然突然じゃなかったんだけどね。この先生名前に反して全然静かじゃない。

「やっぱりやってたか。邪魔するぞ」

「平塚先生、なにか用ですか？」

「ちよつとな。今日はイベントの準備が休みだと聞いたからここにいますと思つたんだ」

「それで？」

「いや、雪ノ下達にはいきなり大変な仕事を押し付けてしまったからな。詫びでこれを持ってきた」

そう言つて平塚先生は懐から紙切れを八枚取り出した。ディスプレイのペアチケツトだ。

「なんでそんなものたくさん持つてるんですか？」

「この前友人の結婚式があつてな…。当ててしまつたんだ。」

「それでそんなになります？」

「ふふ、1つの結婚式でこんなになるわけないだろ。友人が一気に四人結婚式あげたんだ。そこでそれぞれペアで出されていてな……。まさか私もこんなに引き当てるとは思つていなかった。祝儀で金は飛ぶし、惨めにはなるし、それが短期間で4回も……。どうせなら酒がよかつた」

「つまり先生じゃ使い道のないうえ、使いきれないそれを頑張つている生徒会にプレゼントつてことか」

「比企谷、もうちよつとオブラートに包んでくれてもいいんじゃないか？」

「結構包んだつもりなんですけど…」

先生がみるみる落ち込んでいく。

「ま、他の役員にも渡しといてくれ。私は帰る」

そう言つて雪ノ下に手渡すと先生は出ていった。

「ゆきのん！これ今度一緒にこうよ！」

「そうね、でもイベントの準備があるし」

「ちやんと今のペースでいけば大丈夫だし、色々参考にするとところがあるかもよ」

「そうかしら」

「それに今はクリスマスシーズンだからパンさんグッズも……」

「愚問ね、それは既に調べてあるわ。行きましようか」

「ありがと、ゆきのん！」

雪ノ下はパンさんで釣り上げられたのだった。

「しかし、私は年間パスを持っているのよね。だからこのチケット要らないのよ」

「え、そうなの？ でもこれペアチケットだし……」

そう言つてチケットをまじまじ見つめていた二人の顔がこちらを向く。え、なに。

「なんだよ。俺は人ごみやだぞ」

「まあそうよね、あなただもの」

「んー、じゃあ優美子達に誘つてみていい？」

「いいわよ」

由比ヶ浜は携帯をポチポチやりだす。するとすぐに由比ヶ浜の携帯がなった。流石に早すぎないか？

「返信来た。えつと、行きたいって。優美子は年間パス持つてるらしいから私と姫菜で

そのチケットかな」

「そうなるわね」

「あ、あと隼人くんたち誘っていいかって来てるけど…」

「別に構わないわ。こっちから誘ったのだし、それに特に関わることもないでしょうから」

「じゃ、オツケーってかえすね」

「なかなかの大所帯だな」

「そう？こんなもんじゃない？」

「さいですか。皆さん元気ですね。」

「そう言えば俺はいつ手伝いにいけばいいんだ？」

「来週から小学生が加わるから月曜日でお願いできるかしら」

「わかった。イベントはいつなんだ？」

「再来週の天皇誕生日よ」

「思ったより先だな」

「余裕をもって準備は進めたいもの」

「ふーん」

文化祭の反省だろうか。まあ俺はそこまで頑張る必要は無さそうだな。

「そろそろ時間だし帰りましょうか」

「おう、じゃな」

「さようなら」

「バイバイ」

俺は一足先に部室を出て帰る。季節はすっかり冬になった。

「はー、すっかり街はクリスマススムードだな」

「そうね、まだ二週間くらい先なのに。皆楽しみなんだろうね」

休日の日の暮れる頃、陽乃と二人でぶらぶらしている。ありとあらゆるところにイルミネーションが施されており、ケーキやチキンの広告がたくさん貼られている。

「これは、夜は凄そうだな」

「イルミネーションか。最近あちこちでやるようになったわよね」

「嫌いか？」

「別に嫌いじゃないわ。ああいう人工的な美しさもありよ。でもほら、イルミネーションって日中は逆に不格好じゃない？」

「まあ、確かにな」

「こういう二面性のものって二通りあると思うの。きれいと醜いのどちらが先に来るかで、その二つってだいぶ印象が違うじゃない？ イルミネーションはどっちかなーって思ってるね」

「極端な前者だろうな。皆きれいな部分しか見ないから、いや、そもそも綺麗なものって認識しているから昼間は何も感じないんだろ、昼間の不格好さはないも同然だ」

「そうよね。そう考えるとちよつと親近感がわいてね」

「あはは、なるほど。そういうことね。葉山なら共感してくれんじゃないか？」

「あの子は絶対に認めないわよ」

「言われてみればそうだ」

「ま、今はそんなことも少なくなっただけだね」

「逆に最近はポンコツな面ばっかだもんな」

「誰のせいよ」

「さあ」

色々な店を外から眺めながら歩く。

「あーあ、今年もクリスマス来ちゃったなー」

「クリスマス嫌いなのか、珍しいな」

「毎年クリスマスにパーティーやるご最良様がいてね。そつちに駆り出されるのよ」
「うわ、ご愁傷さま」

「八幡はなんかあるの？」

「ないな、家でごろごろする予定だ」

「はー、なんか面白いことないかなー」

「そう言えば今度雪ノ下達は大所帯でディスティニー行くみたいだぞ」

「え、なにそれ」

「平塚先生がペアチケット持ってきてな。それで」

「八幡は？」

「人ごみ嫌だから断った」

「なんで断つちやうのよ！　そこは私も誘って行こうぜつていうところでしょ」

「なに、行きたいの？」

「たつた今行きたくなつた」

「なんじゃそりや」

「よし！」

陽乃は急に意気込むと携帯を取り出し、どこかに電話しだした。

「…あ、もしもし雪乃ちゃん？　あの、聞いたんだけどさ、今度ディスティニーに行くら

しいじゃん。……そうそう、それどうなってる？ ……ほんと？ それ私も八幡連れて一緒にいい？ ……ありがと！ じゃ、よろしくー」

電話を終えた陽乃は俺の方を見てにっこりと笑う。

「今度の土曜、デイスティニーだから」

「え、俺も？」

「もちろん、八幡いないとつまないじゃん」

「う、……まじで？」

「いいじゃない、どうせ暇でしょ」

「人ごみが……」

「大丈夫よ。最近たくさん私と外出してるからある程度は耐性ついたって。」

「俺チケツトないよ？」

「それがね、生徒会の会計君が要らないって言ったらしく余ってるんだって。一枚は隼人の友達が使うみたいなんだけど、もう一枚余って困ってたみたいだから八幡の分にしてもらっちゃった」

「陽乃のぶんは？」

「年パスよ」

なんでそんなにみんな年パス持ってんだよ。千葉県民だからか？ なんか持ってな

い俺が千葉嫌いみたいじゃん。

「仕方ない、勉強見てもらってるし、クリスマスは大変みたいだからその我儘に付き合つてやろうじゃないか」

「……素直じゃないんだから」

「うっせ。にしてもよく雪ノ下がオツケーしたな」

「ふふん、最近私と雪乃ちゃんは仲良しなのだ」

「ほー、それは良かったな」

「うん」

本当に嬉しそうに陽乃は答える。その笑顔は反則だろ。

俺達はそれから少し散歩をして別れた。

その後しばらくはさっきの陽乃の笑顔が頭から離れなかった。

夢の国へ

月曜の放課後、俺は生徒会の手伝いでコミュニティセンターへとやって来た。駐輪場に自転車止めを止めて施設内に入る。結構大きい施設で他の団体も使っているらしい。

「そういうえば、どこに行けばいいんだっけ」

雪ノ下に聞くの忘れてた。由比ヶ浜にでも連絡して教えてもらおうと携帯を出したところで声をかけられる。

「あれ、比企谷？」

「ん？ 折本か。なんでここに？」

この前偶然あつたばかりの折本かおりだった。どうやらひとりらしい。

「私？ 私はうちの生徒会のイベントの手伝いかなー」

「お前って海浜総合だったよな」

「うん、そうだよ」

「イベントってクリスマススイベント？」

「そう！ それそれ。もしかして比企谷も手伝い？」

「ああ、たまにでいいからって」

「へー、でもなんで？」

「生徒会長と同じ部活なんだ」

「なるほど。って、あれ？ 生徒会長の名前って」

「あいつは陽乃の妹だ」

「確かに、似てるかも」

折本は目を閉じて頭をひねりながら言う。顔でも思い出しているのか？

「で、それどこでやってんだ？」

「2階だよ、こつち」

歩き出す折本の後ろを追う。2階に上がる階段を登り、折本は少し先の部屋の前で止まると扉を開け入る。それにつづいて俺も入る。

「総武の人達はあつちに集まってるから」

「おう、サンキューな」

折本が指を指した方に目を向けると雪ノ下達がいた。近寄って声をかける。

「よう」

「やつはろー、ヒツキー」

「こんにちは、来てくれて助かるわ」

「気にすんな。で、何してんだ？」

「とりあえずもうすぐ来る小学生達に飾りつけの準備をしてもらおうと思つてその準備を……」

「なるほど。俺は何をすれば？」

「そうね、ひとまずあそこで雑務している会計君の手伝いをしてもらえるかしら」

「雑務か……」

「嫌ならこの後来る小学生の相手になるのだけれど」

「よし、雑務な、雑務超大好き」

「あなたつて人は……」

「あはは……」

苦笑いする二人を置いて会計の元に向かい、あれこれ教えてもらい仕事に取りかかる。
る。

集中して仕事をしていると、部屋が少し煩くなっていることに気付く。書類から顔をあげると10人ほどの小学生がいた。しかし特に関係ないので俺は自分の仕事に集中する。しばらく仕事をやり続けていると不意に肩を叩かれた。

「んっ」

「あの、ひ、久しぶり」

「……お前は」

「お前じゃない」

「ルミルミか」

「ルミルミ言うな、留美」

夏のキャンプで出会った少女、鶴見留美がいた。

「久しぶりだな。その、あん時は悪かったな、怖い思いさせて」

「あれ八幡が考えたんだってね。あつちの二人から聞いた」

そう言う留美は少し離れたところで作業をしている雪ノ下と由比ヶ浜に目を向ける。

「そうだ。だから責めるなら俺にしろ、他のやつは俺の案にのっただけで……」

「ありがとう」

「……へ？」

「だから、あの時はありがとう」

「何でだ？俺がやったことは誉められることじゃないぞ」

「それはそうだけど、本気で考えてくれたのは八幡が初めてで、実際にどうにかしてくれたのも八幡だったから」

「そうか……。あの後はどうなった？」

「私のはぶられることはなくなっちゃよ」

「あの時の奴等は？」

「流石にね…、もう仲良くはしてないかな」

「だよな」

「でもね、みんなそれぞれ違う子と仲良くしてるよ。私も…。だから八幡は自分を責める必要はないよ」

「いや、1つの関係を壊したのは事実だからな、そうもいかないんだよ」

「そうなんだ…」

「……なあ留美、今が楽しいか？」

「うん。ちゃんと楽しいよ」

「なら、まあ良かったかな。ありがとな」

「私も、本当にありがとう。あと朗読劇出ることになったからちゃんと見てね」

「おう。お安いご用だ。頑張れよ」

「うん」

留美は元気よく返事をする。と小学生の集団に混ざった。本当に上手くやれているようだ。それを確認し終わると仕事に戻る。

やっていった仕事が一通り済み、暇になったので雪ノ下のところへ報告に行く。

「仕事、終わったぞ」

「ありがとう。ご苦労様」

「他になんかあるか？」

「そうね、終わってそうそう悪いけど書記の子が隣の保育園に定期連絡に行くのだけけれど一緒に行ってもらえるかしら」

「わかった。んじや、行ってくるわ」

「お願いね。書記はあの子だから」

「了解」

書記ちゃんと軽く自己紹介をして部屋を出る。そのまま一回に下り施設の外に出て、後ろをついていく。保育園は本当にすぐ隣だった。

「ここです」

「怖がらせないようにしないとな」

「大丈夫ですよ」

園内に入り、保育士さんがいる部屋へとやって来た。

「あの、私は話をして来るのでこの辺で待っててください。なんかあつたら呼びますので」

「わかった」

そう言っつて書記ちゃんはノックをすると教室に入っつていった。俺は扉の横で待つ。

これ、俺必要だった？

ボーツしていると不意にズボンが引つ張られた。足元を見ると青い髪の少女がいた。俺はしゃがんで目の高さを合わせる。

「どうかしたか？」

「あのね、さーちゃんがこないの」

「そうか、さーちゃんこないか」

「うん」

「なら、もうちよつといい子にして待つてような」

「うん！」

どうしよう。みんなどこで待つてるんだ？ どつかの教室か？ そんなことを考えていると少女に裾を引つ張られた。

「なんだ？」

「きてきて！」

あどけなく駆ける少女の後を追う。たくさんの絵が張られているところで止まり、指を指す。

「あれ！ あれがさーちゃんだよ！」

「そうか、あれがさーちゃんか」

どれを指しているか全くわからないが、とりあえず反応しておく。いや、流石にこんな小さい子の相手は難しいって。さーちゃん早く来てくれ。

「あ、さーちゃん来た！」

どうやら俺の願いは届いたらしい。その子が走っていく方に目を向けると川崎がいた。

「川崎じゃん」

「なんで比企谷がこんなところにいんの？」

「生徒会の手伝いで少しな。ほー、紗希だからさーちゃんか」

「ちよ、それで呼ぶな。あ、けーちゃん、お名前」

「かわさきけーか！」

「ひきがや、はちまんだ。よろしくな、けーちゃん」

腰を落として言う。

「はちまん？ なら、はーちゃんだね。はーちゃん！」

そういうけーちゃんの頭を軽く撫でる。

「妹のお迎えもしてんのか」

「まあね、バイトに行かなくて済むから」

「そうか」

「じゃ、あたし達は帰るから。ほら、けーちゃん」

「はーちゃん、バイバイ」

「バイバイ。川崎もまたな」

「ん。またね」

帰る川崎姉妹を見送ってしばらくすると書記ちゃんが出てきた。

「お待たせしました」

「なんかあったか？」

「いえ、大丈夫そうです」

「そうか」

うん、俺いらなかったね。まあけーちゃんに会えたからよしとしよう。

この後書記ちゃんとコミュニティセンターに戻ると、もう今日は終わりと言うことで解散となった。

それから2回ほど準備に参加をした。進行具合はかなり順調らしくイベントも大丈夫そうだ。

そして土曜日、デイスティニーに行く日になる。

俺は朝早くから電車に揺られている。デイスティニー行きの電車に乗り換えると人が多くなった。こんなにみんなデイスティニー行くのかよ。これ合流できんの？

人に揉まれに揉まれながらなんとか電車を降り、改札を出る。陽乃にメールを送るとまだ電車の中らしい。俺は改札の邪魔にならなそうなところで待つことにした。

しばらくすると携帯がなった。

「もしもし」

「あ、八幡？ 今どこにいる？」

「改札で少し右に行つたところ」

「んーと、あ、見つけた」

「え、どい」

「ハハハ、ハハハ」

ぎざつと見渡すが見つからない。人が多すぎる。

「すまん、わからん」

『もー酷いなー、ここだよ』

携帯からと同時に、すぐ後ろで声が聞こえた。

「ふあ？」

思いつき振り返ると携帯を持った陽乃がいた。

「あはははっ、なに今の！ 面白い、もっかいやって！」

「やるわけないだろ」

ジト目で陽乃を睨む。

「もー、そんな怒らない怒らない」

「別に怒っちゃいねーよ」

「びつくりした？」

「それなりに。覚えとけよ」

「はいはい。ほら、早く行って並ぶよ」

そう言つて陽乃に手を掴まれひっぱられる。

「あれ、集合とかしねーの？」

「中で合流よ」

「俺、チケツト受け取ってないんだけど」

「ふふん、既に雪乃ちゃんから預かっています」

「流石」

「でしょ」

陽乃と二人で長蛇の列に並ぶ。

「えぐい量の人だな」

「こんなもんよ。皆夢を見にね」

「なるほど、こんだけ現実から離れたい人がいると」

「その言い方はやめようよ」

「それもそうだな。で、1ついいか？」

「なに？」

「この手、いつまでこうしてるんだ？」

繋がったままの手を少しだけ上げて聞く。

「……いつまでがいい？」

「え、まあどうしてもいいんだが」

「なら、しばらくこのまま、ね」

微笑みながら陽乃はそう言った。ん、なんか、やばい。言葉にできねえ。手汗大丈夫かな。

しばらくして陽乃の顔に目を向けると、遠くを見て難しい顔をしていた。
「陽乃、どうかしたか？」

「え？ あ、なんでもないよ」

咄嗟に貼り付けたような笑みを浮かべて言う。なんか様子がおかしくないか？ 陽乃がこの笑い方を俺にすることはあの日からなかった。

「あのな、今更それで俺を誤魔化せるわけないだろ」

「別にそうじゃないよ。でも八幡を家のことに巻き込むのは…」

「はあ、陽乃」

「なに？」

陽乃の目を見る。

「もうな、お前に降りかかる災難は俺に降りかかった災難のようなもんなんだ。だから思いつきり俺を巻き込んでくれ。俺は修学旅行からお前にたくさん助けられたからな。今度は俺の番だ」

陽乃は少しの間目を閉じ、ゆっくりと口を開く。

「あの、この前ね、お母さんに呼ばれて、もう20になったから本格的にお見合いしなさいって言われて。私は、そんなことしたくない」

「今まではそういうことなかったのか？」

「あつたことはあつたわ。でも今回は結構本気っぽくて」

「なるほど。それいつあるんだ？」

「いや、まだ決まってるわ。しなさいって言われただけだから」

「なら、まだ少しは余裕がありそうだな」

「何かするつもり？」

「んー、まあ、お前の母さんとタイマンでもはるか」

「正気!？」

「他人の家事情に足突っ込むんだ。そのくらいの覚悟はないとな」

「えー、大丈夫？」

「それは実際やってみないと」

「あんまりおすすめできないんだけど」

「まあ、最終手段だから。もつといい手があったらそつちにすればいい」

「そう。その、ありがとね。楽になったかも」

「別に、それに……」

「それに？」

「いや、なんでもない」

「ま、おかげで今日は楽しめそう！」

「そうか」

陽乃はさつきと違っていつもの笑顔になる。それに俺を笑い返す。

お前が見合いでするのがなんか嫌だ、なんてまだ言えないだろ。

そしてそれぞれが動き出す

受付を終えた俺たちは園内へと入る。あ、流石にもう手は離れたから。空気は完璧なクリクマスムードで、周囲の人達はどこか浮かれぎみだ。

「集合ってどこなんだ？」

「えっとね、城の前の広場よ」

「遠くね？」

「入り口付近は人が多いからって」

「どこも似たようなものだと思うがな」

「でも入り口よりはましじゃない？」

「そうなのか？ ま、ひとまず進むか」

俺達はまず多くの店が並ぶスペースに入る。店からは耳やら被り物を身につけた人がバンバン出てくる。

「すげーな」

「つける？」

「いや、無理無理。まじで、やめて」

「そんな嫌がらなくても」

「じゃ、ちよつと想像してみ？」

「……ぷっ」

「おい……」

「やばい、なんかリアルで見たくなってきた」

「やんないぞ」

「試しにさ、買わなくていいから。行ってみよう！」

「ちよ、やめ……」

ドナドナされて店内に連れてこられる。人ごみを何とか進み、目的のものの前へとくる。

「これを一回つけるだけでいいから」

されるがまま俺の頭に例の耳がつけられる。

「これは、言葉にできないわ」

陽乃は素晴らしいながら写メを撮りまくる。おう、もうどうにでもしてくれ。満足したのか陽乃は商品を元に戻し、店を出る。

「面白かったー」

「つやつやしてますね」

「まーね」

俺の嫌味になんでもないように陽乃は答える。店が立ち並ぶスペースを抜けると広間に出た。正面には例の城だ。俺達はその広間の外をぐるっとまわって城の前まで来た。人が多くて思うようには進めなかったが、ゆっくりと見てまわるにはちようどよかった。

「この辺にいるのか？」

「たぶん。あ、ほら、雪乃ちゃん達だ」

少し離れたところに雪ノ下と由比ヶ浜、葉山に三浦、戸部、海老名さんがいるのが見える。

「あれに混ざるのか…」

「いいじゃない八幡は、皆と知ったなかでしょ。私は3人ほど面識ないわよ」

「でもお前そういうの得意だろ」

「うん。実際なんの問題もない」

「うるさそうだなー、戸部とか。だってもう既にはしゃいでね？　と思ったけど陽乃も

さつき騒いだな。夢の国すげえ」

「何言ってるの…。早く行くわよ」

「へいへい」

陽乃の横に並んで集団に近づくと、由比ヶ浜が俺達に気付く。

「あ、ヒツキー達来た！ やっはろー」

由比ヶ浜の声に反応し他の5人がこっちを向く。

「すまん、待たせたな」

「ごめんね、雪乃ちゃん」

「大丈夫よ。私達もついさつきだったから」

「そうそう。問題ないよ！」

「そうか」

軽く同じ部活の二人と挨拶をかわす。

「ヒキガヤ君、うえーい」

戸部、それは挨拶なのか？

「よう、相変わらず元気だな」

「そりゃー、こんなところ来たら元気になるしかないっしょ」

「ヒキオ、おはよう」

「おはよう」

「おう、待たせてすまないな」

戸部に続き三浦と海老名さんと少し言葉をかわして離れる。

「八幡のこういうの見るの新鮮ね」

「どうよ、最近コミユ力が上がり始めたんだ」

「ふふ、私のおかげね」

「だろうな」

「私、雪乃ちゃんと戯れてくる」

「いつてらっしゃい。ほどほどにしとけよ。あいつすぐ活動限界になるぞ」

「わかつてるよー」

陽乃は雪ノ下の方に駆けていった。それと同時に俺の肩が叩かれる。

「おう、葉山か」

「陽乃さんの話本当だったんだな。初めて聞いたときは耳を疑ったよ」

「ひでえな」

「それにああしている二人もすごい久しぶりに見た」

そう言つて葉山は少し離れたところで遊んでいる雪ノ下姉妹を見る。

「昔はあんなだったのか？」

「だいぶね、小学生の真ん中くらいまでかな」

「へー」

「君は陽乃さんさえも変えてしまふんだね」

「それは違うぞ。それに陽乃は普通な奴だ。今じゃ怖がつていた昔が謎なくらい」
「へ、へー。そうなのかい？」

「まあ。お前もよく見ればわかるんじゃない？」

「そうだといいな」

葉山はそういうと苦笑いした。こいつも難しい性格してんな。もう少し肩の力抜いて気楽にやればいいのに。

「あの、そろそろどこか行きましょう。時間がもったいないわ」

「そだね。どうしようっか」

女子が集まって会議をします。あいつらに任せた方がそりやいいよな。遠巻きにそれを眺めていると戸部が話しかけてきた。

「ヒキガヤ君」

「どうした。いつになく真面目な顔だな」

いつもの軽いノリではなく落ち着いた調子だ。大事な話なのだろうか。

「実は、今回こそしっかり海老名さんに気持ちを伝えようと思うんだ」

「え、まじで」

「まじで。超本気。この前はヒキガヤ君になんとかしてもらったけど、あれからたくさん考えて、でもやっぱどんな返答でもいいから伝えたいと思って」

「そうか」

「で、前回の反省を踏まえて今回はちゃんと優美子にも相談したんだけど、背中押してくれたんよ。隼人君にもちゃんと話した」

「おお、かなり本気だな。俺からは頑張れとしか言えないが…」

「充分っしょ。ヒキガヤ君にはお世話になったからちゃんと報告しようと思って」

「ありがとな。頑張れ」

戸部との話が終ったタイミングで女子達の話し合いも終わったようだ。

「最初はスペマンに行くことになったわ。行きましよう」

雪ノ下の言葉に皆で移動を開始する。俺の隣には知らないうちに陽乃がいた。

「なんの話してたの？」

「ほら、修学旅行での話したろ？」

「うん」

「今日またやるって」

「へー、大丈夫なの？」

「話もしてみたいだし大丈夫だろ。今回は完全に見守るだけだ」

「そうなんだ。戸部くん積極的ね」

「まあ、突っ走れるのがあいつなんだろ」

俺達はだらだとどうでもいいことを話ながら目的のアトラクションまでやって来る。

「そういや今から長時間の耐久レースだよな」

「そうね。どうかした？」

「うーん、なんか食い物でも買ってこようかなと。軽い菓子とかあるだろ？」

「そうだね。買いに行こっか」

そういうと陽乃は他の皆のところ注文を聴きに行った。しばらくして戻ってくる。

「なんて？」

「皆チユロスだって」

「あー、あの長いやつか」

「そうそう」

陽乃と並んで屋台に向かう。屋台でいいんだよね？ なんかもっといい感じの言い方があったりするの？ 屋台に到着すると、ここにもだいぶ人が並んでいるので列の後ろにつく。

「陽乃、あのさ」

「なに？」

「すげえ、ぶち壊しなこと言うけどさ」

「それわかってて言っちゃやうのね」

「夢の国、なかなかの値段してるよな」

「ほんとにぶち壊しね」

「いや、まあこんなの運営するのに膨大な費用がかかるのはわかるが、こういう所作らうって時点でなんか感心しちゃうよな」

「珍しく何言いたいか伝わってこないんだけど」

「すまん、なんだかんだ浮かれてるのかもしれん。柄にもなく」

「わかりにくいわよ！ 戸部くん見習えば？」

「流石に俺があれをやるのは…」

「少しよ、少し」

そんなことを話しているうちに順が回ってくる。人数分のチュロスを買ひ、二人で手分けして持つて戻る。頼まれたものをそれぞれに渡し、俺達は列の後ろに並ぶ。あ、乗るのはあいつ等とは別になった。

「陽乃はこういうのは…、大丈夫だよな。ダメなイメージじゃないわ」

「なにそれ失礼ね。まあバリバリ大丈夫なんだけど。…もしかして八幡はダメな感じ？」

「んなわけないだろ。余裕だよ、たぶん」

「たぶんって。ま、乗ればわかるか」

時は経って俺たちの番、乗り込んでアトラクションを楽しむ。楽しんだよ、楽しめたんだよ、たぶん。

「八幡大丈夫？」

はい、強がりしました。ダメでしたよ。グロッキーです。情けない。

「少し、休ませて…」

「全然大丈夫でないじゃない。こんな八幡も珍しいからいいけどね」

そう言っって携帯を取り出し写真を撮りだす。

「なにとっってんの…」

「記録よ。面白いことは一通り」

「えー」

「あ、はい、これ水」

「助かる」

俺はそれを受け取って朦朧とする中、口をつける。そして飲んだ後に違和感を感じた。あれ、今蓋開けたとき全然抵抗感なかったけど。ボトルを見ると明らかに俺が飲んだ量よりも減っている。

「え、おま、これ」

「なに？」

「何って、飲みさしじや」

「ごめん。嫌だったよね」

「いや、別に嫌って訳じゃないが」

あれ、意識したらなんか熱くなってきた。

「ないが？」

「お前がいいのかよ」

「わたし？ わたしは全然大丈夫よ、八幡だし。だから渡したんだけど」

「そ、そうかよ」

陽乃結構なこといつてるけど…。俺も言葉にできねーよ。

何てことを思っていると再びシャッター音が響く。陽乃を見るとにんまり笑って携帯を構えていた。

「何してんだ？」

「八幡の赤面を記録」

「そりゃ、赤面くらいするだろうよ。逆になんでお前平気なの…」

「だって嘘だもん」

「へ？」

意味のわからない発言に変な声が漏れる。

「飲みさしつての、嘘」

「え、でも蓋も量も…」

「前もつて開けて減らしといた」

「……なんだと」

「八幡のいいリアクションみれるかと思って。結果ばつちりだった」

「はあー、なんだよそれ、完全にやられたわ。てか手込めすぎだろ」

「だって最近してやられてばつかだったんだもん。ここらでかいの返しとこうかと」

「……倍返し覚悟しとけよ」

「えー、今やつと返したばかりだよ」

「陽乃、終わりになき勝負つてのはそんなもんだ」

「なにそれ。なら、やられる前にまたやろう」

「次は効かんぞ」

「はあ、俺達何やってんだ？ あほか。でもこれ楽しいんだよな。」

「そーいや、他のやつらは？」

「もうお昼の時間だし店少しでもすいてそうなところ探しにいつてる」

携帯をつけて時間を確認すると一時を回っていた。結構待ってたんだな。俺は携帯

を胸ポケットにしまう。

「なら、俺達も早いところ合流するか」

「もう大丈夫なの？」

「さっきので吹っ飛んだよ」

「…てへっ」

「あーはい、可愛い可愛い」

「軽いわね。わたしのこれ貴重よ」

「そうなのか。ま、これでいつでも見れるが」

そう言って俺は携帯を取り出す。画面は録画モードになっている。ぱぱつと保存。

「え、なにそれ」

「え？ 録画だけど？」

「なんで…」

「なんかあるかなーと思って、いいの釣れた」

「ちよ、まじで？ カウンターパンチ早くない？」

「流石だろ。よし、編集終わり。陽乃のあれだけ切り取っておいたから」

「えー、け、消してよ。動画は恥ずかしさのレベルが違うって」

「やだね。しばらく経ってからまた見せてやるよ」

「わたしの優位な立場はほんと一瞬よね。くつ、ならわたしはアルバムでも作ろう」
「え、そんなに写真あんのかよ」

「ふふっ、秘密よ」

それからしばらく二人して騒いでしまった。途中で冷静になり二人一緒に首を捻って苦笑いした後、雪ノ下達のもとへ行くことにした。陽乃が連絡を取り合流する。

「あなた達、なんでそんなに疲弊してるのよ」

「ちよつとな…」

「騒ぎすぎちやつたかな」

皆を待たせたことと店探しの謝罪と礼をいって昼食を済ませます。それから色々なところをまわって買い物をする事になった。俺は小町へのお土産でも買おうかと物色している肩を叩かれる。

「ちよつといいかな？」

「ん、海老名さんか」

「話があるんだけど…」

「はあ」

「こじやなんだから」

そう言つて店からでる。といつてもあちらこちらに人が溢れているので静かなところ

ろはあまりない。海老名さんは皆から離れたいのか店から見えない建物の陰に來た。建物の角のところだ。

「あのさ、戸部つちのことなんだけどさ」

「ああ、それがどうかしたか？」

「その、お願いがあるんだけど、また…」

「海老名、話す相手が違うでしょ」

突然の聲に海老名さんの聲は遮られる。振り向くとそこには三浦がいた。

「優美子…」

「海老名、なんでまたヒキオに全部投げるし」

「だってまた戸部つちが…」

「ならヒキオじゃなくてまずあーし達じゃない？」

「…でも、私達じゃどうにも」

「そういう問題じゃないでしょ。誰ができるかとかじゃなくて、あーし達でなんとかしないといけないんじゃない」

縮こまる海老名さんに三浦がくっついてかかる。俺は、そつとフェイドアウトした方がいいのかな？ でも動けないよね。

「あーしさ、あんたのそういうところ大っ嫌いなよ。自分からは何も言わない。ぼか

してばっかり。嫌なら嫌って言えばいい、踏み込まれなくては踏み込むって言えばいいじゃない。なんでそれをしない？」

「…そんなことしたら壊れちゃうじゃん。人の繋がりがなんて脆いんだよ。些細なことが原因ですぐなくなる。だから、できるわけない」

「何言ってるし、あんたは一人になるのが嫌なだけでしょ」

「…え？」

「一人にならないためにあーし達といるんですよ。自分に都合のいいグループを欲してるだけ。今のあーし達はただ毎日馬鹿みたいに騒いでいるだけで、何か綻びが生まれれば誰かが濁してなあなあで済ませちゃう。そんな楽チンなもの」

「……」

「あーしはさ、もつとあんたに踏み込みたい。こんな上っ面じゃなくて、もつと互いの意思表示がちゃんとできるような関係になりたい。なのに、あんたはいつも一線を引いてくる。隼人だつてそう、肝心なことは何も言わないで、出来もしないのに自分で全部やろうとする。近づくの、あーしじゃさ、やつぱダメなん？」

三浦は海老名の正面に来る。三浦が背を向けたので俺はこの場から退場することにした。そつと下がって三浦達から見えない位置に移動する。ちょうど建物の角を挟む形だ。ふと、近くに人がいることに気付く。

「や、やあ」

「…葉山か。聞いてたのか？」

「偶然にも…」

そんな俺達をよそにむこうの二人は話を続ける。

「別にそういうわけじゃ」

「…じゃあなんで」

「怖いんだよ。たまらなく怖い。踏み込まれるのも、失うのも。私は今のメンバーは好きだよ。だから捨てるに捨てられなかった。失うのが何よりも嫌だった。だから…」

「なら約束するし。あーしは逃げずにあんたと向き合い続ける。あんたが逃げそうになつたら掴んで離さない。もし逃げても追つかける。戸部だつてそれくらいの覚悟を持つてる。あーし達を信じるし。ちゃんと返事して、思つてること言つてきな」

「本当に？」

「嘘じゃない。あーし達もいい加減歩き出すべきでしょ。それぞれが欲しいものを手にいれるためにさ」

「…：わかった。優美子、ありがと…」

「え！ちよ、泣くなし。もー、ほら。ハンカチ」

どうやら決着ついたようだ。俺は隣の葉山に目を向ける。

「だつてよ」

「……」

葉山は難しい顔をしてたたずんでいる。

「案外、皆の葉山隼人をただの葉山隼人として見てくれるやつは近くにいたのかもな」
俺はそう残して去ることにした。なんかかっこつけみたいで恥ずかしい。

「君は……」

後ろから葉山の声がしたので振り返る。

「君は本当に……、誰でも変えてしまうんだな」

「おい、だからそれは違うっていつてるだろ」

「どうしてだい？」

「俺が変えたんじゃない。互いに影響しあつて変わるんだ。俺は奉仕部に入つて、陽乃に会つて、お前らと関わつて、間違いなく変化した。俺も昔は変わることは逃げだと思つていたし、変わらない方がいいと思つてた」

「……今は違うのか？」

「別に変わるのが良いつて話じゃない。もつと前提的なもの、変化つてのは必然なんだよ。俺らの意思に関係なく、人と関わつたり何かを経験したりすれば俺達は変わる。だから俺がどうこうつて話じゃないんだよ」

「……まさかボツチを名乗る君からそんなことを聞かされるなんてね」

「うるせえよ」

「俺も……、しつかりしなきやな」

「いや、お前はもつと力を抜け。なんでも背負いすぎだ」

「まったく君は……、君だけは好きになりたくないな」

「大歓迎だね。皆に含まれないのが俺だからな。皆の葉山くんに好かれるなんてごめん
だ」

俺達は顔を合わせて笑う。俺がこいつに直接的な期待をすることはない。なんとつてなかなかのヘタレだからな、俺に似て。

「あははは、やっぱり君なら心置きなく嫌いだつて言えるよ」

「くくつ、勝手にしろ。せいぜい頑張れ、ヘタレさん」

「君こそ頑張りなよ。ヘタレ君」

俺達は今度こそ別れて、俺は陽乃のところに行くことにした。店に戻って陽乃と小町の土産を探して買った。皆もそれぞれの用が終つたらしく、他のアトラクションに移動する。

そうして日は暮れ、パレードの時間がやって来る。戸部は気合いをいれている。

そしてもう一人、密かに決心を固めている人がいた。

彼は踏み出せない

パレードが終盤に近づき戸部は海老名を呼び出す。人混みから離れたところで向き合い、戸部は両手で頬を叩いて気合いを入れ直す。

「海老名さんに話があります」

「うん」

「俺、海老名さんのことが好きです。付き合ってください」

しばしの沈黙が流れる。遠くでパレードの賑やかな音が聞こえる。ゆつくりと海老名は口を開く。

「えっと、ありがとう。でもごめん、私自身がまだそういうのがよくわかんなくて、覚悟も全然できてないし…。上手く言葉に出来ないけど、別に戸部つちのことが嫌いってわけじゃなくて…、えっと」

「そんなに急がなくても大丈夫。俺はちゃんと返事貰えて今は充分だから…、諦めはしないけど」

「うん。私もちゃんと、皆と向き合えるように頑張るから」

「そっか。俺はいつまでも待つから。それくらい本気」

「うん」

「じゃ、ちゃんと答えてくれてありがとう。またこれからも、よろしく」

「こつちこそ、ありがとう」

戸部はその場を離れる。それを見計らって海老名のもとに三浦と由比ヶ浜が近づく。

「ほら、大丈夫だったっしょ」

「姫菜、頑張ったね」

「うん、なんとかなった」

「にしても真面目な戸部ってなんかむずむずする」

「あはは、でも少し見直したかな」

「ま、これからどうするかはちゃんと考えて好きにするといいし」

「うん、ありがとう」

「で、結衣は今から？」

「うん」

「え、結衣何かするの？」

「戸部と同じく」

「比企谷君に？」

「うん。まあ結果は見えてるけど、ちゃんと区切りっていうか、すつきりさせたくて」

「そうなんだ。えっと、頑張ってる」

「ありがとう」

「ま、終わった後はあーし達が慰めてあげるし、当たって砕けてきな」

「あはは、ゆきのんと同じようなこと言ってる。じゃあ、いつてくるから」

由比ヶ浜はその場を離れて、比企谷を呼び出した所へ向かう。残った二人はその背中を見送った。それと入れ違いで近づく人が一人。

「優美子」

「隼人じゃん。どうしたん？」

「その、話しておきたいことがあるんだ」

「そ。わかったし」

「じゃ、私は外すね」

「助かるよ」

「終わったら連絡するし」

海老名は二人から離れる。

「で、話ってる？」

「実はさつき優美子と姫菜が話しているのを偶然聞いて……」

「え、あれ聞いてたん？」

「ごめん。でも、嬉しかった。俺も踏み出そうと思った。優美子に俺を知って欲しいって思ったから、だから俺の昔の話を聞いて欲しい」

「それって雪ノ下さんとのこと？」

「そうなるかな」

「わかった。ひとまずあのベンチで聞くから」

「ありがとう」

二人はベンチに腰かける。葉山は少しずつ、過去を打ち明ける。

「俺と雪ノ下さんは家の繋がりもあって、昔は仲が良かったんだ。普通の幼馴染みだった。でも小学高学年の時から、雪ノ下さんがいじめられた。そして、いよいよ雪ノ下さんは弱りだしたんだ。その当時、親は忙しくて全然相談できなかったみたいで」

「そこで残った最後の味方が、俺だったんだ。俺は雪ノ下さんを助けたかった。けど、どうしていいかわからなかった。そして考えた末、俺は皆で話し合おうって、お互いに謝り合えば収まるんじゃないかって思ったんだ。それで実際にやった」

「話し合いの間は穏やかだった。でも終わって俺がいなくなったらそうじゃなかったらしい。いじめは逆に陰湿にエスカレートしてしまった。俺は訳がわからなかった。皆で仲良くできるって本気で思っていた」

「それからなんだ。俺が皆仲良くって、話せば皆わかりあえるんだってことに執着し始

めたのは。認められなかった、あの時の失敗も、皆仲良く出来ないってことも」

葉山は一息ついて続ける。三浦は黙ったまま耳を傾けていた。

「誤魔化し続けていて、そしてあいつに、比企谷にあった。あいつといるといつも突きつけられた。俺の逃げも、理想の馬鹿馬鹿しさも。だからあいつが嫌いだったんだ」

「俺は決着をつけたい。俺の過去にも、失敗にも。とらわれたままじゃ何処にも進めないから。皆と向き合うことも出来ないから」

葉山は言い終える。それを確認して三浦は口を開く。

「隼人の過去も、抱えてたものもわかった。で、どうやって決着をつけるつもりなん？」
「今更だけど、雪ノ下さんに謝る。今までのことを全部。許してはもらえないと思うけどね」

「隼人は許して貰いたくて謝るの？」

「いや、俺の中で終止符を打つためだ。自分の為に謝ってくる。それで罪を認めて、それをしつかり背負って歩いていく」

「そっか。ならいいじゃない？ 隼人の思うようにするといいよ。ただ、これだけは覚えておくし」

「なにを？」

三浦は葉山の目をみて笑って言う。

「隼人の周りには、一緒に背負ってくれる人達がちゃんといるってこと」

葉山は少し驚いた表情をするが、すぐに顔を綻ばせる。

「あはは、それに今まで気づかなかつたなんて、俺は馬鹿だな」

「ほんとだし。じゃ、話は終わり？」

「ああ。ありがとう」

「気にすんなし。あーしは結衣のところにいかなきゃだから。たぶん、帰りはバラバラになると思うから」

「わかった。俺は戸部と帰るよ」

二人は軽く別れの挨拶をして別々に歩いていく。

時は少し戻ってパレードが終った頃。

「相変わらずすげーな」

「ほんとよね。これ見るためについて言っても過言じゃない」

俺と陽乃はパレードの余韻に浸りながら話をしていた。すると、俺の携帯が震えた。取り出してメールをみる。

「どうしたの？」

「なんか由比ヶ浜が来てくれって」

「そう」

「…ちよつと行つてくるわ」

「あの、八幡…」

「なんだ？」

「…：ちゃんと答えてあげなよ」

「わかつてる。じゃ、少し待つててくれ」

「うん」

俺は陽乃と別れて呼び出された場所に向かう。途中でぼつたり戸部にあつた。

「うお、戸部じゃん。もう終つたのか？」

「ヒキガヤ君、ぼつちり二つの意味で終つたべ」

「そうか」

「でも諦めないつて言つたからやつぱ終わつてないわ。待つつて伝えてきた」

「お疲れさん。待てる男は格好いいぜ」

「まじで？」

「知らん。適当」

「えー、なにそれー。それでヒキガヤ君はどっか行く感じ?」

「ちよつとな」

「そつか。じゃまた後で」

「おう」

戸部はそう言つて去つていった。悪い方には動かなかつたみたいだな。どいつもこいつもすげえよ。俺は由比ヶ浜がいるであろう場所に急ぐ。約束の場所につくと先に由比ヶ浜はいて、ちようどひとつのランプの光に照らされていた。

「悪い、遅くなつた」

「全然大丈夫だよ」

「で、話つて?」

「あのさ、夏祭りの帰りのこと覚えてる?」

「ああ、覚えてる」

「あの時言えなかつたこと、今日言わせて」

「わかつた」

真面目な調子で言う由比ヶ浜にしつかりと返答する。少しの間の後、浅く頭を下げた由比ヶ浜が告げる。

「私は、ヒツキーが好き。ずっと前から好きです。付き合つて…、ください…」

最後は弱々しくなりながらも言い切る。下を向いているから顔は見えないが、声が震えていた。周囲の音がすべて遠い。俺は一つ息を吐いて答える。

「すまん、お前の気持ちには応えられない」

俺の言葉を聞いて由比ヶ浜は顔をあげる。目元が光っていた。

「あはは、やっぱりフラれちゃった。でもありがとう、今回はちゃんと聞いてくれて」

「まあ、俺も逃げるわけにはいかないからな」

「んー、やっぱり陽乃さんには勝てなかつたや」

「……なんで陽乃」

「だってヒツキーの中には、陽乃さんへの特別な何かがあるんでしょ？」

「……そうなのかな。なんでそう言えるんだ？」

「あの時、初めてヒツキーと陽乃さんの関係を聞いたとき、ゆきのんがさ、ちよつと酷い

こと言つて陽乃さんに怒られたの覚えてる？」

「ああ、確かにあつたな」

「その時のヒツキーの顔みたら、なんかわかっちゃつてさ。あー、もうこの間には入れな

いんだなーつて」

「……………」

「でもね、やっぱり、この気持ちはさ…、誤魔化せなかつたから…、今日で終わりに……」

しようって……思っ……て……」

由比ヶ浜の目からは涙が溢れ出す。俺は声を出すことができなかつた。

「だから」

由比ヶ浜はそういうと目元を手で拭つて笑顔になる。

「今日は本当にありがとう。ヒツキーを好きになれて、よかつた。これからは、友達として……、やっついていけるかな？」

「……ああ。大丈夫だ。こんな俺を、好きになつてくれてありがとう。じゃあ、俺は行くな」

「うん」

由比ヶ浜は最後に精一杯笑つて見せた。俺はそれを目に焼き付ける。きつとこの姿は、忘れてはならないのだろう。俺は背を向けてその場を離れる。後ろは振り向かなかつた。

比企谷が去つた後、由比ヶ浜は力が抜けたようにしやがみこむ。そこに雪ノ下が現れる。

「やっぱり、ダメだった……」

縮こまっているためくぐもった声になる。それを聞いた雪ノ下は静かに由比ヶ浜の頭に手をのせて、そつと撫でる。

「ダメだったよう……。頑張つて……。強がったけど……。大丈夫だったかなあ」

由比ヶ浜は嗚咽を漏らし始める。

「ええ、大丈夫だったわよ。ちゃんと最後まで。だから今くらいは、ね」

雪ノ下は由比ヶ浜をそつと抱き締める。

「うう……。こんな……。ずつと……。好きだったのに……」

「……そう」

「悔しいよ……」

「……そう」

「全然、気持ちも……。捨てられてない……」

「……そう」

泣き続ける由比ヶ浜を、雪ノ下は言うこと一つ一つに頷きながら抱き締めて、背中を擦り続けた。

しばらくして由比ヶ浜が落ち着いてきだした頃、三浦と海老名がやって来た。

「もう、大丈夫かしら？」

「うん。ゆきのん、ありがとう」

「三浦さんと海老名さんも来たわよ」

由比ヶ浜は顔を上げゆつくりと立ち上がる。

「わ、結衣目真つ赤。かなり泣いたんだね」

「よく頑張ったし」

「うん」

それから三人は泣きすぎて酸欠気味の由比ヶ浜を介抱しながらランドを後にした。電車に乗る頃には由比ヶ浜も回復し、四人で談笑しながら電車に揺られる。時々話の流れで由比ヶ浜がぶり返し、泣きそうになるのを皆でなだめたり、必死に我慢する由比ヶ浜を笑ったり、なんだかんだ賑やかな終わりを迎えるのだった。

由比ヶ浜と別れた後、俺はずっと由比ヶ浜に言われたことが頭から離れなかった。陽乃に持っている特別な何か。俺が陽乃の見合いをよく思わない理由。陽乃といるとき
の感情。

俺の中で陽乃の存在が大きいのは明らかだ。もちろん特別でもある。陽乃とはずつ

と一緒にいたいし、いてほしい。これが、本気で人を好きになるってことなのだろうか。中学のは全部暴走だった。寂しさを拭おうと無理した結果だ。だから経験がないため確信をなかなか持てない。

しばらくそんなことを考える。第一、何故俺は由比ヶ浜の告白を断った？ 俺の性格とあいつの優しさは相性が悪いってのもある。でも一番の理由は、ただ単純に俺と並んで立つってるって想像ができなかったから。じゃあ、俺の横に並ぶなら…、その想像が出来るのは……。

ああ…、陽乃しか、でてこねーよ。しかもあいつの横に俺じゃない誰かがいるのも嫌だ……。となると、

俺は、陽乃が、好きなんだな…。

胸のつかえがとれる感じがした。すげえな、戸部も由比ヶ浜も。こっから踏み出したのかよ。すげえ怖いじゃん。なに俺偉そうなこといってたんだろ…。

あいつらの覚悟のでかさを初めて実感した。それと同時に、それほどの覚悟ができていない自分にも気付く。つくづく情けない。どうしても失ったときがちらつく。陽乃と腹割って話したときなんて比べ物になんねーよ。

「八幡？」

「わっ！ は、陽乃か」

目の前に陽乃がいた。なんかまともに顔が見れない。

「どうしたの？ 難しい顔して」

「べ、別になんでもない、こともないが…、まだ待つてくれ」

「まあ、そういうなら聞かないでおくけど」

「助かる」

む、無理だ。今すぐなんてちよつと厳しすぎる。まじ、だせえ。

「じゃ、わたし達は帰ろつか。皆それぞれなにかしらあつたらしく各々で帰るつて雪乃ちゃんからメール来たから」

「そうか。まあ、確かに今日は色々盛りだくさんだったな」

俺達はまだまだ賑やかな人混みを残してランドを後にする。結局、俺は何も出来ない

まま陽乃と別れた。

駅からの帰り道、冷たい空気がずっと俺の顔を刺し続けた。

親の心子知らず、逆もまた然り

生徒会のクリスマススイベントは無事、大成功で幕を下ろし、外部からも学校からも色々な賛辞が送られた。留美も演劇をやり遂げ、友達の輪の中で笑顔を咲かしていた。

そしてクリスマスは過ぎ、世間は年末年始に向けて慌ただしくなる。小町も受験の最後の追い込みで部屋に缶詰だ。俺はというと、学校が終わり冬休みに入ってからずっと悶々とした日々を過ごしていた。あれから陽乃とは都合があわなくて会っていない。今はあまり会いたくないと思いつつも素直に会いたい気持ちもあり、正直自分の中がぐちゃぐちゃで収まりがつかない。

俺は適当に着込み小町に一声かけてから家を出て、とりあえず街へ向かう。外に出れば少しはすつきりするかと思つたからだ。しかし駅に近づくにつれ、いつもより人が多いことに気付く。学生達は皆休みだからだろうか。寒いし人が多いしで少しばかり外出したことを後悔する。

大きなショッピングセンターに入つて本屋に行く。一人で来たら本屋くらいしか行くところがない。ここ最近はずつと陽乃が一緒だったから一人でこうしていてもいまいち面白くない。ついこの間までポッチだったのにな。近いところにある本を手

とつてパラパラと目を通していくが、頭へすらすら入ってこない。前から気になつていた本も同様だった。

俺は諦めて本屋を出る。しかし行きたい所なんてない。やっぱ帰ろうかな。でも帰つても落ち着けないんだよね。あれこれどうしようか考えていると、不意に声をかけられた。

「もしもし」

「え、はい……」

話しかけてきた人を見て固まる。全く知らない人だった。しかしそれだけじゃない。着ている服が着物だ。更に超がつくほどのきれいな女性だ。固まったままの俺にその人は言う。

「比企谷八幡さんで間違いないですか？」

「はい、そうですが……」

女性は俺の名前を口にする。俺は混乱の度合いが増す。何故俺の名前を知っているんだ……。の前にどちら様だ……。

「あ、申し遅れました。私雪ノ下月乃と申します。陽乃と雪乃の母親です」

「え、あ、はい。比企谷八幡です。娘さん達とは仲良くさせていただいてます」

は？ 陽乃の母さん？ なんで？ まじで意味わかんねーよ。でも言われてみれば

似てる。あいつらにこの人の面影がある。それだけを瞬時に理解できた。

「あの、少しお時間いただけるかしら。お話がしたくて」

「はい、全然大丈夫です。ちやうど暇していたので」

「ありがとう。助かるわ」

「いえ、全然」

は、話がある?! え、俺もう死ぬんじやね? 陽乃が怖いつて言つてたよな。陽乃がらみの話か? もしかしてもう会うなかだろうか。それは、嫌だ。絶対に嫌だ。ここで負けたらもう終わりだな。まさかこんな形で覚悟を強いられるとは思つてなかった。怖いなんて言つてられない。

「ではついてきてくれるかしら」

「はい……」

俺は前を歩く雪ノ下母の後ろをついていく。しばらくするとモールの出入り口に来た。

「外、出るんですか」

「ええ、ここらは人が多いし。静な所で話したいじゃない」

「そ、そうですね」

そのまま外に出て高そうな、いや絶対にくそ高い車に乗せられる。キョドリつばなし

なのは言うまでもない。車は動き出す。

「あの、どこに向かつているのでしょうか」

「あ、まだ言つてなかつたわね。私の行きつけの喫茶店よ。個室があつてとてもくつろげるの」

「そうなんですか」

個室あるんだつて。まあ家つてわけじゃないからまだ大丈夫か？ いやもう大丈夫の基準がわかんなくなつてきた。そわそわびくびくしちやうのは仕方ないよね。

そんな俺をよそに車はゆつくりと停まる。ドアが勝手に開き、と思つたら外から運転手さんが開けてた。雪ノ下母の後に俺も降りる。運転手さんに軽く礼を言う雪ノ下母につづいてお辞儀をして、二人で店に入る。オーナーっぽい人が出てくると奥の個室に通される。

雪ノ下母が先に席につき、俺に正面に座るように促す。俺はそれに従つて静かに座つた。

「比企谷さんは紅茶飲めますか？」

「はい、飲めます」

「なら大丈夫ね。さつき私がいつも頼むものを二人分頼んでしまつたから。先に確認しなくてはいけなかつたのにごめんなさいね」

「いえ、全然」

紅茶は飲めますが、それが喉を通るかは定かじやないですけど。

「では、いきなり本題なのだけれど」

「はい」

「比企谷さんは陽乃ととても親しくしてくれているそうで…」

「はい」

「その、そういう関係だったりするのかしら」

「……はい？」

「だから、お付き合いですか？ 彼氏彼女？ のような関係よ」

「……………は？」

ま、まじで？ いきなりそういう聞き方してくんの？

「いえ、別にそういった関係では…」

「あら、違うの？」

「まあ、まだちよつと…」

「…まだ？」

「あ」

最近ずっとその事ばかり考えてたからポロっと出ちゃった。俺は慌てて誤魔化す為

に話の方向を変える。

「と、とりあえず、なんでそんなことを俺に聞くんですか？」

「あ、そうよね。いきなりこんなこと聞いても意味わからないわよね」

「びつくりはしました」

「ごめんなさい。この前の話なのだけれど、私陽乃に見合いするようにつたのよ」

「はあ」

「でもその時陽乃つたらものすごい複雑な顔したのよ。今までも言ったことはあつたのだけれど、その時は普通に嫌がつてるだけだつたの。それで何かあるのかと思って陽乃の執事に聞いてみたら…」

雪ノ下母は俺に視線を向ける。俺は察したことを口にする。

「…俺の話が出てきたと言うことですか？」

「そうなの。これまで陽乃のそんな話聞いたことも、素振りを見せたこともなかったから驚いてしまつて。それで気になったものだからつい…」

いや、ついって。そこで俺の所に来るか普通。行動力が斜め上じゃないかこの人…。陽乃達から聞いてイメージしていた人と全然違うぞ。

「直接は聞かなかつたんですか？」

「だつてあの娘、私のことあまり好きじゃないでしょう？ 絶対話してくれないって

思つて。だからあなたに会つて聞くことにしたのよ」

確かに陽乃が話すとは俺も思わないけど、俺に聞きに来ることに繋がる意味はわからない。でもこうやって顔を合わせる事ができたのはチャンスだ。もともとこの件は最悪タイムマンはるつもりだったし、ここで逃げたら一生後悔するだろう。戦え、俺。

「その、陽乃のお見合いをなしにしてください」

俺は頭を下げて雪ノ下母に頼む。

「なぜかしら」

「陽乃が苦い顔で嫌だつて言つてました。やめさせるつて約束もした。ぶつちやけ俺自身がさせたくないつてのもあります。けど一番は、陽乃には普通の笑顔でいてほしいから。あんな張り付けた、苦しそうな笑みはさせたくない。そのためなら俺は色んなもの敵に回しても構いません」

俺は言い終えると雪ノ下母の目を見る。しばらく沈黙が続くが雪ノ下母が口を開く。

「そう。わかつた」

「……………へ？」

「陽乃のお見合い取り消すわ」

雪ノ下母は淡々とそう答えた。表情は心なしか柔らかい。あれ？ あつさりすぎやしませんかね。俺はもう二波瀾くらいあるかと思つていたのですが。

「にしてもやっぱりあの子いい人見つけてたのね…。そうならそうといってくれればいいの。そうしたら見合いしろなんて言わないわよ」

あつけない幕引きに呆然とする俺をよそに、雪ノ下母は何かをボソボソと呟いていた。その独り言は俺の耳に届くことはなかった。そんな俺はすんなり雪ノ下母の返答を飲み込むことができず確認する。

「あの、本当ですか？」

「ええ、もちろん」

「なんか、あつさりですね」

「それは、娘があんな顔した理由もはつきりしたし、見合いさせる必要もなさそうだから…」

そう雪ノ下母は言った。なんとというか、この人もしかして…。

「あの、つかぬことをお聞きしますが」

「なにかしら」

「…：娘さん達、大好きですか？」

「当たり前よ。私が生んだ娘だもの。嫌いなわけじゃないじゃない。昔から家のこと強いてしまってるせいか嫌われているけど。でも仕方ないのよ、家のことをないがしろにするわけにもいかないし…。あ、だからといってあの娘達をないがしろにしてるってわけ

じゃないのよ？ いや、結果的にそうなってしまうているのかしらね……」

雪ノ下母は頬に手を当ててため息をつく。この人はこの人なりにあいつらのことを考えているのか。不器用で上手くできてないみたいだけど。そのせいであいつらも誤解してるんじゃないのか？ 近すぎるからこそ、言いにくいことや聴きにくいことがたくさんある。結局ただの意志疎通不足なのではないだろうか。

「い、板挟みで大変なんですネ……。あの」

「はい？」

「ちゃんと娘さん達と話してみてもいいですか？ 自分の思ってること言つて、あいつらの思つてることも聞いて。互いの誤解や無知を解消すれば、きっと改善するって俺は思います」

「確かにそうね。でも、あの娘達の前に出るとつい強がってしまったって素直になれないのよ。……けどそれでなんとかなるなら頑張るべきよね」

なんか雪ノ下と陽乃を混ぜたような人だな。まあ母親だし当然か。店員がやって来て注文していたらしい商品をおいていく。紅茶のいい香りが漂い出す。この人が娘思いなのはわかったが一つだけ腑に落ちない点があるので聴いてみる。

「そう言えばなんで陽乃に見合ひさせようとしたんですか？」

「私、見合ひ結婚なのよ。親にするように言われて、最初の頃はあまり気が進まなかった

のだけれど今こうやって幸せになれてる。だからあの娘も思ったのだけれど、私の物差しであの娘の幸せを考えるべきではなかったわね」

「そうだったんですか」

別に家柄どうのこうので見合いを勧めていたわけではなかったのか。この人はこの人なりに陽乃のことを考えていたのだ。しかし陽乃の思いにまではたどり着けなかった。なんというか、親子つてのは難しいんだな。ずっと育ててきたからって何でもわかるわけではない。ちゃんと話すべきなのだ、親と子は。きつと俺と親父達も…。

「でも比企谷さんがちゃんとした人でよかったわ。手を汚さずにすんで」

「え……」

突然とんでもないことを雪ノ下母が言うので、手に持っていたカップを落としそうになる。

「陽乃がたぶらかされているのではないか確認したかったのよ。もしそうだったら全力で潰してたわ」

そう言つて雪ノ下母は笑う。やっぱ怖いわこの人。あ、でも陽乃にもこういうところよな。雪ノ下が彼氏連れてきた時とかこんな風になりそう。

「わかりませんよ。俺がいい人なんて証拠ないでしょう?」

「私、人を見る目は自信あるのよ。それにさっきの言葉を聞けばね…」

「……」

そう言えば気合い入ってかなり恥ずかしいことを言った。しかも当人の親の前で。思い出して顔が熱くなるのを感じる。

「さて、聞きたいことも聞けたことだし出ましようか。自宅まで送りますよ」

「いえ、そこまでしてもらわなくても」

「でもここ何処だかわからないでしょう?」

「あ……」

「いいのよ、私が連れてきたのだし気にしなくて」

「では、お願いします」

店を出て車に乗り込む。俺が住所を伝えた後、ゆっくりと発進した。しばらくして窓の外が見慣れた風景になる。そして一つの家の前で停まった。礼を言って降りた後、外からもう一つ気になっていたことを聴く。

「あの、そういうば今日なんで俺がいる場所わかったんですか?」

「……ふふつ、秘密、よ」

「え……」

呆気にとられる俺を置いて車は去っていった。ゆ、雪ノ下家ってそんなこともわかってちやうもんなの? 信じ難いがそうなのだろうか。俺はあれこれ不思議に思いながら

玄関を開けて家に入る。

「ただいまー」

俺の声を聞いてか小町がとたとたやつて来た。

「おかえり！」

「おう」

「会えた？」

「…ん？ 何が？」

「あれ？ 陽乃さんのお母さんと会わなかったの？」

「いや、会ったがなぜお前が知っている？」

「お兄ちゃんが出た後電話がきたから、お兄ちゃんが行くって行ってたところ伝えて…」

「…なるほど。それであの人俺がいる場所わかったのか」

じゃあなに、普通に小町に聞いてたから知ってただけで全然すごい理由でもないじゃ

ん。秘密って、俺あの人にかかわられただけ？ 親子揃って…。

「どしたのお兄ちゃん」

「いや、別に、似てんなーって思ったただけだ。ちよつと疲れたから俺寝るわ」

「うん、わかった。晩御飯前に起こせばいい？」

「頼む」

「了解です！」

俺は着込んでいた服を脱ぎ捨てベッドに倒れこむ。そして目を閉じた。

小町に起こされ飯を食って部屋に戻ると、携帯のランプが点滅しているのに気付く。画面をつけると陽乃からの着信だった。その通知を押して電話をかける。

「あ、八幡！」

「ん？ どうした？」

「どうしたじゃないわよ！ お母さんに会ったんだって？」

「ああ、話したのか？」

「うん。さつき雪乃ちゃんと一緒に呼び出されて何事かと思っただけ…。最後に私だけ残されて八幡の話出てくるし。正直今も整理ついてなくてぐちゃぐちゃよ」

「見合いもなしって聞いたか？」

「うん」

「俺から言うべきことじゃないと思っただけだから連絡しなかったんだが、すまん」

「いや、八幡の言わんとすることもわかるからいいんだけど。それよりシヨックという

か、やるせなさの方が大きいのよ」

「とうとう？」

「だって私が長い間一人で抱えてたものが、ただの意志疎通不足からくる誤解のせいだなんてかなりくるものあるわよ。まあ本当はちゃんと愛されてたつて知ることができたのはすごく嬉しいけどさ」

「そうか。俺は…、どうなんだろう…」

「八幡の両親？」

「ああ、俺は親父やお袋にとつてなんなんだろうって思つてな。お前のことがあつたからもしかしたらつて、でもとてもじゃないけど聴けないぜこんなこと」

「そう……」

「なんか悪いな、しみつたれた感じになつて。ちよつと風呂でも入るわ。かけ直す」

「いや、ゆつくりでいいよ。八幡のタイミングで。またね」

「またな」

俺は電話を切り着替えをもつて部屋を出る。すると目の前に、親父がいた。

「お、おお。ふ、風呂わいた、ぞ」

「わ、わかつた」

電話聞かれたか？　かなり気まずいので急いで風呂へと向かう。

「やっぱり待て、八幡」

「なんだよ」

「話を、しよう」

「なんの？」

「……頼む」

「……………わかったよ」

俺達はリビングに行く。小町もお袋も自分の部屋にいるのか、俺と親父の二人きりだ。テーブルを挟んで向かい合って座る。

「さっきの電話、聞いてたのか？」

「ああ、偶然だが。それで、な」

「なんだよ」

「少し俺の話を聞いてくれて」

親父は一息つくくと独白を始める。

「お前が小学生上がってしばらくしてからだったか、お前の雰囲気は急に変わった。俺も母さんも学校で何かあったのか、俺達があかしてしまっただかたたくさん話したんだ。でもお前が何も言っただかたかたから問題ないのかと思っただかたかた」

「ただそんなお前にどう接していいかわからなかった。そんな時だった、お前が俺達の

誘いを断ったのは。あの時無理にでも誘うべきだったのか正直今でもわからない。しかしそこから俺達とお前の間に明確な距離が生まれ始めた」

「俺達も仕事が順調にいきだして家にいることが少なくなつた。だからお前がボロボロになつているのにも気づけなかつた。いや、違うな。俺達はお前から仕事に逃げたんだ。実を言うとお前がひどい目に合つていたと知つたのは最近だつた」

「俺達は本当に後悔した。なんでもつとお前に踏み込まなかつたのかつて、嫌われるくらいしつこくしておけばよかつたつて。でも全部手遅れで、お前はたつた一人で乗りきつていた。それを強いてしまつた」

親父は頭をテーブルに擦り付ける。

「本当に、すまなかつた。許されるとは思つていない。ただ今まで何もしてやれなかつた分を、これから受け取つてもらえないだろうか。虫のいい話だつてことはわかつている。言い訳ばかりなのもわかつている。でもそうでもしないと、俺達はお前に合わせる顔が、ないんだ。お前の家族だと、ちゃんとと言えるようになりたいんだ。本当に、すまん」

親父は言い終わつても顔を上げない。すぐに何か答えることはできず、しばらくの沈黙の後俺はそんな親父に感情をぶつけることしかできなかつた。

「今更、何謝つてんだよ」

「…すまん」

「今そんなこと言われても遅いんだよ！俺がどれだけ苦しんだと思ってるんだよ！」

無理矢理親父の胸ぐらを掴む。親父はただただ申し訳なさそうな顔をするばかりだった。でもおそらく俺がここで親父を責め立てるのは間違っているのだろう。俺に踏み込めなかったのが親父達の親の罪なら、親父達を頼らなかつた、手を伸ばさなかつたのは俺の子としての罪なのだ。親父達も俺も、両者がきつかけ作りをしなかつただけ。きつと俺が決めつけず相談の一つでもすれば、親父達が諦めずに踏み込めば、こんなことにはならなかつたのだろう。結局ただそれだけなのだ。

「悪い、かつとなつた」

「いや、殴られても仕方ないと思ってるから。逆に、殴らないのか」

「そんなことするわけないだろ。でもわりい、ちよつと外出てくる。ちゃんと帰ってはくるから」

「…本当か？」

「ああ、一人になりたいだけだから」

俺はリビングを出て着込み、携帯をつかんで家を静かに後にする。しばらく歩き、近くの公園までくる。夜中といいこともあつて人は全然いない。冷たい空気だけがそこにはあつた。俺はどかつとベンチに座るとため息を吐く。空には満月が浮かんでいて、

月明かりが俺を照らす。

陽乃のいつていたことがわかった気がする。あいつもこんな気持ちだったんだろうか。いや、今もなのかな。俺は携帯を出し履歴の一番上を押す。数回コールがなつた後に声が聞こえる。それに俺は一言だけ返す。

「今から会いたい」

そして彼と彼女は……

電話をして少し時間がたった頃、車のドアが閉まる音が遠くから聞こえたかと思うと公園の入り口の前を一台の車が通りすぎる。そして陽乃が公園に入ってきた。俺は立ち上がったて手を挙げる。陽乃はそれに気付くと俺のところへやって来る。

「悪いな、夜遅くにこんなところまで」

「場所はここでもいいって言ったの私だし別にいいよ」

「帰りは？」

「電話したらさっきの車がくる」

「そうか」

「にしてもびつくりした。急に会いたって」

「まあ、そう思ったから……」

正直勢いで電話してしまったところもある。歯切れの悪い俺の顔を陽乃は覗きこむ。

「なんかあったの？」

「ああ、あの電話親父に聞かれてな」

「え……」

「親父と話したんだ。というか親父の話を聞いた」
「そっか」

陽乃はそれ以上は何も言わない。俺は吐き捨てるように笑って言う。

「俺も、陽乃と似たようなもんだったわ。今じゃお前の言つてた複雑な心境が馬鹿みたいに理解できる」

俺はベンチに座り背もたれに思いきり体重をかける。それに続いて陽乃も俺の左横に一人分のスペースを空けて座った。

「なかなかきついでしょ」

「ああ、これはやばいな。今までなんだったんだよつて、色んなもん蹴飛ばしたくなる」

「私は既にごみ箱蹴ったわよ」

「……スケール小さいな」

「うるさいわよ」

二人で夜空を眺める。満月が明るくて星はあまり見えない。さつきよりも高い位置に月はあった。

「小町に、悪いことしたな……。あいつはちゃんと意思表示してたから上手く出来てたんだ」

「私も、無理する必要なかったのかなー」

「なんだったんだろうな、俺達」

「確かに。でもあの苦難があったから私達は今こうして一緒にいるのよね」

「そうだな。何もなかったら俺が部活にはいることもなかっただろうし……」

「あの日、ああやって私達が話をすることもなかったかも」

「でもそれはそれで違った何かがあったんだろうけど……」

「今更そんなこと言ったって仕方ないけどね」

「まあな」

俺達は互いに顔を見ることなく話を続ける。しゃべる度に白い息が出るようになってた。

「八幡はさ、これまでをやり直したいって思う？ 辛いことは忘れて、上手くいく方法だ

け覚えててさ」

「どうだろう、その人生はさぞ愉快だろうな。でも俺はいいや」

「どうして？」

「なんだかんだ今じゃ救われてなんかなくなってるから」

「あはは、そっか。私も、今こうしていられるからなんか色々許せちゃった」

様々な出来事が絡み合って今がある。陽乃と出会い、友達になって、好きになることができた。こうなるには過去の何が欠けてもダメなのだ。

「本当だな。今が好きだから、過去の全てを許せる」
「うん」

そして、そう思えるくらい隣にいる陽乃の存在が大きくて、俺は陽乃に救われている。過去は許した。今は大切。だから、この先の未来は……。

「もう、こんな失敗はごめんだな。二度としたくない」

「そうね。私も」

少しの沈黙が流れる。冬の夜は虫も鳴かないので異様に静かだ。俺は一言でその静寂を壊す。

「陽乃、好きだ」

「え……」

「俺はもう間違えたくない。伝えたいことを伝えずに後悔したくない。俺は陽乃が好きだ。お前には俺の隣で笑っていてほしい。お前とずっと、肩並べていたい」

俺は思っていたことが堰が切れたように言葉となって溢れだす。陽乃の方は向けないので相変わらず月を見ているが。少しして陽乃はゆっくりと口を開く。

「…私さ、好きになれる自分を見つけて前に言ったじゃない?」

「ああ、覚えてる」

あの時の陽乃は格好よかったから、忘れられない。

「この前ね、やっと見つけたんだ。好きになれる自分」

陽乃はそういうと一つ間を置いて続けた。

「…私も、八幡が好きだよ。八幡の横で笑っていたい。ずっと隣にいたい。なんの誤魔化しのないこの純な気持ちに気づいた。私の中にも、純があつたの。私は八幡が好き、そして八幡の隣にいる私も一緒に好きになれる」

それを聞いた俺はまだ陽乃の顔を見れずにいた。なんて言えばいいのかわからない。嬉しいといえればいいのか、改めて告白すればいいのか。ごちゃごちゃといろんな事を頭を埋め尽くす。すると不意に腕の服をちよんちよんと引つ張られる。

陽乃の方に顔を向けたと同時に、唇を奪われた。

俺は驚くが身動きがとれず目を見開くことしかできない。視界は陽乃でいっぱい、体は熱く、鼓動は早くなっていく。ごちゃごちゃしていた頭は一気に真っ白になった。

どれくらいそうしていたか、たつぷりと時間がたつた後陽乃が離れる。俺は咄嗟にまだ熱の引かない唇を押さえる。

「お、おま、陽乃、なにして…」

「何って、キスよ」

「え、い、いきなり」

「どうせ八幡ごちゃごちゃ考えてたんでしょ」

「まあ、今じゃ真っ白だけど」

「別に気のきいた言葉なんて要らないわよ。八幡の思いは私に届いたし、わ、私の思いも届いたでしょ？」

「おう、ばっちり」

「ならそれで充分よ。その、二人ともずっと一緒にいたいなら、一緒にいればいいんだから」

陽乃は少し照れたように言う。

「そうだな。それで充分か」

俺は左手で陽乃の右手を掴む。陽乃は少し声を漏らすがしつかり指を絡め握り返してくる。いつの間にか一人分の空間はなくなり、肩がくつつく位の距離になっていた。

寄り添う二人を月が照らす。

「じゃ、また今度な」

「うん、暇なときわかったら連絡するから」

「待ってる」

手が離れ、陽乃は車に乗り込む。車はゆっくり発進し、徐々にスピードをあげていく。俺は車が見えなくなるまで見送った。

「帰るか」

まだ手に残るほんのりとした温もりを感じながら家への道を歩く。そういえば陽乃と話した帰りもこうやってこの道を歩いたな。あの時と同じで今もだらしな顔してんだらう。少し歩みのペースを上げ、落ち着かない気分を押さえ込む。気づけば家に歩いていった。

「ただいま」

静かに家に入る。自分の部屋に服を置いて洗面所へ向かう。ふと鏡を見ると口元にちよつとだけ赤い色が着いているのに気付く。

「あ、これ陽乃の口紅……」

それを見てさっきのキスを思い出し顔が熱くなる。自分で気付いてよかった。指摘なんかされたら死ぬほど恥ずかしくなる。俺はそれを拭き取り、手洗いを済ます。出ようと戸に手を伸ばすが、突然開けられたせいで手は空を切る。

「小町か」

「わ！ お兄ちゃん、いつの間に帰ってきたの」

「今さっきだ」

「その、お父さんから聞いたけど…」

小町は心配そうな顔をして俺の顔を伺う。

「ああ、もう大丈夫だよ」

「本当？」

「本当」

「そっか。よかった」

小町は安堵の息を吐く。俺はそんな小町の頭を撫でる。

「その、今まですまなかった…」

顔を少しあげて小町は俺を見る。そして笑みを浮かべた。

「うん。でも、何の謝罪かは聞かないで置いてあげる」

「そうか、ありがとう。これからは…」

言葉が続けようとする俺の口を小町が押さえる。

「それ以上はいらないよ。何年妹やってると思ってるのさ。これでも地球上で一番お兄ちゃんと長くいるのは小町だよ。今更そんなことで怒ったりしないって」

「あはは、かなわねえな。サンキュー小町、大好きだぜ」

「うへ、キモい」

「あれ、返答おかしくない？　なんで？」

「調子に乗るんじゃないやありません。リビングにお父さん達いるからさっさと行ってきなさい」

「へーい」

最後に目を合わせて笑いあう。洗面所を出てリビングに入る。ソファーに親父達は座っていた。俺が入ってきたのに気付くとはっと顔を上げる。

「八幡……」

「ただいま」

「お、おかえり」

気まずい沈黙が流れる。なんて言葉をかければいいかわからず口を開くことができない。目一杯考えた末、言葉を絞り出す。

「その、もう大丈夫だから、ちゃんと整理もついたし……、親父達を恨んでるわけでもないから。俺も、親父達を頼らなかつた、悪いところがあるし……、すまん。お互いさまだからあんまり気にすんなよ。これから、たくさんしてくれるんだろ？」

「ああ、もちろんだ」

「ありがとう、八幡」

親父が俺に飛び込んでくる。俺は咄嗟にそれを避けたので親父は壁にぶつかる。

「なんだよ急に」

「あたた、抱きしめたくなくなって、つい」

「いや恥ずかしいから」

親父の方を向いて話していると後ろから温かいものに包まれた。

「お袋もなにしてんの？」

「が、我慢できなくて？」

「だから恥ずかしいんだって」

「いいじゃない、別に知らない人に見られてるわけでもないんだし。今日くらい……」

「はあ」

全然離れないので諦めていると、リビングのドアが開いて小町が入ってくる。そしてこの異様な光景を見て固まった。

「何、してんの？ 皆して」

「俺にもよくわからん」

「ふーん、でも小町も混ざっとくべきかな？」

「え、ちよつと待て」

「とう！」

俺の制止を無視して小町は俺の懐に飛び込んでくる。俺はそれをなんとか受けとめる。暑苦しい。

「あー、もうわかったから、いい加減離れろ」

俺は全力で振りほどく。テーブルの椅子を引いて座ると、向かいの席で知らないうちに親父が酒を飲んでいった。

「いつの間……」

「だって俺だけ仲間はずれだったから……、お前も飲む?」

「飲むわけないだろ、未成年だぞ」

「でもこれお前のお土産のやつ」

「あ、ほんとだ。今まで飲んでなかったのか」

「お前とちゃんとしてからこの酒は飲もうって決めてたからな」

「へー。で、早速飲んでんのか」

「うまいぞ、飲むか?」

「だから飲まねーよ。……あと数年待て」

「おお、いくらでも待つ」

親父はそういうと笑った。俺は風呂に入っていないことを思い出しリビングを出ようとしてドアに手をかける。そこで最後に言うことを思い付き、振り返って言う。

「そういうえば、俺彼女できたからそのうち連れてくる」

俺は言い終えるとそのままリビングを出て風呂へ向かう。

その日、この家でできて以来最大級の絶叫が轟いた。お隣さん家もびつくりするくらい
の。

元旦の神社は人でごった返している。着物を着ている人や子供もたくさんいて音も
風景もすべてが賑やかだ。

「待ち合わせ場所ミスったかな」

俺はついそうごちつてしまう。身動きとれないほどではないが、人の往来が激しくて
人を見つけるのは難しい。

と、思っていた時期もありました。前から明らかに周囲の視線をかき集めながらこつ
ちに向かつてきているやつがいます。

「八幡！」

「よう陽乃。あけましておめでとう」

「あけましておめでとう、今年もよろしく」

「よろしく。にしてもよく俺のいる場所わかったな」

「私だもの、当然よ」

「はは、さいで」

俺達は自然と互いの手を握り指を絡め合って歩き出す。遠くからは鈴の鳴る音が聞こえる。

「その着物すげえ似合ってるな」

「ふふつ、ありがと」

「そういえば元旦は家の用事とかたくさんあるんじゃないのか？」

「お母さんに八幡と初詣行きたいって言ったらすすんなり許してくれたの」

「へー、本当にいいのかそれ。年始の挨拶だろ？」

「うーん、でも本格的なのは明日からだし」

「そうなのか。ま、適当に頑張れよ」

「終わった後八幡がストレス発散付き合ってくれてくれるんでしょ？」

「え、聞いてない……、けどいくらでも付き合ってるよ」

「やった。楽しみね、何しようかな」

そんな笑い合う二人の歩幅はぴったり一緒でずれることはない。きつとこれからもずれることはないだろう。

そしてその肩が、その手が離れることも、きつとない。

—
終
わ
り
—